

---

# 龍多とぐだぐだ部活動

火だるま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

龍多とぐだぐだ部活動

### 【Nコード】

N5050U

### 【作者名】

火だるま

### 【あらすじ】

魔法技術がある地球のとある学校で新しくできた部活動。

その部は名前も決まっておらず活動内容も決まっていない（一応認めてもらうために適当につけた活動内容はあるが）。

部長 琥ノ村龍多くのむらりゅうたは現在部員を募集中だ。

一応部員はいるが、それでもまだ足りない。

それに乗まった部員は、何かしらの悩みを持っているのだ。

部員確保すためにと、努力していたら、いつの間にか部の活動内容は部員の悩みを解決することになっていた。

最初は双子姉妹。

無事問題を解決して部員確保できるか。

## プロローグ

魔法があれば何でもできると思えますか？

それは間違っていないが、すべてがそうであるとは限らない。

地球に魔法がという技術が生まれたのはかなり前のことで正確な時間は分かっていない。

魔法によって生活が便利になったかと尋ねられるとイエスと答える人は大体半分程度。

なぜなら科学が発展してきた地球では、手から火を出して料理を作るよりもコンロを使って作ったほうがはるかに楽だ。

水を作り出すのも水の魔法を唱えるよりも蛇口を捻ったほうが疲れないし速い。

なら、なぜ魔法が廃れないのか。

これだけ、活躍の場がないのならいらないじゃないかとも思える。地球の魔法は自分の身を守ったり、傷を癒したりするための物だと言っても過言ではない。

魔法がなければ怪我したら、月日が癒すのを待つしかないが、高レベルの魔法を使えばそれすらも一瞬で治す事ができる。

一番の魔法が廃れない理由は少しずつ増え始めていく魔物。

どうやって生まれているのかは未だに解明されていないが、現在も魔物は増え始めている。

人を襲うような凶暴な魔物は今はあまりいないが、それも時間の問題かもしれない。

もしものときのために魔法は自分の身を守る武器として今ではどこの学校でも基礎程度なら教えられている。

地球で魔法はかなりの力を得てきている。

結婚するときに魔法の強さを重視するなんてこともおかしくはない。

同じ人間でも優秀な魔法使いをばんばん世に出す家とそうでない

家とがある。

魔法が見つかった当時はそれほどなかったと言われている魔法使いとしての力の差は現状でははつきりとしてしまっている。

『家』の家は魔法の専門の家なんて呼ばれていることもある。ただ、そう言った優秀な家は優秀であるために、変な因習が生まれた所もある。

強い魔法使い、世間で活躍できる魔法使いを育成するために、虐待に近い教育で育てたり、中には違法に悪魔を召喚して契約を結び将来を安泰にしてもらうなんてこともある。

とにかくそういう醜い人間達にとって大事なのは『家』を守ることだけで、そのためならなんだってする。

そんな人間が増えてしまっていること。

これが、魔法があることでの良いことと悪い事。

そんな時代に生まれた琥ノ村龍多は日々をつまらなそうにしている人を楽しませようと思い、部活を作った。

学校生活をつまらなそうにしている人を片っ端から連れてきて、出上がった部。

なんの目的もない部。

そんな部に人が集まりできた部活。

なんの事件もない日常を送るはずだった龍多と『家』の人間に振り回される部員との大変だけど、楽しい日々の始まりだ。

## 一話 面倒な部員達

「初の部活動だひゃっほうー！」

ある魔法学校の部室棟の三階 一番端の部室で。

この部の部長の男 琥ノ村龍多くのむらりゅうたが両手をあげて喜んでいたが、部室にいるのは一名のみ。

会議で使うような長机二つをくつつけてできている机が部室の中心に置かれている。

その机の隅に座っている現在来ている唯一の部員一名も喜ぶことなくどこか冷めた様子で龍多を眺めていた。

その状況を見て、龍多は右に左に移動した後、机を叩いて、叫ぶ。

「何で一人しかいねんだよ！ 部員はあと二人いるのに。今日から始めるって言ったのに……何でだよ！」

龍多の怒りの言葉にゆっくりと顔を向け、冷たい口調で返す。

「知りませんよ」

女の子はふうと息をつく。

「お前はさすがだよな。時間守って、偉いぜ」

「そもそも、私は契約を結んでいるのですから……時間を守るのは当然じゃありませんか？」

無表情の顔の中に、僅かに睨む力が加わる。

契約という言葉に龍多は顔が引き曇る。

「どうしたんですか？」

すかさず女の子の追求が入り、龍多は、

「……」

だんまり。

何も聞こえていないかのように静かに構えている。

それからの女の子の動きは速かった。

一秒で鞆を持ち、席を立つ。

その様子はどうみたって帰る気満々だ。

「お、落ち着け。いいか、帰るなよ……」

慌てて龍多は静止の声をあげた。

席を立ち部室の外につづくドアの前に移動した女の子　名前は

にしきあまな  
錦天菜。

小学生のような小柄な体型の女の子。髪型なんて特に気にしていない天菜は、動きやすさを優先にしたショートカット。

ぼさぼさと、まるで寝起きのような髪型だ。もちろん寝癖もつきまくってる。

肌は透き通るような白く綺麗なもので、白すぎて体調大丈夫？と聞きたくなるほどだ。

天菜は自己主張の激しい寝癖の先をつまらなそうに弄くり、

「早くください」

「わ、分かったよ……持って来たっけなあ」

龍多はボソツと呟き『給料』を探すため、鞆を漁る。鞆の中にはなかったので部屋のあちこちを探し回る。

だが、龍多はちらちら天菜の方を見て、天菜が帰っていないか確認している。

何度も見ては探してを繰り返しているので『給料』を探すのに時間が掛かっている。

天菜のほうを見て、顔を戻す。

と、どこまで探したかわからなくなりもう一度天菜に顔を向ける前に探していた場所を探すをくり返している。

ほとんど探せていない。

見かねた天菜は嘆息したあと、「帰りませんから」と言い席に座りなおす。

その様子を見て、龍多は安心して搜索に全神経を向ける。

搜索から数分後……。

(やっぱ、ないよ……やべえ)

結局大して物が無い部屋のどこを探しても無かった。

もしもばれたら天菜に逃げられてしまう。

こほんと咳払いしながら龍多は自分の席に座り、

「では、会議を始める」

誤魔化すために適当に話し始める。

「そうですね。ところで給料のほうは？」

「ああ、寮に忘れ　ハッ！」

天菜の策略にまんまと引っかかり、ここになんかことがばれてしまった。

「待つてタンマ！ 時間を戻れ！ ネクストイヤーズ！」

本人は英語で『時間を戻れ』と言っているつもりだ。  
両手を天高くあげて奇声を発している龍多を白目で見やる。  
だらだらだら。

龍多は焦ったときにでる嫌な汗を感じながら、ゆっくり天菜に顔を戻すと。

ニコリ。普段は笑うことの少ない天菜が、笑った。  
龍多は好感度でもあがったか？ と考えていると。

「それじゃあ、さようなら。また来年」

冷たく言い残し、さっきと同じ動作で部室を出て行く

「明日！ 明日ぜってえー持ってくるから！ せめて明日には来てくれ！」

「分かってますよ。それでは」

素早い動作で部室の出口まで移動。

龍多はなんともいえない微妙な表情でそれを見ていた。

帰ってほしくはないが、自分のせいだと分かっているのでどうしようもない。

「ぬおおおおーっ！ 一人はまじで勘弁してくれよ！」

それでもそれなりの大きさの部屋に一人残るのは寂しかったので叫んだ。

天菜はうつとうしそくにその叫びを耳にいれ、考える。

何か言ってから帰ろうか、それとも完全無視で帰ろうか。

悩んで最後に言葉を残す方を選んだ。

「そのうち佐々（ささ）波さんなみが来ますよ。だから、静かにしてください。どうするんですか。よく分からない奇声をあげるモンスターが部室棟に住み着いた、なんて噂が出たら。魔法戦闘部隊に依頼が行きますよ？」

魔法戦闘部隊は魔法を主軸に戦闘をする、国を魔物から守るための部隊だ。

「……前に一回会ったなあ」

懐かしい事を思い出すために目を細めていた。  
その様子に身体全身で呆れたと肩を落とす。

「……くれぐれも迷惑をかけない様にしてくださいよ。創部とともに廃部になっても知りませんから」

「なんか語呂がいいね。創部廃部！ いや、待てよ。廃創部！ つていうとなんか部活でありそうじゃないか？」

声が無駄にでかい。

天菜は耳を押さえて、舌打ちする。

「今すぐ潰れてしまえばいいですね。そういえば、私が抜けたら部員が足りずに廃部になりますね。退部届けください、部長」

悪態をついたあと小さな手を龍多に向ける。

「ごめん！ 俺が全面的にわるうございましてだからそれだけは勘弁

してくださいませ！」

本気で頭を下げて謝る龍多。今の身長は天菜よりも小さい。そう悟った瞬間天菜の様子が変わった。

天菜は普段身長が低いことを結構きにしているので自分よりも身長のある人物が自分より小さいのを見ると……じゅるり。よだれが垂れそうだ。

天菜は龍多が頭を下げているのを見て、舌なめずりをする。その表情は嬉しいを超えて、恍惚と言ったほうが正しい。

「分かればいいんですよ。明日はかならず持ってきてくださいよ？」

僅かにだが声の調子も高い。あと機嫌もよくなった。

龍多はまったく気づいていないが。

「そう言えば、何で俺が管理してんだよ。別にお前に全部渡しちまえば」

それ以上は言わせないと天菜は龍多の言葉に被せるように口を開く。

「黙れ、このつぶれたゴキブリの下でつぶれたような男が」

「ん？ 今難しい言葉使っただろ？ 俺の頭が理解できなかったぞ？」

龍多の頭では今の暴言は理解ができなかった。

天菜はさっくり無視して続ける。

「もしも私がアレを持ってたら一日持たないでなくなってしまうま

す。だからあなたに預けているんですよ。理解できましたか？ そのアリよりも小さい脳で」

「おう！ あつたりめーだ」

ガッツポーズ。馬鹿にされてるとは気づいてない。

ちなみにアレ、アレと曖昧に言っているが別にやばいものではない。

天菜に支払う『給料』は魔法を材料に作るお菓子だ。

龍多の知り合いにお菓子作りをしている人がいて、その人がお菓子を週に一度送ってくるのだ。

送られてくる物の中に天菜の好きな飴玉も含まれている。

龍多は大して知らなかったがその人は魔法お菓子業界ではかなりの有名人らしく、その人のお菓子は中々買えないらしい。

だから、天菜と龍多はある契約を結んだ。

龍多がいらぬお菓子をあげる代わりに部に入ってもらおう。

龍多が一生懸命交渉した結果、こうなった。

天菜ははあとため息を吐き、弱めに睨む。別に天菜は本気では怒ってはいない。

むしろ楽しんでいる。

龍多が……というか自分より身長が大きい人間が小さい自分に頭を下げているのを見るのが最高に気持ちいいからだ。

「もしも明日も持ってこなかったら、当分来ませんから」

僅かに上擦った声で天菜はそう言い残し立ち去ろうとする。

龍多はそこでポンと思いついたように手を叩き、

「俺がいるんだから来てくれてもいいじゃん」

うんうんと一人かなり納得して天菜のほうを見る。

天菜と目が合う。なにやら力強い視線だ。が冷たさも感じる。身長は龍多よりも低いはずなのに大きく見えてしまうのはなぜだろう。

「あなたに何の価値がありますか？」

ふっと侮蔑を織り交ぜた瞳で龍多を射抜く。

最後に残したのは優しい言葉ではなく切れ味抜群の言葉だった。

「……」

冷たい風が部室に流れる。

心をざっくり一刀両断された龍多は机にぐでーとなつて半分涙目だ。

ぞくぞく。

天菜の背筋に口では表現できないような刺激が上ってくる。

もはやただのSだった。

「私が求めているのはあなたではなくお菓子です。ないのなら帰ります。では」

天菜は部室から出て行った。

龍多は放心状態から帰ってきて、部室を見回す。

誰もいない。

「まさか、ねえ……冗談だよねえ？」

龍多は天菜が廊下で待っているのだろうと考えた。

龍多が探しに行ったら驚かすために。

だから龍多は手でメガホンを作りながら、

「ばればれだぜー。だから、出てきていいよー」

……返事はない。

さすがに龍多も心配になってきた。

「そ、そろそろ、戻ってきてもいいよー！　というか戻ってきてください！」

もちろん既に天菜はいないので龍多の声は届くわけがない。

廊下にいるのは他の部の人で、龍多の声を聞き、何事だと話し合っているだけだ。

「実は飽あるよー！　……嘘だけどね」

存分に溜めてから嘘だと言った

独り言を虚しく繰り返す龍多。

「まじで帰りやがったあああああーっ！」

気づくのに時間が掛かりすぎだ。

龍多は地獄の雄たけびのように悲しい悲鳴で部室を震わせる。

「なんだよ！　俺が成績悪いからか！？　馬鹿だからか！　いいよーだ！　一人で遊んでやるからな！　混ぜてって言ってもまませねえーからなっ！」

そう言って龍多は部室の冷蔵庫の中から　まだ家具なく、仕方なく冷蔵庫を物置き場として活用している　トランプを取り出して、一人ポーカーを始める。

虚しさ極まりない。

二回ほど遊んで……トランプをばら撒く。

「コンピューター強えよっ！」

ちなみに龍多対コンピューター（龍多）でコンピューターのほうが勝ちました。

龍多は、あははと乾いた笑いを浮かべながら窓の外を見る。

三階であるここからは校庭がよく見える。

現在は放課後と言う事もあり、様々な部活が活動している。

中には魔法をメインで使う部活動もあり、グラウンドにはその魔法を使う部活が頑張って練習しているところだった。

校内での魔法使用は原則禁止。

が、部活動によってはそれも許されており、現在龍多の目の前校庭では赤やら青やらと様々な魔方阵が現れていた。

「魔法かぁ」

龍多はそれを見てから、はあと愁いを含んだため息を漏らす。

魔法。

炎、氷等様々なものがあるがまあ、どれも龍多には関係なかった。

「魔法〜、魔法〜、俺使えない〜。ふふ〜ん〜」

暇だったので、部室を巡るように歩きながら回りながら悲しい歌を口ずさむ。

本人の歌の通り、龍多は魔法を使うことが出来ない。

魔法を使うのに必要なものは知識 学校では知識を術式という

言い方で教えている と魔力だ。

両方を使う事により、初めて魔法が発動するのだ。

片方だけ物凄く優秀でもあまりいい魔法使いとは言えない。

龍多の場合術式を組み上げることができているが、圧倒的に魔力が少なく魔法として発動することが出来ない。

例えをあげるなら、国で一番最初に習うファイアボールという魔法がある。

この魔法は全魔法の中で一番魔力の消費が少なく、小学生でも二十発ほどは撃てる。

だが、龍多はそれを一発撃てば龍多の魔力は尽きてしまう。

だから、龍多は術式を組み上げてもそこに魔力を注ぎ込むことが出来ず、結果魔法が使えないのだ。

簡単な魔法を一発撃てる程度。0ではがないかぎりなく0に近い。(魔法使えない事を悲しく思ってるわけじゃないし、いいんだけどね)

どこか寂しそうな顔つきで視線を窓から外す。

時々魔法が使えたらなとは思う。

疲れたと息を吐き出し、席に座り鞆をあける。

さきほど見た時に気づいていたが入っているのは財布に携帯のみ。

「せつかく人が勉強してあげようかなあと思ってたのに……鞆め、いじわるなやつだぜ」

自分で置いて来たくせに責任をすべて鞆に押し付けた。

やることなくイスの背もたれにおっかかり手を首の後ろで組んで天井を見上げる。

誰も部に来てくれない。

もしかしたら嫌われてるのだろうか。

そう考えると心の中に冷たい風が吹いた気がした。

龍多はなんだか泣いてしまいそうだ。

と、そんな折に廊下を走る音が聞こえる。

なんだ、と思い龍多はイスから腰をあげ、入り口の方へ行く。

と、ドアが悲鳴をあげんばかりに開け放たれる。

この部室棟のドアはすべて押したり引いたりで開けることができるドアだ。

そのドアが目の前で勢いよく開いたのだ。

「龍多くん！ 助けてっ！」

どこか楽しげな声と共に入ってきたのは女子。

「あ、あぶねえ」

後一步踏み出していたらドアに潰されていた。  
脈打つスピードがあがっている。

落ち着くために深呼吸をしてから、

「どしたん、佐々波」

こんだけ焦ってるってことは風紀委員に追われてるんだなと予想しながら尋ねた。

ほとんど毎日がこんな感じなのである程度予想できる。

「風紀委員！」

単刀直入にそれだけを伝えて龍多の腕を取り、部室から連れ出す。  
龍多もまたかあと面倒そうに頭を掻きながら、口端をあげる。

部員が来てくれて嬉しかったのだ。

今乱入してきた生徒は佐々（ささ）なみ あかね波紅音という魔法科クラス（ちなみに龍多は普通科。天菜も魔法科だ）の女の子だ。

良い意味で捉えるなら元気、悪い意味ならうるさい女の子だ。

左側頭部からだらんと生えた尻尾のようなサイドポニー。さらに左目にかからないように左前髪を子供がつけていそうなさくらんぼの絵が描かれたヘアピンで留めている。

少し青に近い瞳の色など、特徴的な容姿をしている女の子だ。

スタイルは本人はさほど気にしていないが結構いい。

胸も大きすぎず小さすぎ、ウエストも細い。

普通科の生徒からは中々人気のある子だ。

紅音は龍多の腕を引っ掴み、部室から出て行く。

そのまま走っていき、

「あれ？ 風紀委員に追われてるなら俺関係なくね？」

龍多は紅音に合わせて走りながら気づいた。

部室に人が来てくれたのが嬉しく忘れていた。

「なんて言うかねー……道連れ？」

龍多の方へ向き、笑みと共にぺろつと舌を出す。仕草が子供っぽい。

今そんなこと考えている場合ではない。

龍多はすぐさま紅音の手を振り切ろうと力を入れる。

「離して！ 俺を今すぐ解放してくれ！」

だが、意外と力がある。

龍多はなんとか振り切ろうとしたら、腕に抱きつかれた。

「これで、逃げられまいっ！」

紅音がが自信満々な顔で声をあげる。これで振り切ることは不可

能になった。

同時に走ることもできなくなった。

龍多は風紀委員の折檻を想像して、がくがくふるぶると震えだした。

前は氷付けにされ、その前は屋上からつるし上げられた。

次はなんなのだろうか。考えただけで恐ろしかった。

そのせいで紅音の柔らかい胸が当たっている事にまったく気づいていない。

気づいていたとしても何もないかもしれないが。

「たーすーけーてー！」

ここにはいない誰かに助けを求めるが……廊下には誰もいない。

嵐の前の静けさ、平穩を壊す何かが迫っている……！

風紀委員のことなのだが。

「あはは、それは無理な相談ですなあ。二人で罰を受ければ罰半分  
！」

こちらも自分の胸が当たってる事なんて全然気にしていない。

紅音はニコニコと笑いながら断言していた。

抱きつくのを止めて、腕を組んでいる。

「だから、俺加担してないよねえ！？」

「加担、かつたん、栄養過多！」

理解できない変換だ。

あーもーと龍多が頭を悩ませていると、

「佐々波を発見しました！」

風紀委員のものらしき声が結構近くから聞こえる。

確認するために周囲を見回すと、すぐ目の前にいた。

ちよつど、

というか出会いがしらだ。

距離にして一メートルほど、あと一歩踏み出していたらぶつかっていた距離だ。

「ひゃーっ！ 見つかつちやっただよー！」

紅音はどこか楽しさが混じったような、焦りの声をあげる。

「え、ええと俺は関係ないから……と」

こそこそ逃げようとした龍多の首根っこを紅音はしっかりホールドする。

完全に体が密着している。

さすがに龍多も気づいたが、特に気にしていない。

「不純異性交遊………それにあんたは要注意人物の琥ノ村龍多！」

一つ罪状が増えてしまった。

「要注意ってなに！？ ねえっ！」

風紀委員は龍多の返事を聞き、指を突きつける。

要注意なんて言われる筋合いなんてない龍多はまだ怒鳴っている。

「あんた、一昨日私に抱きついたっ！！」

途端龍多は叫ぶ事を止め、

「……ああ、あれね」

思い出したように声を漏らす。

「また、あんたたちの仕業ね……逃がさないわよっ!!」

完全に龍多も共犯者だと認識し風紀委員は激怒に近い叫びをあげ、二人に飛び掛る。

その表情はまさしく鬼。捕まったら食われそつだ。

二人は分裂するように左右に避けて、風紀委員の攻撃を回避。そのまま二人は走り出す。

「龍多くん、なんで抱きついたの？」

声の端々に問い詰める感がある。

「いやあ、あん時はまじで風紀委員長がキレてさあ。命の危険を感じてたんだよ。で、近くにいた風紀委員　つまりさっきの奴に助けを求めたんだよ。あいつの後ろに隠れてぶるぶる震えてたんだよ。ま、そんなときにおもつきし胸を触りながら抱きついてた……らしい」

「らしい？」

はつきりしない言葉に紅音は首をかしげる。

「怖くてよく覚えてない。今じゃいい思い出だ」

「覚えてないのに？」

「あれ？ …… ってやべっ、来た！」

走りながら会話をしていると、大きな音を立てて駆けってくる風紀委員。

音で判断した龍多はもっと早く走るように紅音にアイコンタクトを送る。

「うわあ …… だからあんなモンスターを生んじゃったのか」

失礼な事を呟く。

「後で、委員長から謝つとけて言われて謝りに言ったのに …… 別にんなもん興味ないからって言ったら怒り狂って魔法連発されたんだよ。あんまりにも怒ってるから俺はそういう目的でやったんじゃないよと、はっきり伝えてやったのに …… 」

何が悪かったんだろっ。

悩んでいるとそれに答えるかのように紅音が発する。

「 …… ン、龍多くんは下手にいい訳しないほうがいいよ」

「どっか変だったか？」

「いや、変じゃないけどそれだと女として魅力がまったくないよって言ってるみたいなものだからねー」

「 …… 日本語って難しいなあ。俺英語得意だから外国いこっかなあ」

「あれで、得意だったらみんな得意だね」

龍多の方に残念な子を見るような視線を送る。  
送られた本人は気づいていないのか手を振っていた。

「まあ、とりあえず逃げよう。こうなっちまったら逃げるしかないね」

とりあえず階段を目指す。

現在二人は文科系部室棟の三階にいる。

龍多の作った部活の部室は二つある階段の中間地点あたりにあるのでどちらも近い。

さっきは片方の階段を使い、降りようとしたところで風紀委員に見つかってしまったのだ。

慌てて反対の階段へと足を進める。

二人は逃げるのには慣れているので風紀委員との距離をどんどん離して行く。

階段までついた二人は一段飛ばしで階段を降りる。

「廊下を走るなあああーあああっ!」

頭に怒鳴りが届く。

風紀委員が階段に到着したようだ。

魔法を使えば捕まえるのはラクだろうにまったく使っ気配を見せない。

それだけ冷静さが無いのだ。

それほど辱めを受けた怒りが強いのだ。

風紀委員は階段を駆け下りてくる。

「佐々波、隠れるぞ」

「あいあいさー！」

合図と同時に紅音は煙玉を投げる。

二人はさらに下の階 部室棟一階まで降りる。

龍多がどこに隠れようかと考えていると龍多の腕を紅音が掴む

「こつちだよっ」と叫び迷わずある場所に走りこんだ。

龍多の目が正しければ『男子トイレ』と書かれていた筈だ。

追ってきていたはずの風紀委員は近くにもいない様子だ。

うまく撤けた。

龍多は逃げ込んだ場所を確認する。

まずトイレなのは間違いない。だが、女子トイレではない。

その点は龍多としてもありがたいが、そうなると消去法で男子トイレが確定する。

第一男子専用の便器があるし。

一応断言するが紅音は女だ。男の子が女装しているわけではない。れっきとした女だ。

龍多は男子トイレをきよろきよろ見回してる紅音に訊ねる。

「なんで迷いなく男子トイレに入れるんだよ」

普通ありえないだろ、と付け足す。

紅音は「んー」と生返事を返した後。

「私は女ですからねっ」

ぶいとピースをしてきた。

龍多は余計に分からなくなりましたため息と共に言ってやる。

「だから、意味がわかんねえんだよ」

ちよつと言葉を強くして言うと紅音はピンと指をたてる。  
「説明タイムの合図だ。」

「だつてえー、私が女子トイレに隠れるのは普通じゃん。だから、男子トイレ」

「やべえぜ。今の説明だと俺の頭じゃ理解できないぜ」

考えてみたがいろいろごっちゃになってしまい、龍多は首を捻る。そんな様子を見て、ふっふっふと笑ったあと簡単に説明した。

「普通女の子が男子トイレに隠れるなんて思わないじゃん」

「ああ、なるほど」

ポンと手を打ち納得のポーズ。

「ところで風紀委員に追われるってことは何かしたんだろ？ 何したの？」

訊ねられた紅音はあははははと楽しそうに腹を押さえて笑い始めた。

「気になるじゃないか。早く教えてくれ。  
龍多は急かす言葉を言おうか迷うほどに笑い続ける紅音を見守っていた。」

十秒ほど笑った後、笑いすぎたことにより目元に涙が溜まった紅音が出来上がっていた。

「とりあえず落ち着くのを待っていたから大分時間がかかってしまった。」

目元を拭いながらようやく紅音は話し出した。

「別に故意でやったわけじゃないんだけどね。私がトイレ掃除してホースで水撒いて遊んで掃除したら、風紀委員の子三人くらいがやって来て、思いつきり水で滑っちゃったんだよ。それで私とその人たちに『ウォータービーム！』って叫んで水ぶっ掛けてあげたら、今のざまっすよ」

この学校のトイレ掃除はホースで水を撒きブラシで擦るだけだ。現状の打開には関係ないが、紅音は掃除を中断して現在の逃走劇を繰り広げているのだ。

紅音はやれやれだと肩を竦める。

「人の厚意を無駄にするなんて……人として駄目だねっ！」

紅音が偉そうに胸を擦らす。

龍多は一つ頷き、

「お前が人として駄目だろっ！ もろ故意にやってんじゃん！ ウォータービームとか……かっこいい技名までつけやがって」

「えー事故じゃん！ 故意と恋って読み方同じだね」

ぶうーと口を尖らせる。

「最初だけだよ！ そこで謝るかなんかしてれば、こんなことになつてねえーよ！ つーか何で笑ってたんだよ！ 面白い場所なかったじゃん！ 俺の期待返せっ！」

後半の紅音の呟きは無視して龍多はひたすら喚く。

「く、く……はっ……！ や、やめて思い出させないで！ く、く  
く……あはははは！」

紅音は龍多の言った言葉で、再び笑い出してしまった。

腹を押さえて笑いまくってる。さすがにトイレなので転げまわったりはしていないがトイレじゃなかったら転げまわりそうだ。

言いたいことは山ほどあるが落ち着くまで待つ。

「んで、何が面白かったんだよ」

落ち着き始めたので強い口調で訊く。

やや、仏頂面なのは気のせいではない。

声もちよつと刺々しい。

紅音は説明しようとしたときにまた笑いそうになって、龍多に睨まれる。

さすがにこれ以上は怒られる。そう感じ取った紅音は笑い出した衝動を抑え、「こほん」と咳払いを一つして、

「それがね、三人が転んだのは同時でしかも格好も同じで、それでぶぶつ、くっ！ 表情がすっごい面白かったんだよ！」

「ど、どんな感じだったんだ？」

「……口では説明できないかなあー？」

もったいぶるような口調。

さらに気になった龍多は次の意見を提案する。

「じゃ、じゃあやってみてよー！」

「ええー！ 無茶振りだよ！ 無茶振りブレード禁止！」

「こゝこゝまで来てまさか」

「だってすつごい恥ずかしい顔なんだもん。それを龍多くんに見られるのはちょっと……」

恥ずかしそうにもじもじする。

「俺気にしねえから！」

「私が気にするの！」

「じゃあ、俺見ないからさっ！」

「意味ないじゃん！」

押し問答を繰り返していたが、やがて龍多は、

「うおおおおー！ なんだこのモヤモヤ感ー！ っ！」

頭を抱えて高らかに叫んだ。

と、そこでこんなことやってる場合じゃないと頭を振る。

龍多は叫んでる途中に当初の目的を思い出す。

「俺たち風紀委員から追われてんだよな。俺、関わりたくねえな……なんもしてねえーし」

なんもしてねえーしと言った瞬間、紅音の瞳がキラッと光る。

「共犯じゃん。私達は……世界を股にかけて、悪戯をする。漆黒の暗殺者（仮）！」

びしっと指を突き上げる。

龍多は目を輝かせる。

「かつこいいな……って、でっちあげだ！ 俺は無実だ！」

一瞬流されそうになったが、なんとか気づく。

「でも前の時は一緒に悪戯したじゃん。……先週だっけ？」

ぐりぐりと肘で龍多を突く。

やっちまったと言った顔で後ずさる龍多。

「いや、でもあの時はまさか悪戯だとは知らなかったから……」

「ふおっふおっふおっ。甘い、甘いよ、小僧！ 気づけなかったその時点で龍多くんも共犯！ 私達はうん・めい・きょう・どう・たい……」

「まじかあああーっ！ なんで俺はこいつを止めなかったんだあああああーっ！」

頭を抱えて絶叫する。

その絶叫を聞きつけたかのようなタイミングで。

「見つけたぞ！ 佐々波紅音！」

男子トイレに男の野太い声が響きわたる。

焦ったように龍多は顔をあげて、声の辺りを確認。

男子トイレの入り口を塞ぐようにして数人の生徒が立っている。

そこにいる生徒たちは全員腕の所に風紀委員がつける腕章をつけている。

どうやら紅音の作戦は穴だらけだったようだ。

そりゃそうだ。風紀委員が一人で探してるわけが無かったのだから。

あっさり見つかった龍多たちは逃げ道がないか探すがない。

このトイレに窓はあるのだが小さいものしかない。

とても高校生の体が通れる訳がない。

それにしてもなんでこんなに早く見つかったんだろう。

龍多の頭の中に疑問符が現れる。

「ぎゃーぎゃー騒いでてすぐ分かったぞ！」

先ほどの野太い声男が丁寧に説明してくれた。

逃げる事はできない、こうなったらやることは自分の罪を少しでも軽くすることだ！

龍多は思い立ち、即座に隣の紅音の腕を押さえて、

「はい、捕まえましたー。どうぞ」

風紀委員の方へ押し出す。

「龍多くん私を売るの!？」

「売るんじゃない。売却するんだ」

真面目顔で言った。

「意味同じ！」

先ほど追いかけていた鬼の形相風紀委員は三人ほどの同じ仲間を押さえつけられていた。

「龍多ぶん殴る！！！！」とその言葉しか知らないかの如くずつと叫んでいる。

龍多は恐怖で体をくねらせていた。

「二人を連れて行け！」

ここにいる風紀委員をまとめている様子の男が命令すると、集まった風紀委員達が二人を囲む。

そして、二人の手を後ろに回して掴み、連行していく。

「いでえよっ！ 俺無関係じゃん！ 何したっつーんだよ」

「うるさい。お前たちはいつも問題起こしてるだろ」

龍多の喚きは風紀委員に一蹴されてしまう。

普段の行いは大事だなあとしみじみに思った。

涙目で。

「ねえねえ、今日の昼飯なに食べた？」

紅音はどうでもいいことを自分を抑えている風紀委員に訊いていた。

「そんなの関係ないでしょ！」

「暇なんだもん」

「反省してなさい」

「やだ。めんどい」

「……まったくあーんーたーねえ……!!」

紅音を押さえていた風紀委員は耳元で声を張り上げる。

ひゃあつと耳を押さえる。

紅音はあきたのかそれきり黙った。

二人は押さえつけられたまま風紀委員室まで連行されて行った。

## 二話 双子

二人が連れてこられたのは机やイスがほとんどない教室。僅かに残された机やイスは壁際に置かれている。

この場所は風紀委員会が使うため、使いやすいようにいろいろ変えられている。

大きさは教室と変わりないが、高そうな机が一つあり、そこにと風紀委員長がご立腹の様子で座っていた。

部屋の隅には、壁にある机をそのまま使って作業に没頭する女生徒がいた。

連行された龍多と紅音は何もない床に正座させられる。

二人を連れて来た風紀委員は用が済んだので元の仕事 見回りに戻っていった。

残っているのは龍多、紅音、風紀委員長と仕事をしている女子が一名だけだ。

「まったく、二人ともいい加減にきなさいよ」

机をとんと叩く。

さすがに最近はいろいろ問題を起こしすぎた。

あまり怒らせるようなことを言うのは得策ではないと龍多は考え、事実だけを伝える。

「だから、俺無実だって。なにもしてねえーし」

そう言ってそっぽに顔を向ける。まったく関係ないのに連れて来られて、結構いらつとしていた。

今日は何もしていないのだ。今日は。

「あんだ一昨日窓ガラス割った」

その一言に何も言い返すことができなくなってしまった。  
だって事実だから。

それでもなんとかしないと自分の責任にされてしまう。  
窓ガラスの時の事はすでに罰を受けたので今回は関係ないが、  
そこに気づかないで龍多は焦ったように理由をさがす。

「あれは……こう、手が滑ったというか……手が暴走したんだよ」

「年がら年中暴走してるのね」

今回が初めてではないのだ。

だが、龍多だってなんの理由もなくそんなことをやっているわけ  
ではない。

いつも何かしらの理由があるので、嚴重注意だけで済まされて  
いる。

ちなみにこのときは魔法の練習をしていた生徒の魔法が暴走した  
のを止めようとした時に割ってしまったのだ。

「うっ」

完全に手詰まりだ。

本当は悪い事はしていないが龍多は悪い事をしていると感じてい  
るので、何も言い返さない。

龍多はがくつとつな垂れる。

委員長は視線を横にずらし、もう一人の犯人を見る。

「べにちゃんのほうは言わなくても分かるよね？」

「イエス、ボス！」

敬礼のポーズを取り、元気よく返事をする紅音。

正直、その元氣の二割をほしい。

龍多は憔悴しきった表情で紅音の横顔を見ていた。

委員長は紅音がまったく反省していない様子なのを確認して手をふるふる振るわせる。

「どつたの？ 笑い堪えてるの？ ほら、思いつきり笑いなさいな」

紅音が正座を崩して委員長の隣に行き、肩を叩く。

そこで、委員長の我慢に限界が迎えたのだろう。

次の瞬間、イスを思いつきり倒して立ち上がり、声を荒げ、

「ちよつとくらい反省の色を見せなさいよ！」

机をばん！ っと叩く。

激昂する委員長だが、

「わあっ！ 机かわいいそうー……」

紅音は常に自分のペースを保ち、机を撫でる。

なぜそんな態度でいられるのか龍多は不思議で仕方なかった。

「かわいそうなのはあたしでしょっ！ あんたたちのせいでどんだけ私の苦勞が増えてると思ってるのよ！」

二人が……というか委員長が一方的に苛められているなか、龍多は、

「……かわいいそうだな」

紅音が言った言葉を復唱していた。

紅音を見習い、とりあえず思ったことをぼそつと呟いたのだ。  
聞こえないと思ったからこそその呟き。

龍多の呟きは本当に小さかったのだが……。委員長の地獄耳はすごかった。

委員長自身の叫び声でこの場はうるさかったのにもかかわらず、口を思いっきり引き攣らせながら、龍多の方に振り向く。

その委員長の顔には見覚えがあった。

ああ、そうだと納得の声をあげる。

(さつき追いかけてきた風紀委員の子だ)

風紀委員会に入るとみんなあの顔ができるのか。

そんな間抜けなことを考えている龍多の元に、委員長が接近してきた。

委員長は頭に血が上っている様子でおまけに目が血走っている。

よく見ると、先ほどの風紀委員よりも数倍怖い。

さすがトップだけはある。

そして、とうとう目の前まで来た。

その威圧的な表情に龍多は耐え切れず、後ずさる。

走って逃げ出したい。

そんな感情が龍多の頭を完全に占領する前に。

さつきまで我関せずを貫き通していた一人の女生徒が席から立ち

上がり、委員長の元まで歩く。

龍多はその顔に見覚えがあった。

何度か風紀委員会のお世話になっているおかげでそれなりに風紀委員会の人を知っている。

彼女の名前は一蒼<sup>ヒツメ</sup>。見た目はかなりの美人で、腰に届きそうなほ

どに長い髪はちゃんとどんな手入れをしているのか気になるほどに綺麗だ。

前にクラスの男子が一さんの髪にまかれてえって言っていたのを思い出し、げんなりする。

紅音の縛ってる髪を下ろしたら、大体同じくらいだと思う。わずかに掛かった前髪の下から覗く切れ長の瞳は、切れ長のせいか目を合わせた時に冷たい印象を感じる。

ロボットみたいな何の感情も窺えない凍りついたような表情と合わさり、冷たい視線はさらに数倍にも増している。

彼女自身は風紀委員ではなく、風紀委員会の手伝いをしているボランティアの女子だ。

(前は図書委員もやってたな)

前に図書室に本を借りに行ったときに受付のところ……気がする。

ただ、彼女自身他人の手伝いをするのが好きなのか、いろんなところで手伝いをしているので図書委員かどうか不明だ。

本人に聞けば手っ取り早いけど、そんなに仲が良いわけでもない。風紀委員会の手伝いしているのも蒼が申し出たからだ。

委員長と蒼は部活が同じで、そのよしみで手伝いしてもらっているのだ。

二人が入ってる部活は、魔法を使った戦いを教える部で中々危険だ。

遠距離魔法戦闘部という名前で、完全な遠距離魔法での戦闘を競う部だ。

龍多は一生近づきたくないと思ってる。

蒼が近づいた途端、紅音の視線が鋭くなった。

いつもそうだ。理由はあるにはあるがどうにも納得ができない。

「あおちゃんもなんか言っちゃってよ。妹さんがこんなに問題起こしてるんだから……」

あおちゃんと呼ばれた子は僅かに顔を逸らす。

あおちゃんとは委員長がそう呼んでいるあだ名だ。

(妹?)

確か、前にそんな話題がでたことがあった気がする。

学校でそのことが話題になり、確か紅音が妹、蒼が姉ということになった(蒼がそう学校側に説明をした)。なるほど、中々合ってる。

真面目な姉である蒼の後ろをひよこひよこ追いかける問題児紅音。

その光景は似合いすぎていた。

実際は全然違うが。

これが二人が敵対する理由だ。

双子だから、それだけでここまで仲が悪いとは思えない。

「私には関係ありません。佐々波さんはもう私の妹ではありませんから。赤の他人が昔姉妹だったからという理由だけで注意するのは相手に対して失礼ではありませんか？ 他人の自由を奪えるほど私は偉くはありませんし、そんな人間にはなりたくないのです。……では、手伝いが終わったので部活に行きます」

淡々とだが、紅音を睨みつけて、教室の出口に向かっていく。

その様子をぼーと見ていた龍多だったが、教室の扉に手をかけるときに少しだけ、本当に少しだけ、蒼が顔をゆがめた。

唇を少しだけ噛んだだけで、痒かったからとか言われてしまえばそれですんでしまいそうなほどに少しだけ。

だが、龍多の脳にはその光景が色濃く映った。

自分の気持ちを抑えている。

そう龍多は感じた。

どんな気持ちを押さえているかなんてわからない。

龍多は蒼に興味を持ち、話しかけようと口を動かしかけたとき、

「あー、ごめんね。また手伝わせちゃって」

委員長の声に遮られ、龍多は完全にタイミングを逃してしまった。  
口半開きで完全にアホ面だ。

「いえ、私が勝手に申し出ただけですから。今日は部活の方は出られそうですか？」

「無理みたいね。ちょっとこいつに折檻してやらないと」

委員長は龍多に顔を向ける。

「部長に伝えといてね」

「わかりました」

淡々と消化されていく会話を聞く。

蒼は「失礼します」と行儀のいい礼をしてから、委員会室を出て行った。

さっきの事を追いかけてまで尋ねるのも変かなと思い、結局龍多は蒼に話しかけることはしなかった。

蒼がいなくなってから数秒後。

(さっき複数から単数に変わってた気がするんだけど……)

委員長の言葉を思い出す。

変わっていた。

「まてまてまて！ 今、『こいつら』『じゃなくて』『こいつ』って言ったよな！？ しかも俺の方をみながら！」

龍多は目の前にいる委員長に一步近づき、はっきりと言っ

「だから、俺なんもしてねえーって！」

「別にあんたがやったとかやってないとかいいの。こっちとしては罰を与えたって証拠が残れば」

あっけらかんと言う委員長。

まったく悪びれた様子がない。

むしろ堂々としすぎていて、こちらが間違ってると感じてしまうほどだ。

(俺間違ってる……はずだ)

「あんた最低だなっ！」

自分は間違っていないと決意しながら言った。  
目は結構泳いでいたが。

「いいじゃない、あんた丈夫なんだし」

これまた間違ってる事を平気に言う。

「いや、丈夫だけど……丈夫だからいいのか？ いやいやよくねえーよ！ 何騙そーとしてんだ！ この嘘嘘委員長！」

「意味わかんないんだけど……」

「とにかく、俺関係ないからな！ なあ、佐々波っ！」

自分の無実を証明するために自分を有罪にした人物に助けを求め  
る。

だが、紅音は下を向き、なにやら呟いていた。

「佐々波？」

ずっとぶつぶつ呟いていた紅音の近くに移動して顔を覗き込む。

「さーさーなーみー」

そこで声をあげると、ようやく紅音に声が届いたらしい。

「へ？」と気の抜けた顔で龍多と視線を交錯させる。

見詰め合う事数秒。

「ひゃあああつ！？」

急に叫んで龍多を突き飛ばそうと手を出す。

龍多は咄嗟の行動になんとか対応して、ぎりぎりでの回避に成功した。

ふつと額の汗を拭うような素振りを見せてから、

「何すんだよいきなり。俺だから避けられたものの。俺だから避けられたものの」

結構綺麗にかわすことに成功したので、自慢の意味を込めて二回言ってみた。

だが、誰も何も言わない。

気になり、周りの様子を確認する。

委員長は急に紅音の様子が変になったのを心配そうに見つめていた。

こっちは何か反応があるかと紅音の方を向くがなぜか顔を紅くしていた。

特に誰も龍多の言葉には反応していなかった。

少し残念。

「急に顔の前に現れないですよ。びっくりしたじゃん」

「いや、何度か呼んだぞ？ でもお前反応してくれなかったぜ？

ずっと『夕飯は牛肉、牛肉、牛肉ー！』って呟いてただけじゃん」

「そんな牛肉に固執してないよっ。むしろ豚肉のほうが好きだし」

「あーそうなんだ。まあ、別にそこはどうでもいいんだけどさ、お前さつきから様子、おかしいぜ。というか、<sup>いち</sup>がいるときはいつつもおかしい」

「あんた馬鹿じゃないの？ <sup>いち</sup>じゃなくて<sup>このまえ</sup>いつつって言うのよ？」

ボソツと委員長がツツコミ入れる。

「いいじゃねえーか。こまけえ事気にすんなって」

前々からこの二人が同じエリアにいると紅音の様子が変になることに気づいていた。

龍多は今まで特に二人の関係に入りこんだりはしていないが、今日はいつもより変だ。

蒼がいるとき紅音は顔を合わせないように誰かの後ろに隠れるだけだったのだが、今日は隠れず、睨んでいた。

何かあったのかもしれないと思っ少し踏み込んでみた。

「べ、べつに変じゃないよ、普通、……普通だよ」

いつものように笑おうとして、でも笑えていない。

顔色には僅かに恐怖の色が含まれているように見える。  
あまり、追求しないほうがいいのかもしれない。  
どうしようか、考える。

「とにかく、やめやめ、暗い話あたし嫌いだから。さっきの会話は全部忘れましょ」

このままだとあまりいい流れにならないだろうと感じたのか委員長は話を終わらせようとした。

全部忘れてしまえば確かにこの場は収まるだろう。

でも、それって逃げる気がしてなんか嫌だった。

龍多は委員長の言葉を無視して、会話を再開させる。

「佐々波って、一と仲悪いの？」

委員長が「忘れなさいよっ！」と近くに合った本を龍多の頭めがけてぶん投げた。

頭にヒットする前にキャッチしてまっすぐ紅音の顔を見つめる。

紅音は龍多の顔を見て、「あはは」と数回笑った後、

「……見ての通りだよ」

哀愁混じりの暗く沈んだ声色。

紅音の顔には陰がさしていて、これ以上この話題を続けるのは無理そうだ。

最後に、おせっかいかもしれないがどうしても言いたい事があったので言った。

「……せっかくの姉妹なんだから仲いいほうがいいと思うんだけどなあ。しかも一緒に生まれた双子なんだろ？」

龍多には中学三年生の妹がいる。

今でこそ仲がよく毎日メールのやり取りもしているが昔一度だけ大喧嘩をしたことがあった。

全く会話をしない日々が続いてすっごい嫌だったのを今でも簡単に思い出すことができる。

何とか仲直りをして、現在のようない関係だが、同じように紅音になつてほしくなくて言ったのだが。

「一緒に生まれたなんて言わないで！！ あんなやつと、一緒に、……好きで生まれたんじゃないんだから」

普段のお気楽な感じの紅音からは考えられないくらいの悲痛な叫び。

顔は地面にむけ、どんな表情をしているかは分からない。だけど、きつと怒りや憎しみ、悲しみ、そんな負の感情を混ぜた顔をしているに違いない。

深く入り込みすぎたと龍多は後悔していた。

地雷を踏んでしまったようだ。

委員長が「シリアス嫌い……」という感情を込めた視線を受け、頬を掻く。

これ以上は無理だ。

というか、さっき余計なことを言わずにやめるべきだった。

「わ、悪かったって。だから、ほら、もう話終了。なっ」

自分が勝手に始めたにもかかわらず、無責任な事を言った。

普通ならこんなことを言われれば怒ったりしても悪くはない。

龍多も怒られても仕方ないと思いつながら紅音の様子を見守っている。

紅音は顔をあげた。

その顔を見て、驚いた。

自分が予想していた、涙の顔や、怒りに歪めた物とはまったく違っていた。

笑っていた。

いつもみたいには言えない、無理した笑いだったが笑っていた。

(佐々波としてはここで話が終わったほうが都合がいいもんな)

そう理由づけければ今の表情も理解できる。

よっぽど蒼の事は話したくないようだ。

龍多が納得していると紅音は、指をつんつんさせて、

「じゃあ、お詫びに頭撫でてよ」

頬を紅潮させながら言う。

「おーけー」

返事をする。「よ、よろしくお願いしますな」と頭を向けられ、龍多はすぐに手を伸ばす。

髪はすべすべで太陽の光のように温かい。髪が紅音自身を表しているかのようだ。

髪をなでる、なんて妹によくしていたので恥ずかしさなんて欠片もなかった。

(なんか、妹みてえだよな)

手を右に左に動かす。すると、紅音も頭を右に左に揺らす。

おもちゃみたいで面白い。

「んー……はあ……」

気持ち良さそうに声を漏らし、目を細める。

その声はさきほどの悲しい声ではなく、聞いているこちらを元気づけてくれるような声だった。

沈んでいた気持ちもすっかり元通りのようだ。  
子供のように感情の上下が激しい。

あんまり納得はいかなかったが。

今こうして気持ち良さそうにしている紅音を見て、細かいことを考えるのはやめようと首を振る。

紅音の笑顔を見て、龍多もつられて笑っていると。

「あんたたち、誰か忘れてない？」

完全に放置された委員長が自分の机の位置から声をかけてきた。

委員長はただ見ただけなのも時間の無駄だったのでたくさんある仕事に取り掛かっていた。

「べ、べつに忘れてないぜ。ちょびつと記憶から抜け落ちてただけだ」

「それを忘れてたって言うのよ。まあ、いいわ。もう肉体的な罰を与える気も失せちゃったし」

全体的に激しかった口調も普段の冷静な口調に戻り、そこから委員長が落ち着いたということが窺える。

「んじゃ、俺たちは解放か？」

「今まで私が無理やり捕らえてたみたいない言い方しないでよ」

龍多は頭を撫でるのを止め、委員長が座っている席まで動く。

「んじゃ、帰るぜ！」

「待ちなさいよ。私のストレスはっさ　魔法での罰を与えるのはないけど、溜まってる委員会の仕事を手伝いなさいよ」

「アイキャンゲットホーム！　スピーディー！」

言いかけた言葉に身の危険を感じ、足を動かす。

「あー、べにちゃんも撫でてもらうのを中断されたからってそんなにあたしを睨まないでよ」

不満そうに紅音に見られてることを言ったら、紅音はハッと我に返り、

「さっきはごめんねー。ちょっと気が動転しちゃってさあ。もう大丈夫だから」

委員長に頭を下げ、謝罪を述べる。

委員長は「べつにいいわよ」と言って顔を横にそらした。

龍多は元気が少しは戻ったかなと微笑んでから教室から出ようと走る。

「いかせるわけないでしょーが」

委員長はすでに教室の出口である前と後ろのスライドドアを凍らして、逃げられないようにしていた。

龍多はえいっと軽く凍りを殴り、「いてええーっ！」と叫んでいた。

「ほら、これ。少ないでしょ？ これ終わらせたら帰っていいから壁際に置かれていた机とイスを風の魔法で浮かして、委員長の前に移動させる。」

二人分の机とイスの上に一枚一枚からできた厚さ10cmほどのプリントの山を乗せる。

「さ、ちゃっちゃとやっちなさいよー」

豪華な机で手を組み、そこに顎を乗せて笑う。

「龍多くん。私何もやってないよね？」

とぼけたようすの紅音。

「それは俺の台詞だからー！」

「ほらちゃっちゃやれ！」

「これも肉体的な罰だーっ！」

全力で叫んでやった。

結局紅音と蒼のことについては何も分からなかった。

今はいい、けど。

(この先こいつらはぜってえ関わるだろーし、しょうがない。俺が仲直りのキューピッドになってやりますか)

なぜ、絶対と言い切って関わると思ったのか。

それは、蒼を自分の部に引き込もうと思ったからだ。

どこか、冷めたような表情は学校生活がつまらないからだと考えた結果、なら自分の部にいれようと思いついたのだ。

(ま、仲直りさせるまでは佐々波に言うのはよそつ  
絶対反対されるから。  
そして、プリントの束に向かっていった。

### 三話 帰宅（前書き）

一つの話ってどのくらいの方が読みやすいのだろうか……。  
一話が約一萬文字で二話が約八千文字。三話が約四千。  
どのくらいが適量なのか分からないので誰か読みやすいと感じる量を教えて！

### 三話 帰宅

委員長の命令に従い、プリントの山を片付けた二人はそれぞれの寮に帰るため、寮への道を歩いていった。

寮は同じ学校内にある。

しかし、この学校自体がかなり大規模で、同じ学校内にあるにもかかわらず寮までは歩いて十分ほどかかってしまう。

大抵の生徒はこの十分という下校時間を嫌がる。

だが、この時間は龍多にとって中々幸福な時間だといっていいだろう。

学校という頭が痛くなるような空間から解放されるのだから嬉し  
いわけがなかった。

ただ、風紀委員会の仕事があまりにも大変だったから、龍多の体  
調はあまりよろしくない。

大量にあるプリント。

大抵は反省文なのだが、時折備品の修理の報告などもあった。

風紀委員会の仕事の中には、本来生徒会がやるはずの仕事も混ざ  
っている。

龍多の通う学校の現生徒会はあまり活動していない。

会長がすごいぐーたらな人で、それに合わせてみんなぐーたら。

そんなことをしていたらどんどん仕事が溜まっていつてしまう。

そこで風紀委員会の出番なのだ。

普通の委員会よりも偉く、生徒会よりも偉くはない風紀委員会。

生徒会にほどよく近いせいで、生徒会の仕事が舞い込んできてし  
まう。

本来の仕事は風紀を乱さないようにするのだが、現在の仕事は生  
徒会の手伝いが主だ。

そんな大量にある仕事はもちろん文がたくさんあり、そして  
漢字があるのだ。

龍多は勉強は基本全部だめだめだが、国語、特に漢字がかなり苦手なのだ。

記憶力は悪くないのだが、覚えたりするのが面倒らしい。日本人なんだから放って置けばいつか知らずに覚えているだろうと言っのが龍多の考えなのだ。

「ぐああー……目がいてえ。目の中で漢字が泳いでるよお……」

べそをかきそつな声をあげ、目を押さえて歩く。

「龍多くん、漢字がーとかずつと唸ってたもんね」

隣を歩く紅音は龍多の叫んでる姿を思い出してか、こころごと笑い出す。

龍多はそこでむっとして言い返す。

「お前だって……そのお、ほら、あれだろ！」

言い返してやろうと思ったがいい言葉が思いつかず、曖昧に言う事しかできない。

「別に恥ずかしいことなんてないもん。人生美点欠片もなし！」

「随分寂しい人生送ってるよねえ!？」

「どんまい、龍多くん」

「俺の事かああーあああつ！」

龍多は頭を押さえる。

今日はいろいろ疲れた。

早く寮に戻って、寝よう。

そう決心した龍多は僅かに歩くスピードを高める。

「そう、そう龍多くん今日の授業で悪魔について勉強したんだよ」

「へえ、ちよつと興味あるな」

脈絡はなかったが紅音の言葉に興味をそそられた龍多は歩くスピードを戻した。

再び隣にならんで、紅音が話す言葉に相槌を打ちながら歩いてく。

「それで、最近モンスターが増え始めてる理由は悪魔界と人間界が近づいてるからとか言うのが理由の一つにあげられてるんだって」

「あ、それ前にニュースで言ってるの聞いたなあ」

思い出すように顎に手を当てる。

「でも、悪魔って本当にいるのかな？ 私は悪魔のような人間がいるのは知ってるけど悪魔は見たことないな」

悪魔のような人間とは蒼の事を言っているのだろう。

龍多は苦笑し、それから真面目な声音で、

「悪魔はいるぞ、つーか俺戦った事あるし」

「ええ！？ でもそんなの聞いた事ないよ……？ ていつか龍多くんにもん？」

そう聞かれるのも無理はない。

龍多は聞かれるのを覚悟はしていたが、わざわざ話す必要はないだろう。

それでも何も話さないのは後でしつこく追及されそうなので簡単に説明を開始する。

「今でこそ有名な魔法戦闘部隊は二年前ぐらいはまったく名も知られていなかったって覚えてるか？」

「二年前……」

紅音は僅かに口を歪める。

目を鋭く吊り上げ、怒っているようにも見える。

「どうした？」

様子がおかしい、しかもこれは蒼のときに見せたのと同じ空気を感じる。

さつき『二年前』と呟いていた。

何か合ったのだろうか。

疑り始めた龍多の視線を受け、

「な、なんでもないよっ。それで二年前がどうしたの？」

自分が変わったのを取り繕うとしてか、いつもより声のトーンをあげていた。

龍多は気になったが、本人がわざわざ取り繕ったのだ質問するのはやめようと思い自分の話を再開する。

「二年前に俺、そこに入っててさ、一回だけ悪魔と戦ったんだよ。

「いやあ、恐かったねありや」

「……さらっとすごいこと言ってるけど。だって今魔法戦闘部隊は就職率激高の就職先だよ!? そこに龍多くんみたいな馬鹿　じやなくて間抜けな人が入れるわけないじゃん!」

「今俺の心はぶっ壊されたよ。というか言い直して、結局大して変わってないし」

落ち込む龍多。

わあわあっと手を振り紅音は弁解の言葉を述べる。

「別に悪い意味じゃないよ?」

「良い意味での馬鹿と間抜けってなに?」

「……馬鹿正直?」

「それっていいのかなあ!?!」

「アホ面がプリティー龍多くん?」

「……嬉しくない」

「そっか、うん。ごめん取り繕えないや」

「うん、大体予想できてたよ」

自嘲気味の笑いを口元に溜めながら、空を見上げる。

(夕焼けが綺麗だなあ……雲かかってなんにも見えないけど)

余計にテンションが下がった。

「取り繕えないや、龍多くん馬鹿さ加減は」

「そつちかよ！ つーかひどっ！？ ナイフの上からさらにナイフを刺しやがったー！」

「テヘッ！」

「舌だして笑うなつ。腹立つから！」

「ゲヘッ！」

「怪しい笑みと共にこつち見んな！ 恐いから。つーかいい加減話戻せ！」

「というか、魔法戦闘部隊って十六歳以上しか入れないんじゃないの？ 二年前って龍多くん14歳だよな？」

言った直後に話を戻した紅音にたじろぐ。

なぜたじろいだのかというと、言われたとおり話を戻すとは思っていなかったから。

「昔は人手があんまりなくてな、当時いたのは俺含めて十二人くらいだっけな。その時は入りたい奴はみんな歓迎ってなったんだよ、年齢とか関係なしに。それで今みたいな国が認めてくれた後は何かいろいろ規則が出来たみたいだな」

龍多が真面目に答えているのに紅音はただただ、驚いていた。

（なんか失礼だな）

紅音の目には疑惑の文字が色濃く映っている。  
そもそも龍多が真面目なことが少ないのがそもそもの原因なのだ  
が。

「それはそーと、じゃあ龍多くんが本当に魔法戦闘部隊にいたかど  
うか問題出すけどいい？」

「任せろ」

「今の魔法戦闘部隊は全部でいくつの隊があるでしょーか」

「知らん」

「ええっ!？」

迷いもなく知らないと答えた龍多に紅音は驚倒する。

「さっきまでの自信は!？ それで何でドヤ顔するの!」

「いや、だってさあ、俺が知ってるわけないじゃん。もう入ってな  
いんだし。それにそれ一般的な知識だろ？ 常識みたいなもんなん  
だろ？」

「龍多くんは知らないみたいだね」

「俺が常識を……知ってると思うか？」

にやり、なぜか目に光を宿らせている。

まったく自慢できる事ではないのに自信満々だ。

「ごめん。私が間違ってた。龍多くんは常識が通じる相手じゃないもんね」

「へ、あんま褒めんなよ。恥ずかしいだろ」

照れくさそうに頬を掻く。

「褒めて無いよ……」と紅音は疲れたように俯く。

龍多は「それに」と付け足す。

「もし、俺がさっきのに答えられたとしても佐々波が知ってるんだから、誰でも答えられるんだろ？ そんなん答えても俺が元いたかどうかなんてわかんねえだろ？」

「うーん。確かに」

まともなことを言う龍多に紅音は同意を示す。

「だろ？ まあ、それに話して面白い話でもないぜ？俺がぐれてた頃の話だからなあ」

「それは、それで興味あるんだけど……」

龍多はぼりぼり頭を掻く。

「それにな、もう寮だ」

指差した方向には五階建ての寮。

この学校は少し変わっていて、男子寮と女子寮が一緒だ。

理由は生徒の間でいろいろ飛び交っているが、一番有力なのは別々に建てるより一緒に建てたほうが工事費用が安いからというもの

のだ。

実際はどうかは知らないが、この寮のおかげか男子と女子の仲は中々良好なのだ。

あえて分けるなら二、三階が男子寮。四、五階が女子寮としておこつ。

ちなみに紅音は四階で龍多は三階だ。

一階は食堂や風呂など、ほかにも様々な部屋がある。

「さすがに部屋まで送ってかなくてもいいよな？」

「うん、それより。今日の下校はちょっと有意義だったなあ」

紅音が嬉しげに目を細める。

よく見ると顔は僅かに紅潮している。

夕焼け……のせいではないようだ。

龍多が「なにが？」と尋ねると。

「龍多くんのこと、多少なりとも知れたから、かな」

「嘘！ って疑ってたくせに？」

ちよつといじわるを言う。

紅音はそんなの動じず、

「龍多くんは関係ないところで嘘つかないもん」

声は心から信用しているのが分かるほどに真っ直ぐだった。

「俺は随分信頼されてんじゃねえーか。なんか嬉しいぜ！」

元氣よく笑顔を向ける。

その龍多の笑顔が眩しすぎたのか、紅音は顔をさらに赤くする。これ以上見ていると恥ずかしくて絶えられない紅音は顔を地面に落として、

「そ、それじゃ、またね。後で詳しく話してねっ！」

「おう。おう、さいならっ」

「さいならっじゃなくて、またねだよ」

「またなー」

「また夕飯食べたらねー！」

「早いな」

「まつ、いけたらだけどね」

別れを終えた龍多は「あっ」と間抜けな声を漏らす。

「部員、さがさねえと」

現在龍多の部は五名いる。

部としてもらえる最低の人数だ。

だが、その内の一人は風紀委員長が仕方なく名前を貸したもので、部員が見つかるまでの埋め合わせなのだ。

風紀委員長曰く、とっとと部員を見つけたらそうだ。

龍多は今日みんなに集まってもらい、部員探しを手伝ってもらおうと思っていたのだが事件に巻き込まれこのざま。

遅くても今月中には見つけないと委員長がやめてしまうので、必然的に部員が足らず 部が無くなる。それだけは避けねばならない。

「やっべえー。だいたい二人集めるのも大変だったのに、あと一人かよ……」

龍多は弱気な声を出して、しかしあることに気づき次には顔を輝かせていた。

「あと一人じゃんっ！ 二人集めるのに二週間かかったから、一人ってことは……二週間で二で割ってっ……つまり、一週間で見つかるってことだ！ そうと決まれば早速作戦会議だぜっ！」

龍多は最後の部員である柴腹涼シラハという男に連絡をする。

用件を伝えると「夕飯後に行く」と良い返事をもらったので携帯を閉じ る前に二件メールが来ていたので一つずつチェックする。一つは妹から内容は「ちゃんと歯磨いてねる、ばか兄貴」という文章だけを見ればただ馬鹿にしているようにしか思えない。

が、それでも妹が優しい子であるのは知っているし、ばか兄貴が口癖なのも知っている。

内容よりも毎日メールをくれるという事実だけで、嬉しく顔はにやけてしまう。

もう一つは。

「お菓子宅配じゃなくて直接持って行きます。私が持っていくんじゃないけど……美香ちゃんに渡しておいたのでよろしくお願いします」

天菜が好きなお菓子屋のお菓子を届けにくるらしい。

その後もメールは続いていき、新メニューがある、とか最近店を開くとすぐに売り切れる等等など。

「げえっ、美香が持つてくるのか……」

美香というのは龍多の友達　親友とも言えるほど仲のいい女子だ。

気性が荒いというか、すぐに人を殴り飛ばそうとしたりする野蛮な人物だ。

それはさておき、問題は内容だ。

お菓子　まだ先週のが残っている。

ケーキのような賞味期限が一日程度しか持たない物から日持ちをするようなものといういろいろある。

飴を送ってきたり、チョコを送ってきたり、基本お菓子なら何でも作れるのだ。

今、残ってるのはクッキーと、チョコと種類自体は少ないのだが量はかなりのものだ。

龍多が別段菓子を好きなわけではないのだが、送ってくるのはなぜだろう。

考えて分かるなら苦労しない。

(とりあえず部屋にあるのは天菜に渡しておこ)

今日新しいのが届くからと伝えれば快く受け取ってくれるだろう。この後やることが決まってい

寮に帰って寝る……暇はなくなった。

寝るのは好きなので若干残念だが嬉しさのほうが大きい。

誰かと一緒にいるのは好きだから。

なんだか俺すっごいできる人間みたいじゃないかと感動しながら、部屋に帰った。

#### 四話 美香 II 話脱線（前書き）

お気に入り登録が一件されていました……。いつしてくれたのかは分かりませんが本当に嬉しいです。ありがとうございます。  
これからも読んでくれる方が増えるように頑張る所存です。  
……受験勉強しないと……。

#### 四話 美香 II 話脱線

寮に戻り、龍多は残ってる菓子を大きな袋につめ、部屋を後にする。

菓子はすべて天菜に渡すためだ。

天菜の部屋は前にも行った事があるので場所は知っている。

四階に登り、お目当ての部屋まで歩いていく。

チャイムを鳴らそうと持ってきた荷物を床に置いた瞬間、

「なんですか？」

「うきやおっ!？」

背後から声をかけられ、変な声をあげてしまった。

天菜はやや不機嫌そうな顔つきで龍多を一瞥した後、床に置かれた荷物に目をやった。

龍多はその視線に疑惑を感じたので、答える。

「今日新しい菓子が届くって言うからさ、今残ってるの届けに来たんだよ」

龍多の発言を聞き、ぱあっと笑みを顔に宿す。

だが、それをばれないようにすぐに顔を逸らした。

(なんか小動物みたいだ。かわいい)

つつい頭を撫でてやりたくなる衝動を抑えながら、続ける。

「食べられるか？ まだ、結構あるけど……」

今週はあまり菓子を食べる機会がなかったので減ってない。

天菜は必死に笑みを抑えているのか、笑い顔半分怒り顔半分のごい微妙な顔になっていた。

「大丈夫です。夕飯はこれにしますから」

「いや、健康に悪いだろ」

「野菜入りお菓子もあるじゃないですか」

「そんな食生活を送ってるから背が……ごめんっ！ お願いだから問答無用で魔法を放とうとするのはやめてっ！」

右手に黒い術式を浮かび上がらせるのを見て即座に謝る。

だが、天菜の怒りは収まっていない。

「どげぞ」

目の瞳孔が開いているんじゃないかというほどに死に近い恐怖を味わわせる眼力は断るのを不可能にさせるほどだ。

声も低く……ただ、恐怖しか感じない。

人のコンプレックスは絶対に話題に出してはいけない、そう学んだ。

土下座。

(ぶっちゃんけ言つと結構なれてるからあんま何も思わないんだよね……)

すみませんでしたと言って頭を下げる。

その様子に満足したように天菜は荷物を持ち上げ、

「ありがとうございます。……あの、お菓子を届けに来るのはこれを作ってる方、ですか？」

「あー」

自分の好きなお菓子を作ってる人に会いたいのだろう。  
天菜にとつてのその人は芸能人みたいなものなんだろう。  
龍多は首を振り否定を表す。  
そうすると肩を落とすのが分かったので、

「後で、あわせてやるから、元気出せって」

「あなたに、心配されるほどに落ち込んでいませんから」

「元気出せって、なっ？」

「日本語分かりますか？ 頭の中に脳みそではなく味噌が詰まった  
正常に機能していないアホな人さん？」

「お前、時々難しい事言うよな。それ何語なんだ？」

「まさか、あなたに言語能力を疑われるなんて……末代までの恥じ  
ですね」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

「それはこのタイミングでは使わないと思います」

龍多はそこで今何時だかを携帯で確認する。  
見るといい時間だった。早めに夕飯を食べないと考え、天菜に  
手を振る。

「んじやーな。この後予定がぎっし、ぎっしで早く夕飯食わないとなんだよ」

「唐突ですね、ですが……ありがとうございます、このお菓子たちが嬉しそうに目を細め、お気に入りのぬいぐるみを抱きしめるかのように菓子が入った袋を眺めている。

なんだか、暖かいな。

今の天菜の近くで気持ちが落ち着くような気がする。

「ん、まー、太んなよ？」

そう言って、龍多はその場を後にして、食堂に向かった。

食堂から帰ってきて、僅かに眠くなってきた頭を振りながら部屋に入ると。

「いよっ！一ヶ月ぶりくらいかあ？」

部屋に鍵をかけておいたはずなのに、部屋に入ほしのみか保志之美香がいた。

先程のメールの件の通り、彼女が菓子を届けに来た人物だ。女の子の身長は天菜と背比べをさせてやりたいほどに小さい。もしもそんなことを言ってしまったら龍多に明日はないが。髪は天菜とは対照的に長く、地面につきそうなほどだ。

身長が140センチ程度だから髪も比例して120センチ程度あるのじゃないだろうか。

邪魔そうだ。

目は大きく顔には人懐っこい笑みが浮かべられている。

そして美香の一番特徴的なのは男っぽい喋り方だ。

下手な男よりも男っぽい性格をしている人間で、男物の服を着て、髪を切れば普通に『少年』に見える。

その子供っぽい性格でいっただれだけの事件を起こしたことや<sup>5。</sup>

思い出して、頭を抱えなくなってしまう。

いろいろ聞きたいことはあったが一応挨拶をする。

「よつ。んで、今日は一体何の用で来たんだよ？」

僅かに声に苛立ちを込めたが気づく気配はない。

それよか立ち上がり、肩を組んでくる。

いや、身長差があるので背中に飛び乗られたというほうが表現は正しい。

「用がなかったら来ちゃいけねえのかよ。オレは隊長になってから休みが全然なくて疲れてんだよ。少しくらいオレを気遣ってくれよ。ほら、持ってきたケーキ食いたいからだせ」

「お客の癖に威張るなよ……」

「いや、お客だから威張るんだぜ。ほら、ケーキさっさと出せ。きれっぞ」

首を絞めてくる。

ついでとばかりに顔の前に拳も見せてくる。

まるで殴るぞとも言っているかのようだ。

「拳をお下げください。はい、用意しましたよー。後お茶も」

さつさと準備をして、綺麗なお辞儀を決める。

龍多がショートケーキを出したら「チーズケーキに変えてくれ」と言ったのでしぶしぶと変える。

美香のために出したショートケーキは自分で食べる事にする。

美香と対面するように部屋の中心に置かれた小さい机に座り、食べ始める。

「ああ、そうだ。この前モンスターに新種のが現れてなあ」

好き勝手愚痴混じりで近況を報告してくる。

内容は主に魔法戦闘部隊のことだ。

彼女はその部隊の総副隊長であり、第二部隊の隊長でもある。

龍多と同期で入って、そのままずっといるのだ。

その心意気は素直に褒めたいのだが、どうにもデスクワークをさぼりまくりで部下が苦労しているらしい。

美香の部下からどうにかしてくれと頼まれたのだ。

頭より身体を動かすのが好きな美香なら仕方ないことだ。

実際龍多自身もデスクワークは苦手なのでどうにかしてくれと言われても何も文句は言えないのだ。

だから、がんばと元気づけてやった。

部下は号泣してたけど。

適当に美香の話に相槌を打ち、ショートケーキの味を確かめる。

うまい、としか言いようがない。

ケーキはこの以外食べたことがないので他と比べる事はできないので、どのくらいうまいのかは分からない。

が、前に天菜が食ってるのを見たことがあるが、普段は笑っても

ちよつと口の端を上げる程度の天菜を一瞬で満面の笑みにしたのだから味は保障できるのだろう。

というかまだ、ぐちぐち文句を言っている美香。

(こいつ、愚痴を聞かせに来たの？ すっごい迷惑なんだけど……そいや、涼を呼んどいたんだよな、早く来い！)

既に相槌を打つことすら止めひたすら頭の上で手を組み念じていると、

「話し聞きやがれっ！」

鋭い右ストレートが頬を打ち抜く。

口よりも手が先にでる性格は全然直っていないようだ。

「痛いから、殴るならもつと頑丈な所にしてよっ！」

涙目で殴られるのが前提のツッコミをする。

「んじゃ、歯くいしばりやがれー！」

「それ、顔だよねっ！？ まったくダメージかわんねえから！」

「オレに歯向かうつてのか……偉くなつたなあっ！！！」

「いや、むしろ歯食いしばってて向かう暇ないんだけど……」

なんだかんだで言われたとおり歯を食いしばるのを美香は見て、もう一度拳の先を龍多の頬にめり込ませた。

「どりゃー！」

「ぎゃーっ!」

食いしばっていても痛みは変わらず、頬をさすりながら涙がでてきた。

さすがに頭に來たので言い返すと、そこから言い合いが始まった。だが、その平和的な争いはすぐに終わり、殴り合いにランクアップ。

そのすぐ後に、

「おーい、来たぞーいないのか？」

中の騒動に気づかずに乱入してきた人物

しほはらひらゆき  
柴腹涼。

魔法科クラスで優秀で、かつこい学校で中々にもてる男だ。人付き合いもよく、基本人には親切にするのが人気の秘訣だ。

龍多もひそかには人気あるのだが、基本馬鹿で鈍感なのだ、そのせいもあってより涼のよさが引き立てられているのかもしれない。

涼はしばらく啞然として二人のつかみ合いを見る。

現段階ではまだ、じゃれあい程度なので止めようとはしない。

机とかぶつとんでるが、まだ生易しい。

「てめ、いまオレの髪引つ張っただろっ! 乙女の命なんだぞ髪は  
「!」

「あんたは乙女じゃねえ! 乙女と書いて『オトコ』って読むんだ  
ろっが!」

「んな読み方あるかあーっ!」

「お、お前、今俺のというか 男の大事な所を蹴りやがって、ふ

……ふおっ……」

ある場所を押さえて蹲るのを見て涼もなんだか痛くなってきた。腹の辺りをさすりながら、いつ声をかけようかと見守る。いつそのこと帰ってやろうか、そんな事も考えるようになって来た。

「……そっちがその気なら……俺も本気でいくからな。もしもしよんべん出なくなったら……お前のせいだからなっ！」

龍多が『本気』と言ったので、慌てて静止に入る。

「そこまでだぞ、二人とも」

龍多は突然自分以外の男の人の声が部屋に響いたので驚き、本気を出そうとしたのを押さえる。

顔を向けると、呆れ顔でこちらを見ている涼が佇んでいた。

「二人が本気で戦ったら寮がなくなるから……」

疲労を含んだ声で肩を落とす。

その様子はまるでこちらに非があるかのようだ。

だから、龍多は誤解を解くために口を開く。

「いや、俺悪くないからね？ いきなり殴ってきたのは美香だし」

「はあっ！？ テメエが『まったくダメーシねえから！』って叫んだから殴ってやったんだろ！ 言いがかりはやめやがれっ！」

「それ『まったくダメーシかわんねえから！』だよ！ 『かわん』を抜かして聞くなっ！」

「何都合のいいこと言ってるやがるっ！ 脳みそ抉り出して味噌汁作  
ってるぞー！」

「ばあーか、あんた料理できねえだろ……乙女とか言ってる癖に  
ぶぶっ」

「はっ！ 馬鹿じゃねえーの。脳みそじゃ味噌汁できねーんだぞ。  
まさか脳みそ汁なんてあると思ってるのか？ ぶぶっ。そんなに  
気づかないなんて、無駄に図体ばっかでかくなって頭に栄養行つて  
ねー証拠だな」

龍多の上から下までを侮蔑を込めて見やる。

「はんっ、逆にお前はどこに栄養行ってるんだよ。身長か？ 胸か？  
頭か？ どこも特出した場所ねえーだろ！ あるのは馬鹿力くれ  
えーだ！」

「……いい加減あつたまきたぜ」

「はん土偶だな。俺もだぜっ！」

「土偶じゃねえ！ 奇遇だ！！」

美香はその叫びと共に虎が飛びかかるかの如く襲い掛かってくる。  
さすがに本気になった美香は速い。

別に魔法を使ってるわけではなく、これが素の状態のだから恐ろ  
しい。

一部の例外 土属性魔法の硬化などを除いて身体能力の魔  
法はないのだが、生まれつき美香は身体能力に恵まれている

や、恵まれすぎてむしろ周りからは畏怖の対象とされている。

すばらしい身体能力の例をあげるなら、五十メートル走なら三秒程度それも距離が伸びれば伸びるほど記録はどんどん優秀になっていく。握力なんか軽く百近くある。

そして一番恐ろしいのは四階建ての校舎の屋上から飛び降りて無傷だったこと。

美香の身体能力の異常は魔法　さらに細かくするなら魔力の影響だと言われている。

子がお腹の中にいるときにたばこを吸うのはあまり良くないというのを効いたことがあるだろうか。

それと同じで、子がお腹の中にいるときはなるべく、魔力の濃い場所や、極端に言ってしまうえば魔法の使用を控えたほうがいいのだ。子は魔力や、魔法を感じ取りやすく、お腹の中にいるときからもそれは同じなのだ。

多すぎる魔力は身体に悪いというのは既に検証済みで、実験も行われたのだ。

その実験の説明は置いておくとして、事実としてあるのは魔力の多い場所は危険だということだ。

ある程度魔法を使っても大抵の場合は子に何の影響も出ず、生まれるのだが、十億人に一人程度の確率で異常な子が生まれてしまうのだ。

身体能力が異常に高かったり、感情がない子、魔力が極端に多い子などなど。

「二人とも、いい加減にしないと……斬るぞ？」

涼はあまり、こつこつというのは好きではないなと思いつつも背中隠し持っていた刀を抜き出し、僅かに刀身を見せ、脅す。

きらんと鈍く怪しく光るその刀を二人は見て、まずいと思い、

「「すいませんでした。美香が悪いんです（龍多が悪いんです）」  
互いに罪を擦り付け合いながら正座する。

二人とも相手の名前を言った瞬間胸倉をつかみ合う。

「二人が、だろ？」

もう一度見せる。

ぞくぞくと嫌な感覚が背中を駆け上るのを感じて、隣的美香に視線を送る。

頷き返してきたので、一緒に口を開く。

「「すいませんでした、俺<sup>オレ</sup>たちが悪かったです」

合わせていたわけではないが、同じタイミングで言えたのは長い付き合いの賜物だろう。

龍多たちが反省しているのを確認した涼は背中に刀を戻して、

「おれ、なんでここに呼ばれたんだっけ？」

当初の目的を思い出させるために涼は適当にケーキを取り出しながら、龍多に言った。

龍多はなんの断りもなくケーキを食べる涼には何も言わず、淡々とお茶を準備して。

「部員集め手伝ってもらうためにだよ」

自分を落ち着かせるために、やや声を低くして言った。

## 五話 美香Ⅱ脱線 二

ようやく本題に入る 前に部屋の片付け。

机はひっくり返っていて、本棚に置いてあるゲームはすべて床にばら撒かれている。

美香と龍多が暴れたにしてはまだ綺麗なほうだ。

龍多は誰にも聞かれないようにぶつぶつ愚痴を漏らして作業を進め。

十分ほどで部屋があらかた元通りになったので、

「最後のというわけじゃないけど……とりあえず部活動を維持するために必要な最後の部員候補を見つけましたー。はいパチパチパチパチ」

誰も合いの手を入れてくれるものがないことにしょんぼりする龍多。

きつと、こいつらは恥ずかしいのだ。

そう決め付け、一人納得する。

美香は部活という言葉に耳を奪われ、首を捻っていた。

「部活って、こいつが作ったのか？ なにすんだ？」

隣にいた涼に訊くと涼は肩をすくめてみせ、

「特に何も。みんなで勝手に集まって何かをするのを決める部活だな、今のところは」

「……龍多の奴疲れてんのか？」

あまりにも内容が残念だったので訊くと、

「かもな、まあ、切羽詰ってるのは確かだな」

「ああー。んで部活になってるのに何で部員を集めんだ？ 部活動を維持するとかなんとか言ってるけど……」

「それはな、この学校の風紀委員長が名前だけ貸してくれたんだよ。それで部員はおれを含めて五人、だけど委員長もいつまでも貸してはくれないんで早くに後一人部員が必要だつてわけだ」

「なるほど……」

美香は神妙に頷く。

龍多はそこでうん？ と首を捻りこの部屋の異常について挙げる。

「美香、まだ帰らないのか？ そろそろ帰らないと電車乗れなくなるんじゃないの？」

時計を確認する。今すぐに帰らなければまずい、というわけではないがいい時間だ。

これ以上遅くなると一人で帰るには……相手が危険 美香にナ  
ンパ目的で近づいた相手が病院送りになってしまう な時間帯だ。  
そうなるかと謝ったりするのも大変なのでできれば今すぐ帰ってほしいのだが。

「言ってなかったっけ？ 今日はこっちで泊まんだよ」

美香はあっけらかんとした様子で告げる。

龍多は一度頭を横に振ってから、言葉の意味を理解する。

「うわぁーさすが魔法戦闘部隊に属してるだけあって金あんなー…」

どこか遠くを見るように言う龍多に、美香は首を傾げる。  
魔法戦闘部隊がなぜ、就職率が高いのかと言うと給料が多いからだ。

一概に言い切ることはできないが、多くはやはりこれに尽きる。  
みんな金がほしいのだ。

「金は帰りの電車賃しかもってきてきてねーぞ？」

てつきりどこかいいホテルにでも泊まるのかと思っていたのだが、  
答えは違った。

こつちに美香の家は無かったよなと胸奥で考えながら、疑惑の目を向ける。

美香は頬を掻きながらそっぽを向いている。  
考えられることをあげてみよう。

「先払い？」

「違う」

明らかにおかしい。  
嫌な予感がする。

「どっすんだよ……」

段々答えが分かってきて、龍多は顔を恐怖で振るわせる。  
涼も理解したのか嘆息して美香に顔を向ける。

美香は二人から答えを言ってくれというオーラを感じたのか、立ち上がり二カつとわらう。

「ここに泊めてくれよ、異論はすべて拒否だっ！」

残念な胸を張り、しかしはつきりと断言した。

「あのさあー涼。聞きたいことがあるんだけど……」

龍多はうつろな声をあげる。

それも仕方ない、いろいろ思い出したくない事件があるのだから。涼は苦笑して、先に聞かれるであろう事柄について答える。

「美香は女だぞ、一応な」

涼が先に答える。

が、龍多は首を振り、

「異論ってどういう意味？」

「……………おれにはお前の思考回路は一生掛かっても読めないと理解した。他の意見は認めないって事だ。つまり拒否権はないってことだ」

美香が「一応女ってどういうことだっ!!」と叫んでいるのが聞こえるが正直相手にする気にはなれない。

龍多はため息を漏らしたあと、このままでいいわけがないと奮起し、

「俺は反対だぞっ!!」

なんとか気力を戻し否定の意を示す。  
その態度にあきらかに不満気な美香。

「いいだろ、別に。どうせオレは乙女おとこなんだから」

まだ気にしていたらしい。意外と根に持つ奴だ。

「あれは売り言葉に売り言葉だ。お前は立派に女だ、俺が保障する」

「売り言葉に買い言葉だぞ」

急な龍多の態度は泊めるのが嫌だという理由から来ているのは分かっているがそれでも美香は嬉しさでにへらと頬を緩める。

涼のツッコミはみんな無視だ。

龍多はさらに真剣さを増し、続ける。

「世界が認めなくても、俺が認めなくても、神はお前を女として生まれさせたんだからな。納得はいかないがそうなんだろーな」

「全然保障してねえーじゃねえーか！！ 神以外誰も信用してねえーだろ！ つーかお前認めてねえーのかよ！！」

緩まった頬は一瞬で怒りという感情によって引き締められた。

龍多は何か間違った事あった？ と涼に顔を向けていた。

涼は「全部だ」と返した。

もう吐くため息がでないほどに呆れている。

怒った美香は龍多に近づく。

龍多は打つ手なしとばかりにうな垂れる。背中には蹴りの嵐を喰らいながら。

「でも、さすがにまずいんじゃないか？ 俺たちだって高校生だし……」

そんな龍多があまりにも可哀想だったので、涼は助け舟を出した。涼の発言に美香はあきらかに動揺して、

「い、いや、ベベべ別にオレはそんなのぜんっぜん期待してねえーしー！」

途端顔を真っ赤にし、恥ずかしさを誤魔化すためか蹴るスピードをさらに速める。

結果涼は龍多を倒すのに加算しただけになってしまった。でも一つ収穫もあった。

「お、おまえ、まさか龍多に既成事実でも作るために……」

若干引いた。後少し女の子らしい（？）ところもあるんだなあと思っただ。

「だ、だってよおー！ 最近こいつの周りに女が沸いてでたって涼が言うからさあー！。っーか既成事実なんかつくらねーし！ 同意の元でやってやるー！」

「きせいじーじーっー？」

あせあせと手を振りながら、涼に言い訳をする。

龍多が棒読みで既成事実と言っていたが、なぜそんなことを言ったのかというと、言葉の意味を知らないからだ。

極端に知識が少ない龍多の頭には今現在何の話をしているのかさ

っぱりだった。

「そんな虫みたいに扱った覚えはないけどな。なるほどね、ふん」

面白くなってきた。

元々美香が龍多に気のあるのは知っていたがここまで積極的ではなかった。

高校に入ってから、正確にいうなら魔法戦闘部隊をやめたときから、美香は段々と意識するようになったようだ。

離れ離れとライバルの登場。

涼は紅音も少なからず好意を寄せているのだと気づいていたから美香に逐一報告していたのだが、まさかこんなおもしろ展開になるとは。

そこで今まで黙って蹴られていた龍多が突然立ち上がり、

「一緒に部屋で寝るのはまずいだろっ!? その、なんていうかさ……ええと」

頬をかりかり掻きながら言葉を濁す。

美香はその様子にピンク色の妄想を浮かべて顔を真っ赤にしてしまふ。

涼は大体この後どうなるかなんて分かっていたのではあと呆れて生成したため息を吐く。

「一夜の過ちだったけ? そうなるともかぎらないじゃん?」

「う、うん……むしろ、オレはそうなってほしんだけど……」

美香が恥ずかしそうにうつむき「よろしくお願いします」と呟く。龍多は気が動転して何を言ったかなんて分かっていない。

「……だれかー助けてー！ 俺殺されるー！」

「はあ！？ 突然なに言い出すんだよっ！」

龍多ががくがく震えながら涼の後ろに隠れる。

美香は急に狂った龍多に訊くために、涼に迫る。

「テメツ！ にげなっ！ どういうことか説明しやがれ！」

「だって、お前一緒に部屋に寝ると俺の命が危ういんだもん！ 前に部隊の合宿でお前が夜中にトイレに起きたとき俺の腹を思いつきり踏んづけて行きやがったし、俺を抱き枕と勘違いして思いつきり抱きついたときはやばかったね。口から臓器という臓器がでてきそうだったもん」

「じゃ、じゃあ一夜の過ちってなんだよ！ そ、そのそっち系な話じゃねえーのかよ！？」

単語をあげるのは憚はばれたので濁す言葉で伝える。

「お前が間違えて俺を殺したとしたらだよ！ 俺が圧死しましたとかなんて嫌だよ！？ 死ぬときは俺トイレって決めてんだよ！ ところで、そっち系ってなんだ？」

意味が分からなかったので美香に尋ねると、美香はかあああつと顔を真っ赤にしそっぽを向く。

涼に顔を向けるとにこつと笑みを向けられる。

親が子を見る目はこんななのかもしれないと龍多は感じた。

「お前は無垢のまま育つんだ。あー参考程度に聞きたいが子供はどうやってできるか知ってるか？」

美香はびくつと背中を丸めて、小さい体をさらに縮こませる。首まで真つ赤で体からは煙まで見える。

お願いだから部屋の湿度をあげないでほしいと龍多は心から願っていた。

そう考えながらも龍多は熱でもでたんじゃないかと美香を心配しながらも涼に答えた。

「結婚したときに天使がふわわああーんって連れて来てくれるだろ？ 前に妹から教えてもらったぜ！」

「馬鹿妹！！」

美香が叫んでいた。

龍多の頭の中にはピースをしながら教えてくれた時の妹の姿が浮かんでいた。

美香は一体全体どうしてしまったのだろうか。

確か妹と美香は同じ学校だったなと龍多は思い出す。

(後で妹に学校での様子を聞く……)

同じ学校ではあるが中等部と高等部なのであまり分からないかもしれないが聞こう。

直接言うのはためらってしまうような事を隠しているのかもしれない。

なんだかんだ言って龍多にとって美香は大切な『友達』なので、結構心配している。

龍多は二人を見る。

涼はすべてを悟ったような笑みを浮かべ、美香は料理してたら失敗してケチャップこぼしちゃったよ並みに赤くなっている。

一つだけ、分かった事は。

「全く当初の話進んでないよねえ!？」

部員集めの件は遙か彼方に飛んで行ってしまったようだ。

龍多は疲れを混ぜた吐息を吐き出したのだった。

## 六話 方針決め。しかし空回り。

「というわけで、見つけた部員をどうやって部に引き込むかつ、話し合おうではないかつ！」

龍多はえらく自信満々に胸を張り、腕を組んで宣言する。

今回の話合い、何も考えていないわけではなく既にある程度方向性が決まっているのだ。

涼や美香が来る前にある程度考えておいた勧誘するための作戦。

これを披露すれば涼は天才だと崇めるだろう。

そう考えるとついつい笑みがこぼれてしまう。

前に似たような事 天菜を部に入れるとき があつたときも

涼に助けを求めたのだ。

その時は何も決めていなかった事をぐだぐだ言われてすごいイラツとしたので同じ轍を踏まないために考えておいたのだ。

今ここにいるのは龍多と涼の二人だけだ。

美香は体を冷やしてくると言って風にあたりに行ったのでようやく邪魔されずに話が始められる。

「そついや誰なんだ？ 勧誘相手」

まだ聞いていなかったなと付け足す。

龍多は言おうか言わまいか迷う。

頭の中に浮かんでいる部員候補は感情がまったくない、常に冷たい表情の蒼だ。

考えただけで体温温度が下がった気がする。

とそんなことはいい。

魔法科のほうでも蒼と紅音の仲の悪さは目立っており、涼に言う

といろいろ難色をつけられるんじゃないかという心配があった。  
それでも、協力をあおぐ上で避けては通れない道だ。  
つまり元々選択肢はないということだ。

「それはな……一蒼だ」

過剰なまでに真剣さを帯びた声で言う。

涼は一瞬だれだか分からずハテナ顔になったが、すぐに「ああー」と納得の声をあげ。

「……一ね。ふうーん。って確か佐々波と一って双子だよな？ し  
かもとびつきり仲の悪い」

やはり来た。

誰だつてすぐにそれにたどり着くのは分かっている。  
だから、ちゃんとした対策もこの一瞬で考えている。  
天才だな俺、とうぬぼれながら口を開く。

「うん、だから佐々波には言うなよ」

釘をさす それだけだ。

全く考えていない様子なのに自信満々なのが龍多のすごいところだ。

紅音にばれたらまずいことは十分分かっている。

犬猿の仲、なんて言葉は霞んでしまうほどに仲が悪いのだ。

前に紅音が風紀委員会に捕まったとき、何か言われたくない事を言われたのか猛り狂い、魔法を連発して暴れまわったことがある。

ずっと「蒼を殺すまで邪魔するなッ！」って叫んで。

そのときは龍多が『本気』を出してとめたが、あれは本当にやばかった。

ただ、周りのものを破壊するために動き続ける、人間の殻を持つた化け物。

あれは怖い。蒼が焦っている姿を見れたのは珍しいのだが、その代価はでかすぎだ。

一週間の停学処分だけで済んだのは正直今でも疑問に思っている。

「まあ、分かっているけどさ、それで、作戦とかはあるのか？」

思ったよりも突っかかってこなかったので胸を撫で下ろしていると、龍多が待っていた質問をしてくれた。

「いくつか、リストバンドしてみた。読んでくれ」

「リストアップね……」

ぴらっと一枚の小さいメモ用紙を渡す。

涼がそれに目を通していている間にお茶を入れ嘔下<sup>えんげ</sup>する。

(いやあー仕事した後のお茶はうまいのおー)  
お茶のおいしさに酔いしれていると、

「じゃーな。おれは降りさせてもらおう」

紙を机に置き、部屋から出て行くこととする。

「なんでっ？俺なんか悪い事した？」

慌てて腕を掴んで、止める。

涼は残念そうにな顔を隠そうともしないで机の紙を指差す。

龍多の頭は謎で包まれた。

なにが言いたいのだろうか。

よくわからない。

「その紙がいけないんだ」

不機嫌な色が見える顔つき。

一体どうしたんだろう。

あまりの作戦のすばらしさに嫉妬したのだろうか。  
そう予想立てて、

「最高の作戦すぎて感動したのか」

ふうと自負の息を吐く。

龍多は自分の作戦に凡人である涼が着いて来れないのだと、理解して哀れむ。

優秀な自分が恐ろしい。

「なんでおれはこいつの部に入ってしまったのかと考えさせられたぞ。そして結論を出した今、おれは悲しくて涙がでそうだ」

「ん？ 今の難しい文はなんだ？ 異国の言葉か？」

「難しい要素は欠片もない。とにかく、おれは手伝わないからな」

「冗談冗談」と笑ってから、

「なんでだよー。頼むぜ、ほんと」

駄々っ子のように腕を引っ張る。

涼はそんな子供っぽい態度にはあと息を吐き出し、仕方なく元の場所まで戻り、腰を下ろす。

その様子に満足した龍多は言葉を綴る。

「んで、質問は？ ないなら明日から実行するけど……」

「質問というかそこに書いてある三つの作戦を読み上げてみる。おかしなことに気づくから」

涼がずっと呆れたような顔つきなのが気になるが、言われたとおりのことをしないと帰りそうなので仕方なく読み上げる。

「作戦一。毎日勧誘する」

「次」

「作戦二。失敗に終わり、次の作戦。今回の作戦は次の作戦を考える作戦ということだ。」

なんか難しい事書いてる俺かけえっ！

「次」

「作戦三。超勧誘する。なんだか、雲行きが怪しい。明日は雨が降るかもしれない。って天気予報で言っていた。なるほど言い得て妙だな。言い得て妙。なんて難しい言葉を使ってしまったんだ……」

「気づいたか？」

涼は瞑想でもしているのか目を閉じている。

いや、なんだか無視されているような気がする。

龍多は少し考えた後、

「これを書いている人の頭脳のよさが感じますね」

「感じねえーよ！ 皆無だ！ 作戦ていう言葉調べてみるよっ！  
これは作戦じゃねー日記だ！ つーか一番ましな奴が既に最悪って  
お前は馬鹿かつー！」

堰を切ったようなツツコミの嵐に龍多はにやりと返す。  
涼はその態度に嫌なものを感じたのか顔を歪ませる。

「馬鹿だぜっ！」

「開き直るな！」

俺はいったい何かおかしなことを言ったのだろうか。  
龍多は自問してみるが答えは分からない。  
難しいなあ人間って生き物は、とやたらと大人ぶったことを呟く。

「いつまでも文句言ってもしかたねえぞ、涼」

「逆の立場になってみる、おれの気持ちがおおおく分かるぞ」

先程がみがみ言ったので怒りはある程度沈静している。  
それでもこれ以上一緒に話しているとさっきの美香のようになる  
かもしれない。

龍多はそんな涼の様子には気づきもしないで、馬鹿を続ける。

「はん！ 分かりたくねえーぜ！」

「最悪だなっ！」

「というのは冗談として、つまりこれだけいい作戦があるにはあるんだが、心のどこかで何か『たりない』と言ってるんだ。だからアドバイスをくれ」

急に真面目な口調で龍多が言ったので涼は面喰らいの句が継げなくなる。

しかし、「いやいやいや」と手を顔の前で振り、

「一から作り直したほうがいいから！ 『たりない』どころかまったくできてないぞ。これに付け足したらより悲惨なものになるから」

「とうにかさつきからツツコミがくどいぜ？ もうちよっと短く出来ねえーの？」

「馬鹿がでしゃばるな」

「すみませんでした、先ほどのでよろしいです、はい」

声がめちゆくちや低かったのは怖かった。

後はつきり言われると心の中にひゅーと冷たい風が吹きすさぶことが分かった。

龍多が萎縮していると、今度は涼から声をかけてくれた。

「まあ、確かに勧誘するしかないけどさ、せめて共通の話題を作って話したりなんて器用な真似はできないのか？」

「じゃあ、涼を俺の代わりに勧誘役に起用しよう……なんちって」

うまいことを言ったぜと龍多は鼻の下を掻く。

「……もう黙ってくれ」

「今回の相手は一だつてことは一筋縄じゃいかねえ。だから、手伝ってくれ！」

「とりあえず、いい加減漢字勉強しような」

最近本気で龍多の将来が心配になってきた涼は、もっと厳しく当たろうと決意した。

龍多はなんとなく嫌な予感を感じ、ぶると体が震えた。

「手伝うのはいいけどな。やっぱり何か方針がないとな」

「このメモじゃ駄目なんだろう？」

「あたりまえだ」

「うーん。まあ、いいや。とりあえず一の明日のスケジュールを知らないと話になんねえから……お前が聞いていてくれ」

涼はそれに対して首を振る。

「悪い。おれあいつとまったく関わりがないんだ。それよか龍多のほうか風紀委員会を通して話したことあるんじゃないのか？」

「わあーつたよ。俺はすげえもんな……」

うな垂れた龍多に涼は少しばかり口元をあげ、おだてる。

「お前が部長なんだ。お前のやりたいようにやればいいんじゃないか？」

「うっし、とりあえず俺の部に大砲とかおきてえな。あとドラゴン飼いたい」

目を子供のよつにきらきらさせて幻想世界に想いを馳せる。

いい調子だ。

涼はあまりにもつまきすぎで笑い出してしまいそうだ。

「そりゃ無理があるけど、そのぐらいの意気で頑張れ」

「おっっ！」

「じゃあーな」

「また明日！」

そう言つて涼は部屋から飛び出しダッシュで自室へと逃げ込んだ。残された龍多は使命感に燃え、やってやるぜ！ とか叫んでいる。少しして、うん？ と首を傾げ、

「あいつ、逃げやがったああああーっ！」

「なんだ？ ありや？ 涼いねえのか？」

入れ替わりに入ってきた人物は獣。

ものすっごい腹が減ったライオンのいる檻に体を縛られ、入れられた気分だ。

美香はシャワーでも浴びてきたのか、髪や肌が僅かに潤っている。

後シャンプーの匂いか、美香には似合わない女の子らしい匂いがする。

こうなると多少、『女』なんだと意識させられてしまう。なんだか、むずがゆくなってきた龍多は、

「とりあえず、床とベット、どっちで寝る？」

気が動転して自分でも何がいたいのかわからないが言った。龍多の様子に美香はどこか決意したような顔つきで、

「迷惑かけたくねえーから、龍多と一緒にの方でいいよ」

少し頬が染まっているのは風呂あがりだからだろう。

だが、それに気づかず美香の言葉に心は恐怖色に染め上げられる。

「うぎゃーあぁー！ 殺されちゃう！ 俺の身体ばらばらになるよおおおー！」

怖い、怖い、怖い！

心の中には漢字練習のように『怖い』という単語しか生まれてこない。

美香と寝る事事態に疎ましさはない。

だけど、殺される恐れがある。

美香は寝ること事態が凶器なのだ。

寝相が悪い、なんて宇宙の端っここのほうに飛んでしまっぐらいに寝相が悪いのだ。

「オレは前よか寝相はよくなったぜ？」

得意顔の美香に、ただ呆れるしかない。

「どござって確認したんだよ……」

「夢で見た」

「それは信憑性にかけてまぐるからなっ!?!」

「まあ、いいや。オレは疲れてるから先に寝るからな。ベット借り  
っぞ」

そう言っつて美香は了承を得る前に龍多のベットに潜る。  
布団をかけて、気持ち良さそうに目を瞑る。

口元には何かきらりと光るものが見えるが、涎じゃない事を祈り  
たい。

「ふあああ……この匂い安心するぜえ……」

すでに夢見心地の声で口をふにやふにやさせている。  
なんだか、猫が寝ている時のような顔だ。  
頭とか撫でてみたいなあと思いつつも、今はこの部屋から脱出  
することが優先事項だ。

「俺は風呂入ってくるからな、んじゃ」

「おおおおううう……」

龍多は必要な物を持って、大浴場に行く。  
もつすぐ風呂場が使えなくなる時間帯に入るので人は一人もいな  
い。

貸切だ。

ゆっくり入っていることは出来ないが、これはこれでいいものだ。  
龍多は服を脱ぎ。

「いやっほおおおー！ー！ー！」

体も洗わず風呂に飛び込み思いつきり泳ぎまくって、使えなくなるぎりぎりの時間まで風呂を堪能した。

## 七話 関係

昨日は散々な目にあった。

龍多は外で授業を受けながら、思い起こしていた。

まず、風呂で予定の時間を過ぎても入っていたことを怒られた。でもあれは仕方ないと思う。

誰だって大きな風呂が貸切なら泳いでしまうと思うから。

だから、反省はしない。

そして、部屋に戻り寂しい俺の心を癒すために美香の頭でも撫でて落ち着こうと思つたら、そのまま撫でていた腕を掴まれ、布団に引き込まれ、抱き枕にされてしまった。

ありえないほどの力で幸せそうに握りつぶしてきた美香の顔は笑顔だった。

どこも怪我をしないで朝を迎えられたのは正直奇跡としか言いようが無い。

朝食を食わずに美香は帰り平穏が戻ってきて。

そして、現在に至るのだ。

「いやあ、幸せってのは気づきにくい物だねー」

嵐が過ぎ去り、気づいた。

しみじみと呟き、龍多は周りの人がやっている 魔法の練習を

眺めていた。

普通科は魔法を扱う授業は少ないのだ。

だが、ないわけではない。

あるとしたら、息抜きでやる体育のような軽いノリで、みんなでわいわいと魔法を撃って遊ぶだけの、娯楽のようなものだ。

みんなで魔法を放って眺めていたりしている。

所々では真剣に練習をしている者もいるが、魔法科クラスと比べ

るとどれもレベルが低い。

それもそうだ、大抵の人は魔法科を受け、そして普通科判定をもらった人たちだから。

ここには魔法科クラスに入りたくて、入れなかった人物がたくさんいる。

いや、むしろこの学校にわざわざ普通科に入りたくて入った者の方が少ないかもしれない。

入試を受けたときの成績で、魔法科と普通科に分けられるのがこの学校の仕組みだ。

もちろん私立なので入試は早い。

例え普通科に選ばれてしまっても、国立や公立の魔法科のあるところにいけばいいのだが、この学校自体、レベルが高く大抵レベルの高い国立や公立の保険として受けるのだ。

今、目の前にいる人たちはレベルの高い国立や公立に受けて、落ちて仕方なくここに通っている人が大半だろう。

ちなみに龍多は最初から普通科志望だ（普通科自体も偏差値は高い）。

本当はもつと馬鹿な学校でよかったのだが、妹に注意され仕方なく勉強したのだ。

元々龍多の頭のできはいいので勉強さえすれば普通に頭はいいのだ。

一ヶ月程度で中学の内容すべてを覚えそして、受験が終わると共に九割を忘れた。

さっきの例をあげても分かるように頭のできはいい、普段馬鹿なのは勉強しないからだ。

と、馬鹿さ加減を熱弁するのはどうでもいい。

それよりも、現段階で一番まずいことが一つあるのだ。

できれば気づきたくない事柄なのだが見て見ぬ不利をするのも厳しい。

今、この校庭は二クラスが使用している。

もう一つが普通科のクラスならそんなの問題にはならない。  
でももう一つは魔法科クラスなのだ。

先程挙げたとおり、二つに分けられた魔法科クラスと普通科クラス。  
ス。

溝が深いのだ。仲が悪いとも言つう。

龍多みみたいな魔法科クラスと普通科クラス両方に友達がいる人間  
はこの学校にはほとんどいないと言つても過言ではない。

普通科クラスの人は、魔法科クラスの人間は自分たちを卑下して  
いると思ひ、魔法科クラスの人間は普通科クラスの人間に嫌われて  
いると思ひ、どんどん仲が悪くなつていく。

実際はそんなことは……ないと思ひたい。

でも前に魔法科クラスがあるエリアをスキップ混じりで歩いてい  
たら「落ちこぼれが近づくな」と言われたことがあるので、分から  
ない。

もちろん馬鹿にしてきた奴はぼっこぼこにしてやつたが。

後で教師からこつぴどく怒られたが、馬鹿は怪我しないと分から  
ないのは知っているからこの先も止めるつもりはない。

魔法科クラスの人たちは知らないが、普通科クラスの人たちは何  
かがない限り、魔法科クラスの人たちを悪く言つたりしないことは  
一緒に過ごしているから分かる。

(学校側も現状を理解してんだから、少くらしい配慮してくれても  
いいのによお)

魔法科クラスは普通科クラスと違い、レベルの高い魔法を使つて  
それぞれの魔法の腕を磨く。

普通科クラスの生徒は、見せ付けられいると思ひ余計に溝は深ま  
つていく。

今はまだ、先生が講義しているので特に溝が深まるような事件は  
無いが、この後を考えると、

「つたく、憂鬱だ」

一人ごちる。

さつきからずっと一人でいる龍多だが、別にクラスの人たちと仲が悪いわけではない。

ただ単に今いる魔法科クラスは紅音、蒼がいるクラスなので見ているのだ。

ここでは紅音には悪いがあまり見ていない。

蒼について何か手がかりがないかと探っているのだ。

現在は先生が魔法の実践をしている。

特に目に付くような蒼に関する事件はない。

紅音が先生の話の話を聞かずにきよるきよる まわりを見ている。

普段は言われる事しかない、「ちゃんと授業聞け」って死ぬまでに一度は言ってみたいと思った。

こちらに目が向き、じーと見つめあうこと数秒。

「……」

あははーと聞こえそうな子供っぽい笑みと共に紅音は龍多に軽く手を振る。

見つかった龍多は蒼を見ていたことをばれていないか心配に思いながらも手を振りかえした。

というか、クラスを眺めていて気づいたが、紅音はクラスが一番後ろで、目立つほどではないが周りから距離を置かれている。

隔離されているかのように紅音の周りには人がいない。

(……?)

このクラスを見て、一番に気になる事はそれだった。

紅音を 避けている？

ただの勘違いならいいのだが、一度考え始めるとそれしか考えられなくなってしまう。

いじめ。

紅音はどこからでたのか知らないが、魔法科クラスに最低評価で受かったと言う噂が流れたことがあった。

最低評価ということはぎりぎりです。受かったと言う事だ。

馬鹿な噂だとは思っている。だが、噂は一番手の負えないものだと分かっている。

つまり、その噂のせいで、紅音は一年の魔法科クラスでは最下位だと言うことは噂で確定されてしまっている。

実際がそうでなくても、だ。

そのせいでいじめられているとかは聞かないが。

こう目の前でクラスを見るといじめに合っている気がしてならない。

それとも、そうやって見ているからか？

龍多は考えてから、首を振る。

細かく考えるのはやめよう。

一ついえることは。

「もしも、マジでいじめだったらクラス全員ぼこしてやるからな…」

大事な部員である紅音を悲しませるなんてことがあったらただじゃ済まさない。

龍多は、怒りで歯噛みしながらずっと様子を見守っていた。

しばらく経つと先生の話が終了し、各々の魔法の練習が始まった。

さすがに、すごい。圧巻だ。

魔法は火、風、水、土の基本四属性と雷、氷、光、闇の特殊四属性の二グループがある。

ちなみに特殊四属性の魔法は生まれたときに使えるか使えないかが決まっている。

国で一番優秀な国立魔法学校は特殊四属性の魔法は扱える人が少ない。

この学校でもあまり使える人はいないだろう。

でも、龍多の知る限りでは風紀委員長は氷を使える。

魔法の練習は普通、一つの属性で魔法を放つのだが、今日の前では二つ以上の魔法を組み合わせての魔法練習が行われている。

さすがレベルが高い。

火に風を混ぜ威力あげたり、水と風を合わせて風に水の刃を乗せたりと多種多様だ。

後ろで息を呑む声が多数したので振り返ると、普通科クラスの半分以上は顔を屈辱で歪めていた。

自分たちにはできないことを普通にやっている。

歪められた理由はそんなところだろう。

龍多も憧れこそあるが別に使えなくてもいい最終的にはいつもそう考える。

普通に感動している生徒もいるのでその人たちは普通科を志望していた生徒だと決めつけて数えると。

意外と多い。三分の一くらいはそうだ。

普通科も結構人気あんだなと思いつながら普通科組みを見回す。

負けじと普通科生徒たちも二種類以上の魔法を組み合わせで作っているが……どれも失敗に終わっている。

ここで成功できているのならたぶんその人は魔法科に入っているだろう。

たぶん明白な線引きはそこだ。

そこで、端のほうで一人ぼつんと練習をしている紅音が視界に入った。

紅音も一生懸命魔法の練習をしているが一種類での魔法しか使っていない。

龍多はそこで、紅音が普段から火の魔法しか使っていない事を思い出した。

(使えないのかな?)

それと、もう一つ決定的な事実も思い出した。

紅音は魔法を撃つのが うまくはない。

ここから展開している術式を見れば分かる事だ。

いろいろ大雑把に組み上げている。

魔法の威力、範囲、火とかなら温度などもすべての情報を含んでいるのが術式だ。

はつきり言うくと、これにどれだけ力を入れたかで魔法の威力はすべて決まる。

術式を効率よく作ることが出来れば少ない魔力で強い魔法を放つこともできる。

それだけ重要な術式、魔法の命とも言えるそれを龍多は見ることができない。

(術式なんて俺以外誰も気づかないだろうけど)

誰も術式なんて見えないのだ。

ただ、龍多にはそれが見える。だから術式さえみれば相手がどんな範囲にどのような魔法を放とうとしているのか一瞬で分かる。

術式が見えさえすれば、それを解読し、相手の魔法を操作することが出来る。

少し、アドバイスにでも行こうか。

先程見た問題を直せば紅音はもつと腕のいい魔法使いに慣れる。本人がそれを望んでるかは知らないが。

「めんどくさいよー」と言っている紅音の姿を頭に浮かばせながら歩き出そうとした瞬間。。

さっきまで後ろの方で魔法科の生徒を親の仇に出会ったような目で睨んでいた、男が、

「佐々波の奴、魔法使うの大してうまくないくせに魔法科クラスなんだよ。まじムカツク」

今、なんて言った？

龍多は人を馬鹿にしたりすることが大嫌いだ。

冗談程度なら別にいい。だが、今の奴は確実に他の魔法科の生徒たちの魔法を見てでの腹いせで紅音を侮辱した。

瞬間龍多は身体の体温が一気にあがり、あがったのを自覚した頃にはその生徒に掴みかかっていた。

生徒は何が起こったのか分からず、目をぱちくりさせている。

龍多は目を吊り上げながら、

「黙れよ。俺の友達にあんま舐めた事言つと殺　怒るぞ」

突然の殺気と共に放たれた言葉はその生徒の胸に鋭く突き刺さる。その生徒は恐怖で言葉を失いただ、ごめんごめんとばかりに首を上下させていた。

龍多はそれでも許す気にはなれず、片手で首を絞めるように持ち上げる。

その様子を見かねた、一人の小さい体つきの女生徒が、

「あ、あのお。そのくらいで許してあげてください。その人も悪気があっていったんじゃないと思います。あの、ごめんなさいです」

なぜか自分のことのようにぺこぺこ謝る女の子の姿を見て、龍多は少しずつ冷静になっていく頭を余ったほうの手で押さえる。

また、やっちまった。

昔からの悪い癖だ。

前は妹を馬鹿にした奴を全員ぼこ殴りにし、散々怒られたのだ。

昔は悪い奴は殺しても言いと思いつけていたのでその名残（？）がでてしまったようだ。

龍多のいつもと違う様子に普通科クラスの生徒が集まってくる。

「龍多、どうしたんだよ」

名前は……分からないがクラスの生徒が話かけてくる。

みんながみんな心配そうな顔つきで龍多と龍多の手の先で震えている生徒に視線を浴びせていた。

龍多はふうと自分を落ち着かせるために息を吐き、掴みあげていた生徒をおろし、いつものアホ面で「ごめんごめん」と言っただけで場所から離れた。

居づらかった。

間違った事をしたとは思わないが、これからはすぐに怒らないようにしろよと言いつつ聞かす、魔法の練習の邪魔にならなそうな場所まで移動する。

これじゃあ紅音に会うのは無理だし、蒼への調査も無理だ。

はあ、と息を吐き、グラウンドに寝そべり休憩を取った。

## 八話 クラスの女の子

ゆっくりと体を休める事に専念していると、

「くのむらさーん！」

呼ぶ声がしたので体を起こす。

今の自分に普通科の生徒が声をかけるとは思えないので、魔法科の生徒だと思ったが声のする方を見ると、そいつは先程龍多を止めた勇氣ある女の子だ。

小さい体をふりふりと揺らして走る姿は何かに似ていると思いなから目の前まで来るのを待つ。

女の子はあはあと肩で息をしている。そこまで全力で走ってこなくてもいいのに、と苦笑しながら、落ち着くまで待つ。

待ってばっかだなあと思った。

「ええとさつきはありがとよ。あのままだともしかしてたら殴ってたかもだぜ」

とりあえずお礼の言葉。

それでも心配そうに瞳が揺れたので、大仰に肩を竦めて見せて、自分はもう大丈夫だとアピールする。

正直な気持ち友達を馬鹿にされても冷静でいられる程の落ち着きぐらいは持っていると思うていたから先程の行動に自分自身が一番驚いていた。

（昔からずっと子供みたいだなあ）

何も成長していない気がする。成長したと思っているのは自分だけだったらしい。

難しいよな、と考えていると、女の子はぶくーと頬を膨らませて、

「まったくです。本当に怖かったんですよ？　くのむらさんいつもここにこ太陽みたいに笑っているのにあんな怖い顔しちゃ駄目です！」

可愛らしく指を立て、注意してくる。

「太陽みたいって、太陽は顔ねえぜ？」

「例えですー！」

両手で一生懸命つつこみを入れてくるが痛くない。

ミニナムサイズ、天菜を抜かし、美香も抜かしたトップサイズのミニナム女。

金髪というには少し色素の薄い黄色に近い髪をした女の子。  
たぶんハーフだろう。

どうでもいいが、ここまで魔法を使う人間の身長が小さいと、魔法が身長成長に影響があるんじゃないかと思うほどだ。

「そついやお前名前なんつーの？」

龍多は基本クラスの人間の名前を覚えていない。

学校中に龍多の名は良い意味と悪い意味で伝わっていて相手が知っている事はよくあるのだが、龍多のほう知らないのは多々ある。  
(人の名前って覚えんの大変なんだよなあ)

難しい名字の人も結構いるので名前が読めないなんてのもおかしくはない。

「驚きです！　一緒のクラスの人の名前も覚えられてないんですか！？」

声が子供みたいにきんきんと高い。  
叫んでいるとすごい可愛い、ぬいぐるみみたいだ。  
むぎゅってやったら気持ち良さそうだ。  
思わず抱きしめたくなる衝動を抑えながら、

「いやぁーね。この年にもなると記憶力が悪くなっちゃまってねえ。  
まあ、そういうわけだよ。教えてくれ」

「同年ですよー！ あっ、わたしの名前は橋元<sup>はしもと</sup>ミーナです」

「ん、よろしくな橋元！」

爽やかにいうと「違います」と首を左右に振り、

「ミーナでいいですよ」

「よろしくなハシーナ」

「名字と名前合体されました!？」

「ともしは」

「名字逆から読まれました!？」

「わっとあーゆーねーむ？」

「アイアムミーナ！ ってさっきも言いましたよ!！」

「悪い悪い。なんか面白くてついついからかっちゃうな。普段から

かわれているのも原因の一部かもしれないぜ……」

これが涼が前に言っていた『おれの気持ち』って奴か。  
なんだすげえー楽しいじゃんか。あとで報告しよ。

龍多は普段とは逆の立場になれて結構楽しい。後普段溜まってい  
っているストレスもどんどん消えていく気がする。

ミーナはいるだけで人を癒す力でもあるようだ。  
いろいろ考えながら、龍多はふうと息を吐き出す。

「くのむらさん、くのむらさん！」

「ん？ どうしたミーナ？」

「名前で呼んでいいですか？」

目が心配そうに揺れているのを見て、すぐに笑って返す。

「かまわねえが、それより何しに来たの？ 様子を見に来たってん  
ならただじゃおかねえーが……」

「何が起こるんですか!？」

「ええと……その、あれだよ。ほら流しそうめん」

「わぁー、たのしそーです!」

瞳を輝かせるミーナ。

龍多は本当に楽しそうに顔を微笑ませているミーナを見ていてふ  
と心に質問が生まれた。

「おまえってさ、学校楽しい？」

龍多は真面目な顔つきでミーナに訊いていた。  
龍多が作った部活動。

何の目的もない、でもみんなを楽しませるために作った部活動。  
本当にみんなを楽しませることができるのか？

龍多にとって一番の不安だった。

みんなをあそこに縛り付けてしまった。

もしかしたらみんなは前よりも学校生活をつまらなく感じている  
かもしれない。

そう思うようなことがないわけではない。

でも本人達に聞くわけにもいかない。

ずっと心に隠し込んでいた龍多の不安。

リーダーである龍多は自分の弱さを見せてはいけなさと考えて誰  
にも言うことはなかったが、ミーナの纏っているオーラに引かれて、  
あっさり喋ってしまった。

ミーナが部に関係がないのもあるかもしれない。

とにかく尋ねられたミーナは「んしょ」と龍多の隣にぺたんと座  
り、何回か唸ってから。

「たのしい……です？」

「何か疑問系に聞こえたんだけど、俺の気のせい？」

「うーん、いまいち分からないんです。楽しいといえれば楽しいので  
すが、わたしは魔法科クラスに入りかつたんですけど、夢は叶いま  
せんでした」

なんとさえばいいのか思いつかない。

こんなときに気のいい言葉でも言えれば頭がいい人間だと思われ

るかもしれないが龍多はそんな人間ではない。

「あー……そーなんだ」

普通に受け答えて、でも、それならつまらないんじゃないか？  
という考えがすぐに現れた。

龍多の顔に出ていたのか。

ミーナは「違います」とゆっくりと首を横に振る。

「わたしは普通科の生徒さんたちと一緒に暮らしているのも楽しいです。でも、わたしの夢からは遠ざかってしまい、結果、どっちなのかなーと考えてみたら分からないんです」

あははと楽しさ、悲しさいろいろな感情が織り交ざった情けない顔で笑った。

龍多が何も言わないでいると、ミーナが反撃とばかりに訊いてきた。

「りゅーたさんは楽しいですか？」

「俺は……」

すぐに答えが出ない。

その時点で楽しくないことの証明になった。  
楽しければすぐに返事ができるのだから。

もしかしたら、俺自身が一番につまらないから、自分を楽しませるためにあの部を作ったんじゃないか？

そんな考えが出てきて、しかしすぐに忘れようとする。

答えを出すことはできず、なにしろあの部の部長である龍多が『  
つまらない』と言うわけにもいかず、

「楽しいよ……もし、つまらなくても楽しくするし」

答えを濁すように答えたが、ミーナはぱあと顔を輝かせ拍手しながら、

「わーりゅーたさんすごいです！」

何がすごいのか分からないが拍手を送ってくれたミーナに笑いかける。

拍手するとき身体全体を使って一生懸命とした様子です。すごい可愛い。

本当に愛玩動物だ、ミーナは。

庇護欲を掻き立てられるというか、なんというか。

俺が性別を気にせず抱きしめられる同姓なら抱きついていたいなあと思っていると。

「やっほー。みんな大好き紅音ちゃんの登場だよー！」

紅音がどこからともなく現れた。

登場と同時にミーナを抱きしめているとは中々できる。感心する。

「やっば、ぬいぐるみみたいだなあー」

幸せそうにはにかみながらミーナを右に左に振る。

女の紅音に軽く持ち上げられてしまうのを見ると、俺なら指一本で浮かせられるんじゃないかと考え、そりゃ無理だからと一人ツッコミしてにやにやする。

「わーい。やーめーてーくーだーさーい」

振り回されながら紅音に「やめてくださいー！」と叫び続けるが、紅音は……。

「これが人間の限界！ 人間メリーゴーランドオツ！」

止めるどころか、さらにグレードアップして振るから回転に変化し、さらにスピードも高めていた。

龍多はそれを見て、自分が回転している状況を想像してしまい気持ち悪くなってきた。

「わーいーいーいーいーっっ！」

ミーナの可愛いボイスが、回転の影響で近くで聞こえたり遠くで聞こえたりする。

だが、人間メリーゴーランドはそのあとすぐに失速し、止まった。

「うえ、酔った」

紅音が本当につらそうな顔で龍多の肩に腕を回して寄りかかる。

「おいおい、二日酔いみてえなことになってんじゃん」

慌てて倒れないように支えてやる。

「世界が回ってます！ いえ不思議な事ではありません！ なぜなら地球は常に少しづつ回っているのですから！」

「いやいや、それを実感する事はできないから！」

頭を振られすぎてどうやらぶっ壊れてしまったようだ。  
ミーナは目を右に左に動かし、焦点が定まっていないうすだ。  
龍多は二人に肩を貸しながら近くの木陰まで運ぶ。

「き、気持ちわるう〜」「……きもちわるいです」

二人は横になってダウン。

紅音は勝手にやったことだから同情心は生まれませんがミーナは残念だ。

二人が起きるまでやることもなくなったので頭の後ろで手を組んで、寝そべる。

そう言えば二人は知り合いだったのか。

今頃になってその事実気づく。

でも、おかしくはない。紅音はよく龍多のクラスに遊びに来るのでそのときに知り合っているのなら普通に話が成立する。

でも、紅音のおかげでミーナの質問から逃げられてよかった。

ひそかに感謝し、ようやくゆっくりできると目を閉じた瞬間遠くで言い合う声が。

問題は減らないらしい。面倒だなあと頭を搔く。

起き上がり、目を開くと、さっきまで龍多が男子生徒を掴みあげていた場所ら変が騒がしいことが分かった。

目を凝らしてみると、魔法科クラスの委員長 随分と偉そうな態度の男子生徒が普通科クラスの委員長に話とか力づくで何かを仕掛けている。

偉そうな態度の男子生徒は後ろに女子生徒を何人か控えさせている。

控えている女子生徒は一步後ろで手を前で揃えてただただ、様子を見守っている。

なんだろう すっごく腹が立つ。

金を持っている『家』の人間が自分の身の回りを世話させる人を雇うなんてのは当たり前だ。

金を使って人を雇わせ、世話をさせることができる余裕があるのはすごい。

それ以外にもあの男自身モテるのか魔法科クラスの女子生徒が半分くらい付き添っている。

(いや、モテるといふよりもあの男の『家』に取り入るうとしているのか……)

蒼はいない。正直あそこに行ったらもう部員として誘うことはなかったかもしれない。

そんなことはどうでもいい。

これを手っ取り早く解決するには先生の力が必要だ。

だが、見渡す限り先生は……いない。

というか先生がいないの見計らって仕掛けたのだから。

中々のせこさ加減にげんなりしながらも放っておくわけにも行かず、

「まったく、ちよつくら二人とも行ってくるから」

たぶん聞こえていないだろうと思いつつも律儀に言い残して、問題の場所へと向かった。

## 九話 怒りは人間で一番の原動力

現場に向かうと、賑やかすぎて涙が出そうなほどの言い合いが繰り広げられていた。

普通科クラスの委員長（ ）は涙がうつすらと溜まった瞳で、一生懸命話し合いをしていた。

話し合いではない、向こうが一方的に無茶を言ってきているだけだ。

というか、先程掴みあげた生徒が委員長だったらしい。

（威厳なっ！）

その一言に尽きる。

とにかく現状を理解するところから初めなければ。

あらかた想像がつくのだが、確認しなければ確証は得られない。

「今の状況どつたの？」

近くにいた女子に話しかけると、その人は肩を竦め、

「また、魔法科クラスがふっかけてきたのよ。ったく、なーにが魔法をろくに使えない生き物が無駄に場所使ってたよ」つよ。だから嫌なのよ、魔法使える人間で。自分が世界で一番偉いーみたい  
に思ってるからねえ……」

嫌悪感むき出して男を睨む女子に、うすら寒さを覚えながらも理解した。

予想できる理由 よく、あることなのだ。

魔法科クラスが普通科クラスにいちやもんをつけることは。

龍多は基本関わらないようにしていたが、気づくと歩き出していた。

「ちょ、ちょっとやめときなって、あんたが一番ひどい扱いうけるわよ?」

先程の女子が止めるのも聞かずに、龍多はどどん歩いていく。対峙していた委員長を横にずらし(すげーびびられた)、真正面から男を睨みつける。

普段はこんなことじゃ怒らないのだが、さっきの熱がまだ抜けきれていなかったのか。

元々こういう性格なのだ、今までおとなしくしていたほうが驚くぐらいに。

気づくと、龍多はいつもより低い声 相手を威嚇するとき使う声音で話しかけていた。

「テメエ、こんなことしてる暇が合ったらさっさと魔法の練習にでも帰りやがれ、うぜーから」

あからさまな敵意を感じ、嫌そうな目つきをする相手。

「なんだ、君は……。よく見たら、落ちこぼれの『琥ノ村』家の人間じゃないか」

鼻を鳴らし、見下す。

その視線には慣れてるので、龍多はいつもどおり対応する。

「ああ、そうだ。テメーの名前は知らんがまじうぜーから、そのウエーブがかった髪で前みえてんのか?」

右目を覆いつくすようにびよーんと伸びた髪を見て龍多は笑い飛ばしながら言った。

男はその髪が自慢だったのだろう。

龍多にバカにされた瞬間顔を真っ赤にして伸びた髪を振り、

「君、口には気をつけたほうがいいよ。僕が怒る前に、謝ったほうがいいよ。怪我しなくなかったらね」

それでも余裕な態度を崩さないように冷静に言った。

普通科クラスの方から緊迫した空気が伝わってくる。

早く謝れと背中に突き刺さってくる。

それでも、龍多は対抗するように余裕の表情で、

「へっ、馬鹿なことをいわねえほうがいいぜ。今、俺は燃え尽きてんだよ!!」

叫んだ。

途端全員がぼかんとする空気を感じて、龍多は間違いに気づき、やべつと言い直す。

「今俺の心は怒りで燃えてんだよ!!」

うがあつと言いそうなほどの気迫で叫ぶ。

それでなかったことにするつもりだったのだ。

みんなはそれに気づき、特に何も言わない。

みんなの優しさで先程の件は流され、話は続いていく。

「ここまで言っても引く気がないとはね……君の家は君の代で、落ちこぼれの家となったんだよ、『琥ノ村』くん」

馬鹿にした冷笑を浮かべる。

龍多の家　琥ノ村家は優秀な魔法使いを世に排出することで家

として有名だった。

しかし、ある事件を境に一気に落ちこぼれ、龍多と龍多の妹はどちらも落ちこぼれの琥ノ村の人間ということで世間からは見られて  
いる。

ただ、龍多にとって他人の評価なんて一番どうでもいいものだと  
思っていた。

だから別にそんなことを言われても特に何も思わない。

「喧嘩なら、負けるつもりはねえぞ」

「魔法がある喧嘩でもかい？」

魔法さえあれば負けることはない、言いたいようだ。

確かに普通なら魔法の優劣だけで勝負は決まる。

だからこそ、龍多は余裕を保っていられるのだ。

「当たり前だ。俺には魔法なんてつうじねえからな。べえーだ！」

舌を出して、馬鹿にすると本当に頭に來たのか、男は肩を震わせ  
る。

「なら、見せてあげようじゃないか！」

「なにをだよ！」

龍多も対抗して声を荒げる。

「僕の魔法をだよ。それを見れば君だって納得するだろうからね、  
僕との力の差に」

ふふんと嘲りを混ぜた笑いをしたあと、

「ふわーーーーー！ エクスペンシブファイヤー！」

「なにその名前だっさ」

龍多の素直な感想だった。

ただ、この男は無駄に魔法の才能があるようだ。

放たれた魔法は、火と雷を織り交ぜた基本、特殊の混合魔法。

空中に撃たれた激しい塊となった炎の周りに雷を鎧のように纏わせる魔法。

火の燃焼力を雷でさらに高め、さらに雷で対象を痺れさせる。

大体そんな能力のようだ、術式見たら書いてあった。

龍多は一瞬だけ術式を見て終了。

魔法が消えるまで鼻くそほじってた。ちなみに大きいのがとれた。鼻の通りがよくなった。

龍多は大して魔法自体に興味はなかったのだ。

というか、術式を見た瞬間に大してなかった興味が完全に失せた。術式にむらがある。つまり、あまりレベルの高い魔法ではない。

素人目から見たら圧巻かも知れないが生憎素人ではない龍多はつまらそうに男に目をやった。

あれなら一瞬で魔法をのつとる事も造作もない。

術式が見える龍多は、相手の術式を操作して魔法の発射された方向や、威力、効果などを好きに変える事ができる。

術式を弄くるだけなら魔力など必要ないので龍多にも簡単にできる。

「どうだい？ 僕の魔法は？ 凄すぎて唾然としたらう。はっは

っは。降参するなら今のうちだ。地面に額をこすりつけて、『阪井

田様いすみませんでした』と言えば許してあげてもいいよ？」

「どうやら阪井田という家の人間らしい。  
どうでもいい情報だ、龍多は今すぐ忘れたいと思った。」

「はあ？　むしろ俺に謝る方法でも考えてる。俺はな、すっげえ怒ってんだからな」

クラスの人　もっと範囲を広げれば普通科の人を馬鹿にしたことは中々に頭に来ていた。

「どうやら、残念なのは『家』だけでなく頭もらしいね。そういえば君は佐々波ともつるんでいたね」

佐々波、という言葉にピクリと反応する。

その反応を見て、龍多がびびったのと勘違いした阪井田は調子に乗り、はっと馬鹿にした笑いを顔に浮かべる。

「お似合いだよ。君たちみたいなのは落ちこぼれ同士。いやいや、世界というのはうまくできているもんだ。落ちこぼれ同士、慰めあうように引き合うのだから。だから、僕は優秀な方と引き合わされたんだ。ねえ、蒼」

龍多は必死に怒りを足の肉を引きちぎらんばかりに引つ張ることで押さえていると、さらに気になる名前が出た。

蒼ははなれたところにいたが、阪井田に話題を振られ顔を向けた。

「優秀な妹と違う、家に必要なくなった佐々波とは違う、優秀な姉僕のフィアーレンセ！　蒼っ！」

「阪井田さん、学校ではあまり大げさにしないでください」

蒼は嫌そうに言ったが、それを恥ずかしいからと勘違いしてさらに続ける。

「なーんだ恥ずかしいのか。可愛いねー」

至福そうに頬をだらだら緩めて言っている阪井田に心から嫌がる龍多。

一緒に空間にいるだけで尋麻疹じんましんが出てきそうだ。

「…………あんたみたいなやつに褒められても嬉しくないわよ。…………消えろ」

ぼそつと蒼は暴言を吐いたが誰の耳にも届いてはいない。

「そつだ、僕の勝利は蒼 君のために届けるよ」

とことんうざい言い方をする阪井田に龍多はこの場から逃げ出したい恐怖を覚えた。

戦うのが怖いとかじゃなくて生理的に体が受け付けない。

「…………」

蒼は返事をする必要はないと判断して、自分の練習に戻った。

そんな様子も阪井田にとってはつばなのか。

うほーんと叫んでにやけていた。

きつと変態だ。

龍多は確信した。

「それじゃあ、始めようか、僕と君の戦いと言う名のダンスを踊る

うじゃないかっっ!」

「はっ、一番下の取り出しにくい場所にしまってやらあー!」

龍多の質問に答えた女子が首を傾げて、

「もしかして、ダンスと間違えた?」

呟いた言葉にその場にいた一同が「ああー」と納得とばかりの声をあげた。

## 十話 戦い？

「こんな大勢の人の前で恥を掻きたいなんて、僕には落ちこぼれの考えが分からないな」

「じゃあ、一度落ちこぼれてみな。世界が三百六十度ぐるっと変わるから」

それを言うなら百八十度だろっと言うツツコミをするものはいない。

みんな緊張しているのだ。

張り詰めた空気の中、平然としているのは龍多と阪井田くらいだ。普通科のみんなは心配そうに龍多を見つめ、魔法科のクラスはほとんども心配そうに龍多を見て、少しばかりの人が馬鹿にするように見ていた。

そんな視線をもともせず阪井田はふふんと笑い、

「それじゃあ、行くよ！」

阪井田が術式を編み始める。

目の前に術式 円を展開する。

円の中に文字をゆっくりと書き連ねていく。

ちなみにこの円に術を刻んでいる所は龍多以外には見えていない。そして、それが見える龍多の心の中には一つの呆れた思いがあった。

遅い。遅い。遅い。遅い。

龍多はかたつむりの五十メートル走を見ているかのような錯覚を感じていた。

(こいつ、無駄に派手な魔法を撃とうとしてんな)

術式を見て、予想する。

火柱を龍多の回りから無数に出し続け、段々と敵 龍多 を中心に寄せていき、最後に寄せた中心にいる対象に雷を落とす、という魔法を作りたいようだ。

強い魔法を撃つのなら別に構わない。

それにしても、戦い慣れていなすぎる。

美香なら十秒ほどあればこのレベルの魔法は撃てる。

戦いなれている龍多のほうが珍しいのは十分自覚しているがそれでもこれはひどい。

敵に背を向けたまま戦っているのと同じだ。

龍多が徒歩で近くまで歩いていきぶん殴る時間は優にある。

さらに魔法によるトラップを仕掛けているわけでもないのに、本当に何を考えているのかが分からない。

龍多はいい加減待つのも飽きてきたので、歩いて近づいてみる。

龍多が動き出したのを見て、なぜか阪井田は意味深に笑った。

「僕の罠に引っかかったな！」

阪井田はそう言ってポケットから何かを取り出して投げてきた。

石ころのようだ。

どうやら、術式を組んでいる間はこれでどうにかしようと思っていればいい。

舐められた物だ。

俺はそれを全部避けてゆっくりと相手に恐怖を与えるように歩いていく。

できればここら辺で終わりにしたい。

反省さえすれば龍多としては満足なのだ。

それでも、相手は魔法をロクに使えない落ちこぼれだと油断しているのが、奇妙な走り方で龍多から距離を取り逃げている。

石ころ大作戦は終了したようだ。

後は術式ができるまで走って逃げ続けるようだ。

これが、この学校の魔法科クラス。

こいつ一人でレベルを決め付けるのは些か問題はあるかもしれないがそれにしても レベル低つ。

これで国のトップレベルの学校なのだから、この国の教育を疑いたくなる。

龍多は正直やる気が完全に削がれてしまった。

戦うのが好きな龍多は相手が強ければ強いほど嬉しくなるのだが、どうやらレベルを図り間違えすぎたようだ。

なんか、弱い者いじめをしている気分に近い。

相手はもの凄くやる気なのだが。

「あれ？ 龍多くん何やってるの？」

目立たない場所で休んでいたはずの紅音がこの騒ぎに気づいたのか声をかけてきた。

戦っているようには全く見えないのか普通にきょとんとしていた。

龍多は術式ができるまでの暇つぶしにと話し始めた。

それでも余裕があるのだ。

今の現状を簡単に説明すると、紅音はにこにこ笑顔から心配顔に変えた。

「今すぐ、やめよ。私のことはいいから」

紅音の事を阪井田が馬鹿にされたことも伝えたらこんな事を言うてきた。

なんだか、そんな態度がすごく腹が立った。

いじめられるのに慣れているような紅音の顔に言う。

「どうして自分を馬鹿にするやつに何も言わねえんだよ」

「別に気にしてないもん」

「……俺が気にするの。友達馬鹿にされんの」

「龍多くん、私はおちこぼれなんだよ。ずっとそうやって生きてきたから今さらだよ。このぐらいどうってことないから」

ずっと……？

どこかあきらめが混じったその表情は龍多を怒らせるのに十分だった。

「落ちこぼれだからって、馬鹿にされていいわけねえだろうっ！」

龍多の激高に紅音は怯み、何も二の句が継げない。  
が、何か言わなくてはと慌てて口を開く。

「でも、その……」

「最後に確認する」

「な、何を……？」

紅音はびくつきながら尋ねる。

龍多は前で気持ち悪い態勢で術式を組んでいる阪井田に訊く。

「おい！ あんた佐々波のことどう思ってたんだ！」

どうせさっきと同じ答えが帰ってくるのは分かっている。

龍多が確認したかった事はそのときの紅音の反応だった。本当に嫌じゃないのならおせっかいだったとすべて謝って終わらせる。

でも……わずかでも気にしてる素振りを見せたら。

(こいつの代わりに間違いを正す)

「佐々波？ 落ちこぼれが生きがるなよかな？」

今すぐぶん殴りたい発言は今置いておき、紅音に顔を向ける。

(佐々波の様子は？)

紅音は下に顔を向けていたが、覗き込む。

歯を食いしばっていた。怒りを必死に、閉じ込めようとしていた。目をきつく閉め、耳まで閉じそうな勢いで。

涙こそ出てはいないが、それでも、顔は泣いているように見えた。でも龍多が見ているのに気づくとすぐに無理やりに笑みを作った。

(ずっと我慢してきたんだ)

もっと早くに気づいてやれば、良かった。

これで……あの男をぶん殴る理由ができた。

龍多は拳を鳴らしながら男の前まで歩いていく。

阪井田は術式が組み終わったのか余裕の微笑を携えている。

「おやおや、佐々波の屑はないているのか？ 涙でグラウンドを汚すつもりかな。まったく迷惑だ」

馬鹿にする、なんて表現じゃ補いくらいの嘲笑。

「それ以上は……マジで押さえられなくなるから黙ったほうがいいぞ」

龍多は何とか怒りの衝動を抑えながら、震える声で言った。

怒りで声が震える。抑え付けようとしても抑える事は出来ない。  
そして、声が震えていることに阪井田は何を勘違いしたのか、気  
持ち悪い笑い声をあげる。

「怖いのかなっ？ そりゃそうだ。僕みたいな優秀な魔法使いを前  
にしたら誰だって萎縮するさ。そうだな、ここで頭を地面に埋めな  
がら謝ったら、許してやろうかな。ほら、やってみろよ」

龍多の体が一瞬ぶれ、そして阪井田の顔に拳を入れた。

素早い動きからの鋭い拳は阪井田の顔にめり込み、吹き飛ばした。

「何でこう、いらっとすることしか言わないのかねえ。ついつい殴  
っちまったぜ」

右手をぶらぶら振ってみせる。

「く、くそっ！ ふざけるなよ！ 僕の二枚目の顔を傷つけるなん  
て……どうやら手加減はしてほしくないようだね……」

「こっちの台詞だ！ バーカッ！」

「喰らえっ！ トロピカルサンダーバケーション！」

相変わらずのダサイネーミングの魔法を放ってくる。

その魔法は完全に龍多の予想と同じだった。

四方八方から接近してくる火柱達。

頭上を見ると雷雲のようなものである。

完全に同じだ。

龍多はこの魔法を構成している術式の中心部分 頭上にある雷  
雲を見据えて、手を伸ばす。

伸ばす必要こそないがこうなんとなく戦ってる感があるからいつもこうやるのだ。

ぴきつと言うガラスにひびが入るような音がしたと思ったら、魔法が爆発し光を撒き散らす。

龍多が奪ったのだ、阪井田の魔法を。

阪井田が術式に込めた魔力を、書き換えた新たな魔法の術式の発生に利用した。

予想だにしない光の発生は阪井田のみならず周囲すべての人の視界を奪った。

阪井田は全く見えていない。

龍多は阪井田の近くまで歩いていき、腕を引き、勢いをつけて腹に拳を入れる。

「ぐぶおっ！」

奇声を上げながらグラウンドを転げまわる。

阪井田は腹を押さえて、蹲っている。

「骨は折れない程度に加減したから安心しろ」

「ひ、ひいっ！」

顔には余裕なんて全くない、涙と鼻水でぐずぐずのひどい顔だった。

視界は多少回復したのかおぼろげにだが龍多の方を見ている。

龍多はさらに追撃を仕掛けようとしていたのだが、そこでふうと息を吐く。

これ以上は本当に弱い物いじめになると思ったのだ。

「これで俺の勝ち。さっさと自分の場所に帰れって。俺がマジで切

れる前にね」

紅音に謝れとか言ってもいいが、別に感情がこもっていない謝罪なんていらねいだろうと考えた。代わりに重要な事を付け足す。

「これ以上佐々波を馬鹿にしたり普通科の生徒を馬鹿にしたりしたら次は入院はすると思っとけよ」

龍多の言葉にただ頷くしかない阪井田。

これで終わった。  
と思ったら。

一斉に普通科、魔法科の生徒が走り寄ってくるのが目に入った。

「龍多、てめさっき何したんだよ！」

嬉しそうな男の声。

普通科クラスの人間が魔法科クラスに勝った。

たぶん目の前の男は自分の事のように嬉しいのだろう。

魔法科の生徒は興味本位で来たのだろうけど、普通科の生徒の心にはそんな感情があると窺えた。

そう素直に褒められると嬉しい、というか恥ずかしい。

龍多は恥ずかしさで頬をぽりぽり搔いたあと。

「あいつが魔法使うのミスったんだろ。だってすっげえ難しい魔法使おうとしてたしさ。……なっ！」

阪井田に下手なことを言っなよと脅しの意味を多分に含んだ笑みを向ける。

阪井田は乾いた笑いを浮かべ、涙混じりにこくこく頷いていた。

その後は特にこれと言った事件も起きずに授業が進んでいく。  
龍多は紅音とミーナのじゃれあいを見ながら、考えていた。

（自分が正しいと思っただけで行動したけど、合ってたのかな？）  
正解などないのだから、分からない。

少なくとも目の前で笑っている紅音を見れるのだから、間違っ  
てはいない と思いたい。

それにしても、眠い。少し気を張っていたからか眠い。  
欠伸が出たので口元に手を送る。

別に魔法の練習などする必要がなかったので龍多は授業終了まで  
寝ることにした。

「……………琥ノ村龍多……………ねえ」

龍多が寝てから、彼を見る者がいた。

一蒼。

蒼は鋭い双眸を龍多に向け、続けて紅音に向けた。  
気づかれる事はない。

紅音は龍多の頬をつんつんについて遊んでいる。  
そのまま数秒見つめる。

懐かしい 話しかけたい衝動が心の中に溢れ出てくる。  
でも、それはしてはいけないこと。

話すときは相手を馬鹿にしなければならぬ。  
世間話なんてすることを許されていない関係。

必死に衝動を抑えて、蒼はあため息を吐き、

「果して、琥ノ村は佐々波を守ることができるのかしら。ためして  
見ようかしら」

そんな感情が表れ、蒼は空を仰ぐ。

二羽の、仲のいい鳥が飛んでいた。

(戻りたいな、昔に)  
二羽の鳥を見ながら、そう思った。

## 十一話 勧誘開始

結局大した情報を得られないまま、放課後になった。

放課後以前にアプローチをかけたかったのだが、昼休みはよく知らない同級生に昼を一緒に食わないかと言われたので食べていたら終わっていた。

龍多が問題ばかり起こすことで学校のほとんどに龍多の名前が轟いていると前に言った気がする。

そのせいで相手は知っているがこっちは知らないというのは良くある事で今回もそれだった。

その人は前に荷物運びを手伝ってもらったお礼だとか言っていたが、龍多は欠片も覚えていなかった。

とにかくそんなこんなで昼休みという一番のチャンスを失い放課後になり、誰に頼むわけにも行かず一人で蒼を追跡中。

「ふむふむ、とにかく攻略したいキャラに話しかけるのが好感度アップの秘訣つと……」

龍多は携帯で女を落とす方法を検索していた。

そこで一つよさそうなを見つけた。

だけど悲しいかな。龍多が見つけたのはギャルゲーの攻略サイトだ。

そんなことを知らずに読み進めていく。

「んだ、これ？ 放課後の移動場所……？ 蒼？」

たまたま同じ名前のキャラを発見した。

えーと保険室に行き、選択肢を選ぶ。

んん？

選択肢と言う言葉に激しく首を捻った。

(なんか変な気がするがとりあえず保健室に行ったらこの中のどれかを選べばいいのか?)

他にも体育館とかいろいろあるが、場所に行ったらそれらの行動をすればいいのか。

龍多は感心した声を漏らす。

「すつげえなこれ。もしかして日本中の女子のデータとかあんのか？」

気になる所だが今はこれ以外を見ている余裕などないのであきらめる。

ばれないようにこそこそ移動するのは慣れている。

こそこそかさかさ。

「ぎゃあー！ ゴキブリだ！」

自分の後を追ってくる音が聞こえたので振り返ると黒光りした生き物が飛んで来た。

だが、こんなの美香が出会いがしらに殴ってくるよりも避けるのは簡単だ。

すかさず上半身を逸らし避ける。

ゴキブリは一方通行に突撃してきてそれで終了なのか、そのまま姿をくらました。

何とかやりきり、蒼の搜索を開始する。

見失う事もなく無事解決だ。

今度からしつかり掃除しようと思決心して。

蒼はただ、ぼんやり歩いているわけではなかったようだ。

資料室に向かっている。

あそこは資料室と言う割りに資料など皆無に等しく、ただの物置部屋と化している。

物置部屋としてのレベルは中々で、たくさん物があるので物を探すときは宝探し気分慣れて楽しいものだ。

そんなところに何の用があるのか知らないが龍多は後をつけていると。

「いい加減出てきてもいいんじゃないかしら？」

突然後ろを振り向き、声をかけてきた。

その一瞬前に龍多は隠れていたのを見つかっていないと信じたい。心臓を触って落ち着けと呟き続けていると。

「琥ノ村」

名前を言われたのでこれ以上隠れているのは不可能と感じた龍多は、ばつが悪そうな顔つきで行く。

一応ストーリーカー行為のようなことをしていたのだ、悪い事をしていくかも知なあと云う気持ちがあった。

「どこで、気づいたんだよ？」

龍多は納得のいかなそうな顔で尋ねる。

「ばれない自信はあったのだ。」

すると、彼女は呆れたようにため息をつかれた。

「さつき、『ぎゃあー！ゴキブリだー！』って馬鹿みたいな声で叫んでいたじゃない。それから注意して気配を感じてたらつけているのなんてすぐ気づいたわ」

「……うおふ、あのゴキブリめえ。次あつたら天まで投げ飛ばしてやる」

龍多がぶつぶつ文句を言つとふんと馬鹿にした笑いが聞こえる。

「ゴキブリ程度に動揺するなんて……あなたも大したことないわね」

「んだと？ だったら、テメエは大丈夫なのかよ？」

「私に苦手なものなんてないわ。そんな甘つちよろいこと言つてられる世界で生きてはいないの」

その物言いはやけに耳に残るものだった。

誰かに甘える事なんてできない世界で生きてきたと言つ意味に解釈しても間違いではないはずだ。

龍多は少しに真面目な態度を作り、一度せきをして。

「聞きた」

いことがあるんだけど？

と言いかけた瞬間。

ふおんっ！

謎の飛来音と共に蒼の長く美しい髪に何か汚らしい黒い物体が付着した。

……ゴキブリ？

龍多が首を捻ると、蒼は疑問に思い、

「どつしたのよ？ 今変な音したわよ？」

腰に手を当て、余裕の様子だ。

龍多はあまりに何の反応もない蒼を見て、もしかしてこいつは髪飾りなのか？ と疑いだしてしまう。

顔を近づけると、蒼が「な、なによ」と恥ずかしそうに声を漏らしたが龍多はそんなことに気を払っている暇はない。

じーと睨みつけると、きらんとゴキブリの顔が光った。

「きしゃー！ー！」

およそゴキブリならしからぬ奇声を上げたと思ったら、ばさーつと飛んで来た。

「ぬおっ！」

慌てて先程同様状態逸らしで避ける。

「えっ………？」

自分の髪から何かが飛んで言ったのに驚いたのか、不思議そうに声を出していた。

というか、気づいていなかったのか……。

龍多は蒼のマイペースさに驚きながら、先程のゴキブリを視界に捉えた。

さっきの仕返しに掴んで投げてやるうとしたら。

「きしゃっしやー！ー！」

「はやっ！」

弾丸のようなスピードで飛んできたので、横に転がり回避。

そうになると、必然的に龍多の後ろにいた蒼に向かう事になり。

顔にぶつかった。

直撃した蒼に異常は見られない。

速かったので結構な威力があったのかも思っていたが怪我はない様子で一安心だ。

蒼はしばらく呆然と顔にゴキブリを引っ付けていたが、しばらくしてそれを掴む。

ゴキブリは己のスピードに耐え切れず気絶した様子で動く気配を見せない。

蒼がそれをゴキブリと判断した瞬間、顔を真っ青に変え、

「きゃーーーーっ！ ゴキブリイイーーーーッ！」

それを思いつきり開いている窓に向かって投げた。

蒼はかわいらしい悲鳴をあげ、ゴキブリを葬り去った後にハッと顔をこちらに向けてきた。

(……なんだ、苦手なんじゃん)

さっきは動揺するなんて大したことないと言っていたのにと龍多はからかう材料ができたとうししと笑う。

それとなく会話を試みよう。

「お前、ゴキブリ駄目じゃ」

「何のことかしら？」

さっと髪を掻き揚げる姿に見とれる。

蒼は何事もなかったかのように毅然とした態度で龍多を見据えていた。

「ゴキ」

「さて、少し手を洗いに行ってくるわ。それと用のない生徒は速やかに寮に戻りなさい」

伝えて、蒼は早歩きでトイレに向かっていた。

きちんと廊下を走らないようにしているのが蒼らしい。

龍多はそう思い、蒼の言う事など完全無視の方向で、戻ってくる事を信じて、携帯で攻略情報を読み続けた。

頭に叩き込み、どんな状況にも対抗してやると意気込んで。

龍多が資料室の前で蒼の帰りを待っているときの事。

蒼はトイレで手を洗いながら、

「千歳、ちょっと出てきて」

蒼はある人の名前を呼ぶ。

「はい、なんですか？」

メイド服を纏った女性が蒼の背後に現れた。

蒼は千歳が現れたことを確認する。

千歳とは蒼の監視役であるメイドだ。

『一』の家からは常に見張られている蒼。

蒼はその生活に嫌気がさしているが、その家で唯一の味方なのだ、千歳は。

「『琥ノ村』家について調べたかしら？」

蒼がそう尋ねると千歳は端正な顔を縦に振る。

「はい、何から知りたいですか？」

「あの琥ノ村の家が落ちこぼれた理由と、それからの琥ノ村の生活、琥ノ村の能力について」

「かしこまりました。まず琥ノ村の家が落ちこぼれた理由は悪魔を召喚したことです」

「悪魔……。なるほど、だから公には理由がでていないのね」

悪魔の存在は一般人には知られないように悪魔に関する事件は情報操作するのは常識だ。

たとえばつて有名だった家の事件だろうとそれは変わらない。

「悪魔を召喚した理由は？」

「それは……。定かではありませんが。たぶん琥ノ村龍多の魔力のなさをどうにかしようとしたのでしょう。だが、悪魔は言う事を聞かず暴れまわり、琥ノ村兄妹以外を殺した」

淡々と答えるが、内容はとても残酷な事だった。

(よく、あんな明るい性格に育ったわね……)

今の龍多はそんなつらい過去など微塵も感じさせない明るい人間だ。

蒼はさらに先を促す。

「琥ノ村龍多はそれから魔法戦闘部隊に入り、中学二年までずっと入っていたそうです。それからこの学校に入るまでは特に目立つ行動はないようです」

「じゃあ、昼に見た阪井田の奴の魔法を破壊したのはなんなのか分かる？」

「あれは、遠めに見ましたがたぶん魔法の効果を失くすなんらかの魔法を放ったでしょう。又は、悪魔と契約を結び、悪魔しか使えない魔法をしようしたのかどちらだと思われます」

千歳は静かに言いつらねていく。

「この世界に魔法の効果を失くす魔法なんてあったかしら？ 悪魔と契約したほうが可能性としては高いわね」

「そこは蒼様の御好きなように考えてください。では私がこれ以上ここにいってもおかしいので遠くから監視をしたいと思います」

「あつ、ちよつと待って……後でいいので私が琥ノ村といるときに右手を挙げてクルクル回したら琥ノ村を奇襲してほしいのだけど、頼めるかしら？」

「かしこまりました。全力で、でいいのでしょうか？」

僅かに舌を出して、唇を舐める。

まるで、おもちゃを見つけたと口元を嬉しそうに吊り上げる。

蒼はまた千歳の悪い性格がたと、頭に手をやり、しかし用件はしっかり伝える。

「全力で、よ。紅音を守るのにふさわしいかどうか見極めるのよ」

「紅音様、ですか。本当に妹想いのいい姉ですね」

我が子の成長に嬉しがる親のように千歳は微笑む。

そんな視線を受け、蒼は恥ずかしくなりそっぽを向き、

「あの子は私のせいで生まれたのだから、私が面倒を見るのは当然よ。それに、あの子は大切な妹だもの……」

悲哀に近い笑みで蒼は笑う。

そんな表情を見て、千歳はこの人はいつになったら笑えるのだろうかと考えていた。

## 十二話 気遣いないと駄目

「あなた、まだいたのね」

蒼は手を洗い終えたようで、戻ってきた。いたのねと否定的な物言いだ、予想通りという顔だ。どこかすっきりとした顔つきだ。

「うんこでもしてたのか？」

結構長かったので素直に疑問に思った。龍多の発言は蒼には理解しがたい質問だ。普通女子にそんなことを尋ねるのはしない。龍多にとっては大したことはないが。龍多は携帯をしまい、立ち上がり近寄る。

「ちょっと聞きたい」

「あなたはデリカシーがない、どこの話じゃないわね」

ぴしゃりと叫び龍多の言葉を完全に遮断。

へ？ と龍多は間抜けな声をあげる。

一体何がいいたいのか分からないという表現が一番正しい龍多の顔。

「私は普通に手を洗いにいっただけよ。なのに、変なことを聞かないでちょうだい」

蒼は怒ったまま資料室の中に入って行った。

突然怒鳴られ、何がどうなっているのかと一瞬考えた。  
しかし何も分からずお手上げ。

そのせいで蒼を追いかけるのにわずかに遅れる。

中に入ると抱いた感想は 暗い。

暗幕をなぜか窓ガラスに貼り付けているので、外からの光が差し込むことは全くない。

蒼は先に入り、電気をつけているのかと思っていたが、違った。  
全く見えないと言うわけではなく、少し気になる程度だが。

「どうしたんだ？」

中に入り、顎に手を当てている蒼がいたので尋ねると蒼は顔を上げる。

目には訝しいとありありとみえる。

「あなた、なぜここにいるのよ？」

今さらながらの質問だが龍多は頭を掻きながら、

「部員勧誘に来たんだよ」

「部員？ ああ、あなたが作ったわけの分からない部のことね。…」

「私を？」

自分を誘っているのだと気づき、目を僅かに開く。

だが、すぐに顔をいつもの冷たい表情に戻す。

「私があなただの部に入るわけじゃない………」

呆れを混ぜての嘲笑。

様々な気持ち混ぜたその顔には龍多は首を傾げて返すだけ。  
龍多は蒼の態度を特に気にはせず先を進める。

「いいじゃん。どうせ暇なんだろう？ 知ってんだぜ！」

「何を根拠に言っているのか知らないけれど、暇じゃないわ。私は部活に入っているわよ」

「だったら、やめればいいと思う」

「あなたが誘うのをやめればいいのよ」

「気にすんな」

龍多はこれ以上話しても前に進むことはないと感じ、そこで中断する。

蒼も意図を理解する。

意外とこの二人は気が合うのかもしれない。

「お前ここに何しに来たの？」

「私はこの整理を。とは言ってもこれはひどいわね。これから下校時間までやっても終わりそうもないわ」

目の前のほこりを被った数々の物を見て頭を振る。

どうしようかと、考えているように見える。

龍多はそこで手を打ち、

「俺が手伝えばちったあ早くおわんじゃねえの？」

「あなたが？ でも、これは私が頼まれた仕事だから私がやらなければ意味はないわ」

全部言い切る前に龍多は今しがた覚えた攻略情報を引つ張り出す。  
（なるべく気を遣って考えれば攻略はさほど難しくないとか書いてあったよな。つまり、優しくすりゃあいってことか……むずっ）  
細かくは思考せずに思ったことを発する。

「じゃあ、勝手にやるから。俺は俺のやりたいことをな」

蒼の返事など待ちもせず作業に取り掛かる。

蒼は何か言いたそうに口をもごもごさせてから、はあと嬉しさ半分呆れ半分のため息を漏らして、

「変な人ね」

小さく呟いた。

結局下校時間ぎりぎりまでやり、それでも半分ほどしか整理ができていなかった。

まず第一にあの部屋の電球がきれいだったことが問題だった。

とにかく、二人は仕事を終え下校中だった。

隣に歩くのは紅音によく似た蒼。

横目で盗み見る。

目つきを柔らかくし、髪をサイドポニーにしてニコニコ笑っていれば確実に紅音になるだろう。

双子　だからと言って似すぎではないだろうか？

龍多は盗み見ていたつもりだったが、途中から見つめるようになっていたようだ。

視線に気づいた蒼は顔を向けてくる。

「何かついてる？」

また髪に何かついたので聞いてきたので龍多は違つと手を振る。

「だったら何よ。さっきからジロジロ見てきて」

億劫そうに蒼が言うのを龍多は感じて、答える。

「佐々波に似てんなあと思ったただけだ」

「……双子だからよ。最悪なことだね」

毒舌状態の蒼を見て龍多は本来の目的を思い出した。

蒼に質問したい事があった。

前に紅音と蒼が風紀委員室で対面したときに見せた蒼の苦しそうな表情。

あれを、ここで聞こう、龍多はすうーと息を吸いあげる。

「前に佐々波に悪口言ってたけど、何であの時苦しそうな表情をしてたんだよ」

龍多の発言に、蒼は驚いたような顔つきになる。

不意打ちを喰らった、面喰らった。

蒼はそれでもいつもどおりの声で返す。

「はあ？ なんのことかさっぱりね」

蒼はすぐに表情を取り繕ったが龍多はばっちし見ていたのでじーと詰問のまなざしで見続ける。

ずっと、見続けていると蒼は耐え切れなくなったのか疲れたように吐息をだす。

「妹に悪口を言って平気な人なんて少ないわ。私ももちろんそんなのは嫌よ」

「だったら、やめればいいだろ」

「そんな簡単なものじゃないのよ。私の家から紅音とは仲を悪くしろと言われてるのよ」

「別にはれなきゃいいだろ？」

もつと言つと、家の命令なんて馬鹿げてると言いたいがそこまでは抑えた。

龍多にとって馬鹿げている相手にとってはそうでないかもしれない。

自分の考えを押し通すのはタイミングが必要だ。  
今はそのタイミングではない。

「私は家から監視をつけられているのよ。その内の一人とは仲がいいけど他はみんな敵。少しでも仲がいいところを見せればすぐに家に連絡が行き、紅音が家からひどい扱いを受けるのよ」

「……ふざけてんな」

静かに漏らした言葉には怒りがにじみ出ている。人を人とは思っていない所業に龍多は紅音の事を考えた。普段の元気な様子が空元気にしか見えなくなりそうだ。

「今日も監視されてんのか？」

龍多が周囲に視線をはわせるが特に敵意を感じるようなものはない。

つまり、敵からは監視をされていないということになる。

「今日は私の唯一の味方の人が監視の番だから平気ね」

それは監視として成り立っているのか？ と問いたいがもっと重要な用件があるので今は脇に置いておく。

「だったら、仲良くすればいいんじゃないか？ そついう日だけでも」

「紅音は昔のある事件をきっかけに私の事を完全に敵だと認識してるわ」

ある事件？

気になるがそれは蒼に聞いても教えてはもらえそうにない。

「ちゃんと話せば理解してくれんじゃないのか？」

人間には言葉があるのだから。

龍多の発言に蒼は首を捻り、自虐混じりで笑みを作る。

「無理だから、今こうなってるんじゃないの。私はあの子が幸せになつてくれるように願っているのよ。だから、あなたを試すつて決めたのよ」

蒼が手をぐるぐる振り回し始めた。

一瞬間のネジが吹き飛んだのかと思つたが、違う。合図を、出しているように見えた。

龍多がそう思つた瞬間に何かが飛んでくる。

流星のようなスピードでのあきらかな攻撃に見える一撃を龍多は横に転がることで避けた。

「なにが起こつてんの？」

龍多は疑問で埋め尽くされ現状を理解できていない。

そんな龍多に蒼が声をかけた。

「あなたが紅音を守るのにふさわしいかどうか見極めるために手伝つてもらつてるのよ。そこにいるメイドを倒せば合格、負けたら紅音には金輪際近寄らないで」

冷酷な、冷徹な宣言。

龍多はゆっくりとだが、現状を理解し始めた。

つまり、テスト。

単純な言葉で決めるならそれだ。

でも、なぜ今いきなり試そうとしたのか理由が分からなかった。

攻撃してきた相手は女　メイド服を着ている。

戦いの場なら掃除とかのほうが得意そうだなと龍多は胸奥で皮肉を言う。

「あなたが琥ノ村龍多様ですね。阪井田の糞野郎を倒したときから戦ってみたいと思っていたのですよ。不意打ちは避けられるとは思っていませんでしたから……ますます興味がでてきました」

にいと戦う事が大好きな様子のメイド　千歳の怖い笑みを受け、龍多は背筋に冷たいものが走るのを感じた。

龍多はどうするか。

まずは相手の得物を確認してそれから対策を練ろう。

短い刀。それが千歳の武器だ。逆手に持ち、先程のスピードとい忍者みたいだ。

まだ、鞘から抜いていない所を見ると最初の一撃は一応加減をしてくれたらしい。

千歳はにこつと可愛らしく笑った後、龍多の目の前まで瞬間移動をお見せした。

速い。ぎりぎり目で追える。

龍多は一步後ろに下がり、鞘に入ったままの一撃を避ける。

避けられたはずなのに千歳はさらににやあと笑い、連続での攻撃。

千歳も避けられる事は予想済みだったようで二撃めへの攻撃は速かった。

その一瞬を見逃さず、龍多は近くの砂を掴み上げ、千歳に投げつける。

「甘いですよ」

目くらましのために投げた砂は千歳が喋った瞬間、風の魔法でこちらに送り返されてしまった。

何とか術式を解除する。

自分の攻撃を逆に利用されてしまい、龍多のほうが見界が悪くなった。

龍多は千歳の戦闘能力の高さが嬉しくて無意識のうちに笑っていた。

た。

龍多も強い相手と戦うのは好きなので、この反応は当然と言えば当然だ。

似た物同士の戦闘マニア。

千歳が何度か斬りかかってくるがすべてをぎりぎりのところで回避する。

武器を持っていない龍多は反撃を仕掛けられない。

「攻撃をしてこないのですか？」

千歳は理由を分かっている様子で尋ねてきた。

千歳の発言に龍多は額に出始めてきた汗を拭い、考える。攻撃する暇がないのだ。

避ける事だけが精一杯で攻撃が出来ない。

ましてやこちらは素手だ。

万が一ガードに刀を使われればその時点で龍多の攻撃は相手の攻撃に変わってしまう。

(刀、持ちあるいときゃよかつたなあ)

基本どこに行くにしても持ち歩くが学校までは持ち歩かないようにしているのだ。

刀を持ち歩いているときはついつい気を張ってしまう。

さすがに学校まででも気を張っているのは疲れるから持ち歩かないようにしていたが、それが仇になるなんて……。

これは『本気』を見せなければいけないかもしれないかと龍多は笑う。

疲れるが、それでもあの状態で戦える相手がいることに体中の細胞が喚起する。

「いい加減、逃げるのもやめていただきたいですね」

「なら、攻撃止めてくれよ。そしたら戦ってやるから」

軽口をぶつけると、千歳は真面目な声で、

「いえ、こちらが仕留めに行きますから」

そういうと刀を鞘に戻し目を閉じ、なにやら呟き始めた。

魔法の術式を組む際に、集中するため自分の好きな言葉 詠唱  
を行う者がいる。

たぶん詠唱をしているのだろうが、それにしても無防備だ。

あれほどの実力者が何も用意せずに自分の裸を見せるような真似はしないと思い、うかつに動けない。

結局カウンター狙いになってしまふ。

そのカウンターすら撃つタイミングがないのだが。

「斬撃は風の魔法で簡単に起こすことができます。その威力は魔法の力よりも刀と空気との摩擦力での威力に比例します。つまり、私はこれから居合いで斬撃を飛ばし、あなたの体を切り裂くと言っわけです」

「……やべえ」

斬撃を飛ばすのは涼が使っているのを見たことがある。

あの威力はやばい。

涼が自分の必殺技だと自負するほどにそれは強力なのだ。

やろうと思えば校舎さえ切り倒せるほどの広範囲と破壊力を兼ね揃えた風魔法の高級技。

魔法なのでやろうと思えば術式を解除できるが……速すぎて解除してる最中に体が半分になってしまふ。

仕方ない。

龍多は『本気』を使うためにそつと腕時計を取り出して手にはめた。

そして、目を瞑り、集中し始めた。

### 十三話 力を使うときは惜しまず使え

龍多は静かに呼吸をする。

自分の脈拍を測るように、とにかく冷静になる。

そして、自身の身体の中に術式を組む。

身体能力を強化する魔法。

しかし魔法とは言えない、無謀なものだ。

身体能力を強化する魔法などない。龍多が自ら編み出した魔法。

だが、これも魔法 魔力が必要だ。

おまけにこの魔法は魔力をかなり使用するので、たとえ魔力がある人間でも大しては使えない。

しかし、龍多は自分でも使えるようにこれを改良したのだ。

自身の体力を削り、それを魔力の代替にすることで魔法は発動する。

体力から魔力への変換は一回でかなりの魔力に変化するので龍多がこれを使うときは普通の人よりも魔力はある。ただし、通常の魔法への変換はできないので純粋な魔力とは違うようだ。

秒数×二倍の身体強化。

龍多は最高でも一分しか持たず、今腕についている腕時計は時間を確認するための物だ。

(魔法……発動！)

龍多は途端、体の中が暴れるような錯覚に捕らわれる。

体が悲鳴をあげるが、それはいつものことで慣れている。

強化された今、耳で聞き取る音により、風の流れを読み取る。

千歳の魔法は風の魔法の延長のようなもの。

風の流れを読み取れば大体の攻撃コースは分かる。

龍多は時計を確認しながら、走る。

今六秒。元の状態から十二倍の身体能力だ。

「なっ!？」

千歳が目を見開き、反射的に刀を抜き放つ。

鋭く、素早い一撃。

さっきまでも互角のようなスピードだったのが龍多は何倍にも増幅されている。

先程までは速いと感じていた攻撃も、今は緩慢な攻撃にしか見えない。

ある程度予測もついていたのでそれを横飛びして千歳の側面に回る。

走れば一秒も満たない時間で攻撃範囲に入ることができる。

「何をしたかは知りませんが、全方位を攻撃すればどんなに速くても意味はありません」

風が千歳の周囲を覆うように集まっていく。

口にした通り、周囲全体を攻撃するのだろう。

それでもどこか冷静な頭で龍多は術式を見る。

今ならどんな速い技だろうとすべてを見極める自信があるからだ。

千歳は宣言通りの周囲すべてを切り裂く魔法を放つが。

案の定一瞬で術式の解除に成功する。

驚愕に歪められる千歳の顔、それでも戦意を失った様子はなく刀を龍多に向かつて振り上げる。

あきらめない態度に好感を抱く。

突撃のようなスピードを出していた龍多にカウンターをヒットさせるように攻撃だったが、強化された身体能力であっさりと攻撃を回避し、千歳の手首を握る。

強く握られたせいで千歳の指の先に力を送る事はできず、千歳の感情とは裏腹に刀は手からこぼれ落ちる。

龍多はにやっとなつと笑い空いている手でそれを拾い上げ、千歳の首元

に突きつける。

誰がなんといおうとも龍多と千歳の戦いはこれで決着がついた。

「はい、俺の勝ち」

少年のような無邪気な笑顔を浮かべ、勝ち宣言。

龍多にとっては突然でいまいち状況が掴めない中だったが、戦って勝つのが嬉しかった。

根っからのバトル好きだ。

千歳ははふうと緊張の糸を切るような声を漏らす。

ずっと観客でいた蒼が二人の戦いが終わったのを確認する。

龍多はもちろん無駄に消費しないために戦いが終わった瞬間に術式は解除している。

「さすがね、琥ノ村」

特に感情のこもっていない賞賛だったが龍多は嬉しそうに笑う。

「まあね。俺に敵なし！ ってな」

「それなら、紅音も任せられるわね」

ずっと気になっていた事 紅音を任せる。

それは自分が面倒を見切れなくなったと言いたいのだろうか？

どこか隠すような物言いに龍多は考えていても分からないと胸中で呟く。

「任せるって、なんだよ？」

素直に尋ねると蒼は腰に手をあて喟然きぜんする。

顔には説明はしたくないと書かれているが、龍多はそんなんじや満足できない。

聞きたい事は山ほどあるんだ。  
それを察して蒼は口を開く。

「来週の今日。紅音の誕生日よ」

「？ つまりお前の誕生日でもあるのか」

「そりゃ祝わないとな」と付け足す。

明るい内容に龍多の顔には笑顔が生まれる。

「その日をもって紅音は命を狙われるようになるわ」

だが、その笑顔は一瞬で強張る。

蒼の言葉を理解しようとするが、意味は一つしかない。  
比喻でもなんでもない、本当に命を狙われるのだらう。

蒼の鋭い、真剣さを含んだまなざしにわずかにたじろぐ。  
それでも龍多はどこからか来る怒りのほぅが感情を支配するようになり、気づけば鋭く目を細めていた。

「説明しろ」

脅すような声音で蒼に言う。

「その日にあの子は用済みになるのよ。――このまえとしては邪魔なものは排除したいのよ。勝手な話だけどね」

「用済み？」

「私の家では必ず子は二人以上いなければならぬのよ。その二人を競い合わせ、より優秀な方が家を継ぐ」

「……それで、お前は？ 佐々波が用済みってことはお前はどんなるんだよ？」

家を継ぐ、のだろう。

問わなくても分かる事だが、無意識のうちに口にしていた。

「私は家を継ぐのよ。結婚もすると思うわ。今年には学校をやめろしね」

やはりそうだった。

でも、少しおかしい気がした。

双子なのにまるで後から生まれたかのような言い方だ。

何か腑に落ちない点があったが、蒼のミスだろうと気にしない事にした。

「……でも、お前って婚約者いなかったっけ？ 名前は忘れたけど……確かアホ田とかそんな感じの奴が。あいつ俺たちと同じ年だろ？ 結婚はまだできねーじゃん」

「私の家では子が重要なものよ。私のとときのような子がとにかくたくさん必要なのよ。だから私は何人かの有名な家の人間と結婚、又は子を作る関係になるのよ。世間体ばかり気にする『家』の連中も私の代のように子供が少ないのは嫌なのよ。馬鹿みたいよね。世間体を守るために世間から石を投げられるような事を平気でやるのよ」

自嘲とは違う、あきらめの色が目に見えて分かる。

もう決まってしまった作られた自分の人生。

自分のやりたい事もできずに、ただただ家のためだけに尽くす。

「ふざけてるな……」

怒りが込みあがってくる。

それでも蒼にぶつけても仕方のないことは分かっている。

言う言葉が見つからない。怒鳴り散らすだけならいくらだってできるが、蒼を慰める言葉は見つからなかった。

ほんと、俺は馬鹿だと口の中でぐちる。

「お前は、いいのか？」

「……それには答えられないわ」

答えたら 口にしてしまえばきつと堪えられなくなるから。

蒼は寂しげに目を伏せ、遠くを眺める。

こんなにいるいろ話してくれるのは信用しているからだろうか。

それとも今日は監視がないからか。

後者の方が蒼らしいな。

龍多は一考して、関係ないなと頭を振る。

「別にいいなりにならなくてもいいだろ」

「これはきつと愚問だ。

龍多には分かっていた。

自分より頭のいい蒼がただ言いなりになるわけがない。

なにかしらの理由があるのは容易に想像できる。

それでも聞いてしまった。

「私がそうすれば紅音には関わらないと言ったのよ。そのおかげで

今までは無事に生活できていたの」

大体予想通りなので笑えない。

たぶん蒼も分かっているのだろう。家の人間が自分との約束など守るはずがないと。

今までは蒼が見ていたといことで守ってくれたが自分の目がなくなった瞬間紅音の命はすぐに失われてしまいかもしれない、だからここで龍多に頼ったのだろう。

(もつと、頼ってもいいのにな……)

誰かに甘える事を知らないのか。

蒼はそして悲しげに笑った。

「私も普通の家に生まれて、今までを生きていればあなたみたいに馬鹿なことできるのかしらね」

馬鹿なことつてと龍多は苦笑い。

その笑いの力を利用して努めて明るく声を出す。

「どんな家に生まれたってやろうとすりゃできんだろ。でも、分かった。佐々波は俺が何とかするよ。あんたは自分の好きなようにやれよ」

「本当はあなたにこんなことを頼むのもいけないのかもしれないけど、よろしく頼むわ」

蒼はそう言つて、寮に一人で戻っていった。

その背中は凄く小さく、弱弱しいものだった。

どんなに断固とした性格でも、女の子。

弱いんだ、俺も、佐々波も一も。

自分だって弱い、でも誰かを助けられるのなら。

いや 首を振る。

そして希望でなく、断言する。

誰かを助けたい、誰かじゃなくて目の前の二人を助けたいんだ。  
部活に入れるためにどうにかしたい、という思いから友達だから  
助けたいという気持ちに変わった。

そのためには紅音と話をしなければ先に進むことはない。

どうやって、仲直りをさせるきっかけを与えるか、そこを考える  
のだ。

龍多は名案が思いつくまで一人佇んでいた。

## 十四話 ハバネロコーラ

平日最後の日。

学校も終わり、部活動 紅音しか来れず結局なにもせず帰宅の準備 も終わり、龍多は帰路に着いていた。

隣には紅音。

一日程度しか空けていないにも関わらず、久しぶりだと感じていた。

(ここんとこ蒼についていろいろあつたからなあ)

紅音は頭の後ろで腕を組んで鼻歌混じりで歩いている。

二人を仲直りさせたいのだが、結局具体的な案は何も浮かばずぶっつけ本番のようなものだ。

今、周りに誰もいないで二人きりだ。これは中々のチャンスだ。

何か、きっかけを掴めればいい。そう思って龍多は蒼の名前を出すことを決心した。

「佐々波」

名前を呼ぶとしかし質問が飛んでくる。

「そついえば龍多くんて私のこと名前で呼ばないよね？」

即座に機先を制され龍多はなんともいえない顔で「おう………」と答える。

「私だけが龍多くんのことを名前で呼んでもなんか変だよな？ だから、龍多くんも名前で呼ぼう！ はい、決定！」

パチパチパチと小気味良く拍手をする。

龍多は頬を数度搔いてから、

「いや、別に名前で呼ばなくても」

「……名前で呼ぶのは、嫌……？」

上目遣いで紅音は不安そうに瞳を揺らしながら尋ねてくる。

蒼と話して分かったことがあったが、たぶん紅音は必要以上に人に甘えたがるのだろう。

誰にもそんなことを出来なかった分、今から取り戻すように人に甘えたいのかもしれない。

でも……だったら……。

(一もそうだよな……?)

今でこそレベルは違うが二人は似たように育ってきたはずだ。

そうなる と必然的に蒼も誰かに甘えたいという欲求がでもおかしくないのだが。

いや、今は蒼は置いておこう。

返事をすぐにしない龍多の様子に心から心配そうに瞳を伏せていた。

少しでも、紅音のために何かしたいと龍多は思っている。

だから、いじわるのような今の間だったが既に答えは出ているようなものだった。

「んじゃ、よろしくな紅音！」  
あかね

手を挙げてにこやかに言う と紅音はさあーと頬を赤くして嬉しそうに、でも恥ずかしそうに笑った。

龍多は彼女の笑顔を見て満足してしばらく普通に並んで歩いていた。

「あつ」紅音が懐かしそうな声をあげた。

龍多は紅音の視線を追い、対象を確認する。

そこは寮への道から少し外れた場所にある花壇だ。

花壇の近くにはベンチもあり、花壇よりもこのベンチでの休憩を目的に利用する生徒は休みの日には多く見られる。

平日で、部活をやっているような時間帯。

今この場には人がいなく、貸切状態だ。

龍多は紅音の漏らした懐かしい色の声で「ああ」と同じような波長で声を漏らす。

「ちよつと寄つてごうよ」

紅音は龍多の返事を待たずして龍多の腕に自分の腕を絡ませ引張っていく。

龍多はバランスの取りにくい態勢のまま歩調を合わせる。

ベンチの近くに置かれている自販機の前まで行き。

「飲み物でも買いましょうよ」

「別に寮に戻ってから何か飲めばいいじゃん。そっちの方が安上がりだぜ」

「そうだけどねえ。ここで飲むからこそその風流なんじゃん！」

「ふ、風竜ね。いやあー一度ぐらい見てみてえよなあ……」

竜が大好きな龍多は自分の夢の世界に飛んでいってしまふ。

紅音は龍多の財布から百円を抜き取り、目を瞑ってのランダム性を楽しむ買い方でジュースを購入。

でてきたのは　ハバネロコーラだった。正式な商品名はハバネロインザコーラ、通称ハバネロコーラ。

謳い文句はカラシユワツ！　一部の人には絶大な人気を誇る飲み物だ。

ちなみに紅音では好きでなく、龍多も同じく好きではない。

紅音はプルタブを開け、「竜は乗ってみてえけど戦うのもありだよな、うーんとにかく一度見てみてえ！」とぶつぶつ言っている龍多の手に握らせる。

龍多は条件反射か、離さない様すっかりと握る。

そのまま、何の疑問も持たず一口あおる。

そして、

「が、がらあ”あ”あ”—————！！」

飲み物をすっかり紅音に渡してから、その場を転げまわる。

素晴らしい回転だ。

この回転が別向きになれば人間からコマへの転職も叶うだろう。

飲み物を飲み、喉が渴くという本末転倒な状況になるまで叫んでから、龍多はたらこのように膨れた唇を指差す。

紅音は感心したような声をあげる。

「わあー天然のたらこだー」

「天然じゃねーよ！　養殖だっ！　てか、お前俺が辛いのが苦手なの知ってて辛いのがくれやがったなっ！」

「知らなかったけど、私も辛いのが苦手なんだよね」

「へえ、奇遇だね。ってちげえよ！　俺はんなもん知りたいんじゃない。俺にジューズを奢ってくれって言いてえんだ」

「そんな意味があつたんだ」と呟いてから、はて？ と首を傾ぐ。  
「なんで？」

龍多は指一本たて腰に手を当てて、偉そうに語りだした。

「物を壊したら人は賠償しなければいけません。人を傷つけたら？  
答えはもちろん。そう、弁償しなければいけないんだぜ。つまり、  
ジューズ一本を奢ってくれよ」

「しょうがないな。利子は一日百円だよ」

「おう……って利子！？ 俺は無料がいいんだよ！ ノーライフ、  
ノーマネーだ！」

「仕方ないなあ……はい、すきなのを買っていていいよ」

紅音はなにやら見たことある財布から百円を取り出し投入する。

「俺の金ええええええーっ！」

慌てて龍多が駆け寄る。

「えいつー！」

紅音は楽しそうに目を強く締めて龍多が止めに入るよりも先にポ  
タンを押す。

今度は危険ゾーンから外れての無難な飲み物 お茶が出てきた。  
龍多はいろいろ言いたいことがあつたけど、一応お茶というおい

しい飲み物に免じて、細かいことは気にしないことにした。

なぜか紅音は龍多の金で自分のを一つ買っていたが気にしてはいけない。

二人はそれぞれの飲み物を持って近くのベンチに座る。

目の前には花壇　　はなく、あるのは木が数本だ。

一番景色が残念な場所に座ったが、二人はそもそも風景に興味などないのでこの選択には特に問題はない。

龍多がお茶のプルタブを開けようとして、しかし、開かない。

異常なまでの強度を搭載しているプルタブ。

龍多の爪を弾き飛ばさんばかりの堅さだ。

まるでポンドで周囲をコーティングしているようなプルタブに龍多はふぎぎと力を入れたための反動で顔を不細工に歪ませる。

「あ、あかねえええ〜〜！」

「えっ？　呼んだ？」

ぐびぐびホットココアを飲んでいた紅音は、突然自分の名がでてきたのでぼかんとしていた。

「ちげえーよ。何かこれ異常にかてえんだ。あーくそ手がいてえな」

はあと手に息を吹きかけ、再挑戦。

何度か攻撃をしかけると、ようやくプルタブはあきらめたのか「しかたねえな」と言った感じで動いた。

勝ったと油断していると。

イタチの最後っ屁とばかりにワイシャツ姿の龍多にお茶が吹き飛ばぶ。

冷たくなり中身がちょびっと減るだけの被害で済んでよかったと、龍多は見当違いに安心していた。

「やっと飲み物にありつけたぜ……」

どこか悲愁交じりのその声には疲れがありありと見えていた。金がちやっかり消費されていることもますます疲れを進展させる要因となっていた。

龍多が飲み始めた頃には紅音はほとんど呑み終わっていて、出てきそうに出てこないわずかな量のココアを飲むのに夢中だった。

「ここがどこか覚えてる？」

紅音が龍多が落ちついたの待っていたかのようなタイミングで声をかけてきた。

ちょうど飲むのに一区切りがついたベストタイミングだったので紅音の状況を見る目は案外あるなど驚嘆していた。

「俺と、お前が初めて会った場所だね。懐かしいなあ」

「あの時は龍多くんのことあんまり良く思ってたんだよね……」

そういえば初めて会った時はやけに噛み付いてきた、野良犬のようなやつだったなと懐かしんでいた。

元々龍多がああの部を作るきっかけになったのが紅音だ。世界には敵しかいないとばかりに他人を敵視する紅音。誰かを信用してはいけないと信じ込んでいる様子だった。

「あん時は怖かったなあ。今にも噛み付いてきそうでひやひやだったよ」

「後で犬が噛んで遊ぶみたいなぬいぐるみを前にして『噛むならこっちにしてくれよ』とか言ってたよね」

「あのぬいぐるみ確か部屋に置いてあるな」

なんだか物置みたいになってきている。

「私それ見て『この人は敵ではない』と思えたんだよね」

「ふうーん。ぬいぐるみのおかげだね」

「そうだねー。龍多くんって……家のことかどうしてるの?」

歯切れの悪そうな紅音の態度を見て苦笑する。

紅音にとって家の話題は進んで話すべきものではない。

龍多も好き好んで話すつもりはないが、聞かれて困る物でもない。頭を掻きながら、思い出していた。

## 十五話 確執

紅音がこの話題を出すこと事態が龍多にとっては以外だった。

家についてはあまり良い感情を持っていないと思っていたからだ。

それは他人の家にも当てはまるのだとばかり決め付けていたが…

…。

それでも、話すと言う事は蒼と仲直りでもしたいのだろうか。

龍多はそう予想立てたがただ単に紅音は龍多のことが知りたかったからだ。

「家は別に。もうそこら辺の家とやら変わりなし。あるのは他の家の連中から馬鹿にされたりするだけ。気にする必要もなし」

「へえ……。龍多くんって強いよね」

俺は強くない。

龍多はそう思っているが、多少のおちゃらけた気持ちで、

「ったりめえだ。強くならなきゃな、大切な物を守るためには強くならなきゃな」

紅音を安心させるために、というのとは少し違うが部長として、他人を引っ張る者としてはっきりと断言する。

うんうんと満ち足りた顔で言った。

紅音は手のなかで空き缶を遊びながら、目を伏せた。

「私にはそんなものない、かな。力は復讐のために……」

暗い表情で呟いた言葉を龍多は聞き逃さなかった。

「復讐つてのは一いちについて何か？ それとも一いちの家に対して？」

「……どっちもだよ」

ふんといらだちをふんだんに混ぜ込んだつまらなそうな顔で言う。  
龍多は紅音のほうを向き、肩を掴んで顔をあげさせる。

真剣な顔つきに紅音は不意をつかれて、なんだか落ち着かない気分になってきた。

「お前は一回、一と話し合ったほうがいいよ」

紅音は龍多が一を氣遣うような物言いに唇を震わせながら言い返す。

「なんで……！　なんで、あいつのことを心配するように言うんだ  
！」

激しい剣幕に押され、一歩後ずさるが、

「お前は、一の事を勘違いしてるんだよ。あいつはそんな悪者」

じゃないと言おうとした瞬間に、

「ふざけたこと言わないでよっ！」

紅音が龍多の手を振り払い龍多の胸倉を掴む。

「あいつが……！　あいつが私から私の大切な……奪ったんだ！」

私はずっとから劣化品、欠陥品、と言われ続けてきたんだ。全員殺したくて殺したくて、でも力がなくて。人を信じられなくなったのもあいつが私を裏切ったから……なのに」

紅音はは涙を目じりにためながら思いの丈を吐き出す悲痛な叫喚きょっかんを、龍多は落ち着いた心持ちで聞いていた。

「それがたとえ本当だとしても俺は一が悪いやつには思えないぜ。あいつはお前の事を心から心配してたんだ」

一と話し合うというのは少し違うが話した結果からの推測だ。紅音は絶望したような顔で龍多の胸倉から手を離す。そして、切り札とばかりに一つ言った。

「昔も、あいつは私のことを心配してくれてたよ。ずっと家からペツトにするような扱いを受けてた私をばれないようにだけどずっと私を慰めてくれてた」

確かにあいつはおせっかいな所があるなと龍多は頭に浮かべる。紅音は冷め切らない怒りを拳に固めながら紡ぐ。

「それが私は嬉しかったんだ。でも……二年前の私の 私たちの誕生日にあいつは裏切った」

あははと感情の籠らない、背筋を凍らせるような笑い声をあげてから。

「その年の誕生日に私たちはお互いにプレゼントをしてたんだよ。私の今つけてるこのさくらんぼのヘアピンはあいつがくれたもので、私はあいつにみかんのヘアピンをあげたんだよ」

大切な物だったと紅音は虚ろな様子でいい足す。

「仲が良かったんだな」

それしかでてこない。

やっぱり昔は仲が良かったんだ。

だったら今からでも遅くはないはずだ。

「仲が良かったのはそこまでだよ。私はあいつの裏切りにあって本当に死にたくなかった。

それでもここまで生きてきたのは全部あいつを殺すためにだよ。このヘアピンをつけてるのもあいつへの憎しみを忘れないためにつけてるんだもん」

まったく、欠片も、微塵も。

殺すと言っているのに迷いが無い紅音は、人が入れ替わったかのように全く違った。

「なんで、そこまで憎しみを持ってんだよ」

お前を裏切ったのはなんなんだよと言うと。

「私とあいつはこのヘアピンに想いを込めた。ずっと一緒に、喧嘩なんてしない。家をいつか普通に戻そうと。そして、私たちは絶対に相手を裏切らないと決めたんだ。でも一週間後の大雨の日に、約束を全部破ったんだよ、あいつは」

紅音は思い出し、搾り出すように言った。

「あいつ……が！ 私のあげたヘアピンを目の前で壊したっ……。『あんな約束、今日あなたを裏切るためにしたものよ』と家の奴らがするように蔑んで……。！ 『気分はどう？ 落ちこぼれのこのまゝか一紅音さん』って言って、……。きたんだ！」

嗚咽をもらしながらも、妙にうまい口まねをしながら、紅音は一番気になっていた点を説明してくれた。

どんな、気持ちでそれを聞いていたのか分からない。自分の中で蒼という存在がぶれていく。

正しいのか、正しくないのか。

蒼はいい奴なのか悪い奴なのか。

紅音の昔の話が聞かされた今、蒼は信じていいのだろうかと思つて自分がいた。

「ねえ、分かった？ あいつはそういう人間なんだ。人を信用させて、裏切るのが好きなんだよ……」

ポタポタと涙で地面を湿らしながら濁った暗い目で笑つ。

泣いているのに笑っている。

矛盾した二つの感情に、龍多は驚き、どうすることもできずただただそれを見つめ続けていた。

紅音も何も言わずにずっと虚ろな目をこちらに向けていた。

何か言葉を待っている。

それは たぶん蒼を馬鹿にする言葉、又は紅音のことを信用する旨の言葉だ。

考えがまとまらない頭では決して答えてはいけない、重要な分かれ目だ。

「だったら、確かめてみようぜ」

龍多はもう自分の目で二人が一緒にいる状況を見るしかないと思  
った。

どちらも言っている事は正しいはずだ。

でも紅音の言っているとおりの子にも思えない龍多が出した結論  
だった。

心のどこかで龍多は蒼に対して信頼に近い感情を抱いていたのか  
もしれない。

「……………龍多くん」

どこか残念な様子は自分の言葉だけじゃ信用してもらえないから  
か。

龍多はさっきまでの険悪な空気を吹き飛ばすように手を叩き、

「確かめてみなきゃ、分からないだろ。何か理由があったのかもし  
れないし、そこんとこ腹割って話してみようぜ」

「……………」

紅音は何も言わずに嫌そうな顔をみせる。

それが返事だとばかりに。

「言葉はいくらだつて偽れるんだからな。人なんてのは自分の心の  
中以外なら何だつて偽れる。だから、その言葉が真実かどうかもわ  
かんねえだろ？」

諭すように言つと、ようやく紅音は口を開いた。

「……………あいつを信用するの？」

「はつきりと言えない……けど、信用してないわけでもねえ。わか  
んねえーんだよ。だから、確かめんだろ」

「なにを？」

「二人の何が正しくて、何が間違ってるのかを、だ」

「そんなん、分かるわけないよ……」

「今、お前楽しいか？」

龍多の質問に紅音はすぐには答えない。

答えられなかったから。

聞かなくてもわかる、答えが分かりきっている質問だ。

龍多の目から見てもこんな状況下に置かれているのだ、楽しいわ  
けがない。

「学校は楽しくないってほとんどの人が言うけどさ、少しでも楽し  
くなるように努力はできるよね。でも何をすれば楽しくなるかなん  
てわかんねえーけど、お前の場合は一と仲直りできれば少しは改善  
されんじゃないか？」

龍多は何をすれば楽しくなるのかずっと考えていた。

悩みが変わるほどに考えていたそれは、結局答えが出ることはな  
かったが。

目の前にいる相手はどうだ？

悲しい、絶望しか知らないような瞳を携えている。

それは理由があることだ、理由があるのだから、それをどうにか  
すれば今よりも前に進むことができる。龍多は思う。

龍多の心の中には嫌な空気が満ちていたが、自分の言っている言

葉でようやく換気されたような気がした。

やっと、満足のいく答えが見つかったと龍多は笑う。

「何すりゃいいか分かんねえーのは俺も同じだよ。でもお前の現状おんなは他の人が持っている見えない何かとは違って見えてるし原因もほとんどわかってんじゃない。ずっと悩んでいるよりかは、行動しようぜ」

「それでも、過去は変わることはないよ。一度起こした事はどんなに後悔しても、どんなに神に祈っても変わることはない。そもそも神なんているわけないしね」

それは実体験からくる言葉。

龍多はそれに同意するしかないけど、同意したくはなかった。

同意してはいけなかった。

「記憶の勘違いかもしれないだろ？ 人間の記憶なんてあてにならないぜ。大事なのは志 誇りを持つ事だ。どんなに暗い中でも照らしてくれる、信用できる何かを、支えを見つけることだと俺は思う」

龍多の朗らかな、気さくな笑いに紅音は疑問を持った。

「教えてよ、何で龍多くんはそんなにはっきりしてるの？ 悩んだり、迷ったりしないの？」

子供のような、純粹な疑問をぶつけてくる。

龍多は真っ直ぐにその瞳を見つめた後、ふうと張り詰めていた空気を吹き飛ばすかのごとく息を吐き出した。

そして、紅音の頭をぼんぼんと叩きながら、

「悩んだり、迷ったりしたらとりあえず行動するんだよ。行動している間はそんなこと考えられるような状況じゃなくなるからね。だから、行動しようぜ」

「……私は支えを見つけたよ、信用できる人も見つけた。でも、それでも強くなる事なんてできないよ。ずっと迷って、同じことを繰り返すだけ。改善しようとしても打開策は見つからず、結局元通り。ううん、最初よりもずっと悪くなってる」

紅音は龍多の服を掴んで、涙を堪えるように強く握り締める。

堪えようとしてもでてくる涙は抑えられないのか、先程のポタポタとは違い滝のような涙を流して泣いていた。

龍多はしわがよるのなんか、服が汚れるのなんか気にせず紅音が落ち着くまですつと頭を撫でていよう。

「変わろうとしなきゃ、変われねえよ。お前は変わろうと努力したんだ。一人じゃ、無理だった。俺みたいにな止まったままの人間に何ができるかしらねえーけど、それでも手助けはしてやるから」

龍多の咳きは紅音の耳にしっかり届き、心を落ち着かせられる場所を見つけた紅音は安心したように目を細めて、龍多の胸に頭をあずけた。龍多は頭を撫でながら、紅音が泣き止むまですつと見守っていた。

## 十六話 事情

泣き止んでから、紅音を見送り龍多は寮の自室で頭を悩ませていた。

さっきはああ言ってたが、紅音と蒼を会わせるのは無謀じゃないのかと思い始めていた。

たぶん、二人が会った瞬間バトルが勃発する、そして……。

(寮が爆発するっ！)

龍多はやべえと口元に手を送る。

それでも、二人を仲直りさせるにはいつかはお互いが歩む寄りねばならない。

その前に蒼に会って真相が聞きたい。

蒼の口から紅音の事を聞くことが出来れば、少しは何かできるかもしれない。

かといっても電話番号は知らないし、寮の部屋も知らない。

会える可能性といたら食堂だが、来るまで待っているのはあまりにも時間の無駄に感じてしまう。

今やることは、二人を苦しめているこのままについて調べるのが最良の策だろうと考え、龍多は美香に電話をかける。

一回鳴っただけで即座に出た。

(こんな早く出るなんて俺、嫌われてんの?)

一刻も早く愚痴を聞かせたいのかと龍多が辟易しながらも、挨拶。

「おう、俺だ、龍多だ」

『んなの分かってるぞ』

なにやら苛立ちが感じられる声だ。

いろいろムカツクことがあるのかもしれない、隊長ともなると。龍多はなるべく早く用件を済ませようと一氣にまくし立てる。

「調べてほしいことがあるんだけどさ。一いちつていう家について。どうにも変な風習があるみたいでさ。何か分かったら連絡くれ。んじやーね」

『待てゴラッ』

美香の声を聞くだけで頭を捻りつぶされたような気がした。

声の圧力により電話を切るタイミングを逸してしまった龍多はその後、美香の愚痴を聞かされ続けたのだった。

解放されたのは一時間後。

どうにも最近結婚話がまくってそれにイラついているらしい。どれも名家の相手で結婚相手には最高の　玉の輿になれるような相手だ。

美香は見た目だけは可愛いし、魔法の腕も確かだ。

これほど人気のある奴もない。

それに「よかったじゃん」とぶっきらぼうに返事をする、より不機嫌になるというサイクルですつと電話をしていたのだ。

（何が不満なのかねえ……？）

美香は俺と同じ年齢で結婚するには早いというのは分かっている。それでも、なぜここまで頑なに拒むのか理由までは分からなかった。

（結婚かぁ……）

考えるには早い気もするが、龍多は結婚なんて、もっと言うと誰

かを好きになることさえ一生ありえないと思った。

生まれた子供が不幸になるところを見たからかもしれない。

子を置いて先に死ぬのが嫌だからかもしれない。

明白な理由こそ挙げる事はできないが、子供時代をそんな環境で育ってきたからか龍多は誰かを好きになることはなかった。

落ちぶれた龍多の家は親戚からも迫害され、妹とたった二人で生きてきた。

唯一の救いは悪魔の影響で両親が亡くなったことから、『呪われている』と親戚一同から言われ、家の物はすべて残った事だ。

両親が残した莫大な財産もまったく手を付けられることなく残っている。

それほどまでに悪魔の存在は恐れられている。

人が欲して止まない金さえも手を付けさせないほどに。

食事を終えた龍多は特にやることもなく、部屋でぐーたら過ごしていた。

いつもは紅音や涼が遊びに来るのだが、紅音は下校時にあんな事があつたし涼も今日は宿題が多くこちらに来れないらしい。

こういう一人でいる時間というのは大切にしなければいけないのかもしれないが、同時にいろいろと考えてしまう。

これから先のこと。身近なこと。

自分の生きてきた人生はお世辞にも真つ当だったとは言えないから余計に悩んでしまうのかもしれない。

「悪魔か……」

独白を打ちながら龍多は部屋に置いてある一本の刀を取り出す。

鞘もなければ刃も通っていないし、鏢もない刀。

銀色に光り輝く姿だけを見れば物凄い斬れそうだ。

「よつこいしょ」つとやたらと疲れたように背中に仕舞う。  
におうんだ。

今回の紅音と蒼の事件というには少し大げさだが事件としておく。

二人の事件には悪魔が関わっている……気がする。これは勘なので「なんで？」と理由を問われてしまえば説明のしようがないのだが確証に近い物を龍多は感じていた。

記憶の改ざん、なんてことは悪魔が関わっていれば簡単にできてしまう。

(だから、一と話さえできればほとんど確定するんだけどなあ……)  
蒼が紅音の言った事を否定すればつまり、紅音の記憶を悪魔の力で改ざんしたということになるからだ。

龍多は蒼を信用しているからこそこんな考えをもてるが、紅音に話したところで信じてはくれないだろう。

下手したら龍多までも敵に見られるかもしれない。

そうなってしまうはずだが終わる。

蒼も助ける事はできず、紅音も助ける事はできない。

だから、下手な行動はせずに紅音を説得しないといけない。

理由。

なぜ一の家が紅音の記憶を弄くったのか理由が分からない。

一に近づけないため、ということではどうにも納得が得られない。

これも蒼と話さえできれば解決しそうなのだ。

つまり、キーマンは蒼だ。

蒼からどれだけの情報を引き出せるかが今回の件に関しての解決につながると思うのだが。

「考えすぎて頭いてえよっ！」

段々とこんがらがって来て龍多は壁に向かって叫ぶ。

特に意味はないが。

一の部屋でも探してみるか、と龍多は腰をあげる。

そのタイミングを狙ったかのように部屋にノック音が響く。

(ノック音つてカタカナ表記にすると、ノックオン。なんかロックオンに似てんなあー)

龍多は大発見に意気揚々とドアを開けると、そこには。

「おはよー龍多くん。元気してた？」

朗らか笑顔の紅音がいた。

思わぬ来訪者　　と言つても訪れるのは紅音ぐらいしかいないのは予想できたが、それでも帰りの今で、これなのだから驚かないほうが無理だろう。

「ええとなあ、今はおはよーじゃなくてさようならだ」

「違うよー。今はこんばんは、でしょ？」

「おう。そうだったな。お前頭いいなあ」

「えへへ、褒め称えていいよっ」

「……って、そもそも間違えたのお前だろうが」

そこでようやく龍多は気づいた。

「つきやあつ」と紅音は楽しさから来る悲鳴をあげて部屋に乗り込んでくる。

ちようどどかようとしていたのだが、家にながられてしまったら仕方ない。

龍多は部屋に舞い戻り、腰を下ろした。

「やっぱこの部屋いいなあ……落ち着くなあ」

ふみゆとマタタビに酔った猫みたいにごろんと寝転がり始めた紅音を見て、龍多は呆然としていた。

（なんだこの、いつもと変わらない様子は！ いや、いつもらしいのはいいけど、悩んでいた俺が馬鹿みたいだっ！）

「何しに来たの？」

「特に理由はないよ。ただ、逢いに来ただけ」

紅音は嬉しそうにはにかむ。

はにかんだ顔には特に違和感はない。下校のときの事は気になっ  
ていないようだ。

龍多は頬を掻きながら、

「ちょっと聞きたい事あんだけど」

紅音の家のことについて知りたかったから龍多は訊いた。

一ではなく佐々波のほうの事を。

「……それってあいつのこと？」

あいつ＝蒼だってことは龍多には分かっていたので「違う」と首を振る。

すると僅かに安心したように息を漏らす。

「でも間接的には関わってる」

一応伝えておく。

途端に顔をしかめる。

「……あいつのことじゃなければいいよ」

そんなに嫌いなのかと喉元まで出掛かっていたがなんとか押し込める。

同じ状況におかれなければ分からない事なんてのはたくさんある。龍多も何も知らない奴に自分の境遇を色々言われるのはむかつくし。

だから、ほとんど知らないのに何かを言うのはぶしつけ過ぎる。

「お前は元々一だったんだよな、名字」

これを確認しておかねばこの後の話が続かないので確認をとる。

「うん」

「じゃあ、今の佐々波ってのはなんだ？ 分家かなんかか？」

「……似たような物だよ」

大体予想通りの答え。

龍多は少し訊きづらいことを訊くために一呼吸する。

「答えにくかったら無視してくれてかまわないし、殴ってくれてもいいけど……両親は？」

今の一の家を仕切っているのは両親なのか？ それとも違うのか。最悪……死んでいるのか。

龍多はいろいろな感情を押し止めながら紅音の口が開くのをじっと待つ。

紅音はそれに特に物怖じせずに答える。

「母親はあいつを産むとき　　じゃなくて私たちを産むときに死んだって。父親はいるよ」

「どこに?」

「佐々波高<sup>たかね</sup>。私と、私の父親は一の家から追い出されたんだよ。私はおちこぼれだから、佐々波さんは家の言いなりにならないから」

佐々波さん、という他人行儀な呼び方にいぶかりを感じたが今はそこを言及するのは抑える。

つまり、紅音が家に帰れば一緒に暮らせるといっわけだ。

龍多は多少の驚きがありながらも、どこか冷静な気持ちでそれを受け止めた。

すぐに次の疑問が浮かび上がってくる。

「じゃあ、今の一家の仕切ってるのは誰なんだよ……」

両親じゃなければ誰なのか。じいちゃん? それとも親戚?

考えられる可能性を頭に浮かべている龍多に対して紅音はその龍多の考えている物を壊すかのように首を振る。

「私、というかあいつは十一代目なんだ」

「ん? そうなんだ」

答えになっていないので龍多は首を傾げたが一応返事をする。紅音は床に片手をつけて、顔を逸らし遠くを見るようにして、

「家を仕切ってるのは三代目の一の男<sup>ヒトツネ</sup>」

予想だにしていけない答えに龍多は目を見開く。  
単純計算しても三百歳を超えている。

そんな長寿な人間が生きているわけがない。

蒼に聞くまでもなく龍多の頭にあつた予想は確証に変わった。

悪魔と契約して不老不死の力でも手に入れたのか。

どちらにしてもくだらないなと龍多は齒噛みする。

(長生きしてまでやるのが他人の幸せを奪う事かよ……)  
無意識の内に先程しまった刀に手を伸ばす。

「そいつは普通の人間じゃないだろ？」

「えっ？ うん、なんかずっと左手に包帯巻いてるよ」

龍多の質問に答えた瞬間、紅音は悪い事を思い出したのか体をあきらかな恐怖で震わせる。

どう考えてもおかしい。

「ど、どうしたんだよ！ おいつ！ 紅音しつかりしろ！」

「ずっと忘れたかった怖いこと。いつもその左手で私を殴るんだ…

…それで殴られると、身体中を恐怖で縛られたように動けなくなつて、……ごめんなさい」

「おいつ！ くそっ、どうなってんだよ……！」

紅音は自分の体を抱きしめて謝り始めた。

「私はちゃんといつことききますから、だから、もういじめないで

……」

(昔の事か?)

紅音は昔の恐怖を思い出してしまったのか、昔の自分に戻ってしまっただかのようにただ、憎んでいる敵に向かって聞こえない謝りを続けていた。

身体に教え込まされたかのように全く無駄のない謝り。

身体に教え込まされたことを繰り返している、見れば分かる事だ。落ち着かせないといけないと思い、龍多は帰りにしたように頭を撫でる。

今日の下校のときにはこれで紅音は落ち着きを取り戻していた。だから、こうすればちょっとはましになると思い、実行した。

「龍、多……くん？」

紅音はどこか遠くに行っていたかのように、驚いた声を出していた。

もしかしたら本当に過去の自分の代わりに謝っていたのかもしれない。

「やっと、落ち着いたか。いきなり謝りだしてびびったんだぜ」

まだ、完全には落ち着いていないのは震えている体を見れば分かる。

伝わってくる体温は人とは思えないほどに冷え切っている。

どれだけ怖いのかを物語っているようだった。

こんなところまで紅音を追い込んだ奴らに憎しみを覚えた。

「私、昔ずっと殴ったり、蹴られたりして育てられてたから……昔のことを思い出すのトラウマなんだよね」

自虐的に紅音は笑う。

その傷ついた笑顔を見て、龍多はさらに怒りを募らせていた。

「悪かったな。そんなこと知らずに一方的に話しちまってよ」

「ううん。私は龍多くんに自分のことをもつと知ってほしかったから、別にいいよ」

どんな意味が込められているかなんて龍多は考えていない。単純に助けてほしいのだと思い龍多は頷く。

「ああ、そうだった!」

紅音は突如さつきまでの恐怖を払拭するかのごとく声をあげる。

「明後日、龍多くん暇? 暇だったら私の家に来てほしいんだけど

……」

「暇だけど、何で?」

家にいけるのなら父親の人に話を聞かせてもらおうと龍多は考えた。

「荷物もち。私の部屋からこっちの寮に物を移動したいんだよね。服とか」

「ふーん、なるほど。父親はいるのか?」

「……いないよ。会いたくないからいない日を狙っていくんだもん」

……どつやら父との間にもわだかまりがあるようだ。  
龍多は前途多難すぎると脱力した。

## 十七話 前向きに

紅音が約束した明後日 日曜日。

約束どおり二人は紅音の家に向かった。

自転車で四十分程度の道のりだ。

予想通り四十分ほどかかったが、体感ではそれよりも短く感じられた。

紅音と話しながらのおかげかもしれない。

それにしても久しぶりの風を切るあの感じは良いものだったなと龍多は感動していた。

目の前の家は特にこれとって目立つところはない。

周りの家の所々をとって作ったような、周りに溶け込むような建物だ。

目立たないような一生懸命さが伝わってくる。

車を停めるスペースがあることから、それは父親のものだと思われる。

「なんか家って檻みたいだね。牢獄とか」

紅音は龍多の表情を見て、答えた。

龍多は顔に出てたかと紅音から顔を逸らす。

「別に。家なんてその人の感性で檻にも見えるし、天国にも見えんじゃないの?」

「それだと、私が檻だって思ってるだね。とりあえず、中入って」

鍵を取り出し、ドアを開ける。

龍多は靴を脱ぎ、「おっじゃましまーす」と言っただけの中を上が

って行く。

人の家に入るときはなんだか、テンションがあがる。

龍多は心うきうきで、家の中を駆けずり回る。

紅音はそれを苦笑いで、しかし楽しそうに見つめていた。

龍多は階段を発見する。

「俺は一体どこにいればいいんだ」

「私の部屋だよ、ついてきて」

紅音は龍多の手を掴み、二階に上っていく。

二階には二つだけ部屋があり、その内の一つが紅音の部屋だと思える。

案の定紅音はドアを開けて中に引き入れた。

部屋は……暗い。

明かりがどうかではなく、流れる空気が重い。

部屋も滅多に帰らないのかほとんどにも置かれていない。

引越しの最中と言う事がそれに拍車をかけているようにも感じられた。

「私、生まれて初めて友達を家に呼んですっごい緊張中だよ」

「そーなんだ。俺ももしかしたら初めてかも。友達とは違うけど似たような人の家には行った事あるけど」

「龍多くんは私の部屋に来て何か思うこと……ある？」

恥ずかしそうにもじもじとしている紅音に今さっき思ったことをそのまま伝えるのは何か間違っている気がした。

龍多はなんと言おうか迷う。

「んー。何か変な感じだな」

「そ、そう？ 恥ずかしかったり、緊張したり……する？」

なぜか顔を真っ赤にしている。

龍多は甚だ疑問に思ったが、触れずに話を進める。

「元々、緊張とかはしないけど、なんか女の子の匂いが僅かにするよな。そういうの意識すつと恥ずかしいかも」

妹ので慣れているとは言え他の女子だとまた違った物がある。龍多は自分で口走った言葉で今の現状を理解して。

（なんか恥ずかしくなってきたー！）  
顔を押しさえたくなっていた。

「ほんとっ？ なんか、嬉しいな」

幸せそうに紅音が笑みを顔に浮かべていた。

（俺が恥ずかしがる姿が楽しい？ 俺を苛めたいの？）

龍多はちょびつと紅音に鬼を見たときのような感情を受けた。

「私でも、龍多くんは女の子と見てくれるんだ……ふふふ」

至福と言った感じでぼろぼろ呟いた言葉は小さかったので、龍多には届いてはいないようだ。

龍多がそれをいぶかしんでみている事に気づいた紅音ははっと我に返り、

「龍多くんはそこら辺でじっとしてて。私が荷物まとめるから」

龍多に命令して作業に取り掛かった。  
龍多はじっとしてと云われ、何もやることがなかったのと  
あえずと紅音の机の引き出しの中を見ることにした。  
女の子の引き出しを勝手に開くなどという行動に龍多は何の引  
きも感じていないようだ。

龍多は紅音の様子を窺いながら、こっそりと、だが速やかに引  
出しを開けていく。

紅音は夢見心地といった体でまったく龍多のほうには注意を払  
っていない。

龍多はそれが分かっても念のため警戒しながら、作業をした  
のだ。

半分ほど開いたときに、龍多はこっそり中を覗く。

……なにやら、男の写真。

しかもどこかで見たとあるような。

いつも鏡で見るような……。

(って俺……!?)

まさか、まさかのイリユージョン。

自分が紙の中に入ってしまったなんて。

と龍多が見当違いに驚いていたが、途中で復活する。

(……もしかして、俺嫌われてる?)

心に生まれたのはそれだった。

写真を藁人形にでも使うのかもしれない。

龍多はそう考えただけで億劫だ。

紅音のために思って今まで行っていた事は実はすべて紅音が嫌  
がることだったんじゃないか。

一度考え始めてしまった龍多はそのマイナス思考を止めることな  
くどんどん展開させていく。

そして最終地点にたどり着いた龍多は。

(見なかったことにしよう)

そうして、これからはもっと紅音に優しくして、少しでも嫌悪を減らす事に専念しようと思決した。

そっと引き出しを押し戻す。

これですべては龍多の心の中で凍結された。

「紅音、そろそろ終わりそうか？」

いかにもやることなくて暇ですと態度で示す。

そうやって紅音にアプローチを仕掛け少しでも自分への気持ちを払拭させようという試みだ。

「うん、終わりそうだよ」

がーん。

龍多は顎が床にくっつきそうな勢いで落ち込んだ。

「早いよ！ もっと時間かけてくれよ！」

「ええっ！？ なにに？」

「整理にだよっ！」

「意味わかんないよっ」

「俺もだぜっ！」

「龍多くん、下で休んでいいよ」

「……やっぱり、か。どうせ俺なんて一緒の空間にいたら邪魔なんだ。無駄に身長あるし、最近体重増えてたし。俺がここにいるだけ

で室内温度も二度くらいあがりそうだしね。分かったよ。俺はひたすら階下から『ぬおおおっ』と叫んでるよ……」

「龍多くん、迷惑だから」

「はぐっ!?!」

はっきりな言葉に龍多は頭を金槌で殴られたような衝撃を感じた。重い、一撃。

心にしりとくる一撃は龍多を悲観させるには十分だった。

「俺は、邪魔なんだああー！ーああっ!!!」

「……龍多くんて時々訳が分からなくなるんだよね」

紅音は、龍多の遠ざかる悲鳴を聞きながら紅音は一刻も早く終わらせようと決心した。

## 十八話 紅音の家

龍多はずっとリビングでテレビを見ていた。

テレビの番組に面白そうなものはなかったが、何もせずじっとしているよりはるかにましなので、こうしている。

確かにやりたいことはあった。

家の中の探索や、この町内の探索。

ただ、どちらを試すにしても紅音には却下されると思った。

紅音が普段説教される側だからか、紅音に説教されるときは妙に納得がいかないのだ。

しばらくすると、階段を降りる音がしたので龍多は紅音が終わったのだらうと思いい体を起こす。

「終わったよ」

やや疲れたような顔を見せた紅音の右手に龍多の視線は送られた。荷物が詰まったような鞆を抱えている。

中々に重そうだが、これだけなら別に一人でも問題ないのではないか。

もしかしたら、ここに呼ばれたのには別に理由　たぶん一人で行くのにためらいがあったのだろう。

一人で来たくない、とかなら今までの紅音の言動から十分想像できると龍多は思う。

「んじゃ、帰る？」

用も済んだことだし、紅音もあまりいたくないのだと考えていたから。

だが、龍多が立ち上がろうとしたのを紅音は片手で制した。

「夕飯作ってあげようじゃないか」

紅音は制した手を腰に持っていき胸を張る。

偉そうな態度だが、顔は少し強張っているようにも見えなくもない。

やはりためらいがあるようだ。

「さつさと帰りたいんじゃないか？」

「それもあるけど、ちょっと私の料理の腕を見てほしいと言いますか……私の料理食べてほしいんだよね」

料理を見てほしい、といわれても龍多は別にそんなにいい舌を持つてゐるわけではない。

紅音は単に龍多に自分の手料理を食べさせたいだけだ。

「……別にいいけどさ。なに作ってくれんだ？」

「目玉焼き！」

「朝食？」

「夕食」

龍多はがくりとうな垂れる。

うな垂れたのは自分の意見を訂正されたからではない。

昼は寝起きだったので消化しやすいものしか食べておらず、夕飯は絶対に肉を食べようと密かに息巻いていたのだ。

気分的には肉が食べたいのだ、肉が。

「後は適当に冷凍食品をばぱっと作って終わり」

付け足した言葉に龍多は怪訝そうに反応する。

冷凍食品は便利だ。

龍多もそれは分かっているが。

「それって……料理？」

「い、いいんじゃない！ 目玉焼き作るんだよ？」

「あれも、簡単じゃん。卵落としてひよひよっとで終わりだろ」

龍多もそれなりに家事を担当していた時期もあったので、料理は少なからずできる。

目玉焼きは一番最初に覚えた簡単料理の一つとして龍多にはインプットされていた。

「……愛情がこもってるからいんじゃない？」

「冷凍食品に？」

「……よし、夕飯作るからちよっと待ってね」

「ええっ!?!」

龍多はこれ以上なにかを言っても話は平行線を辿るだろうと理解し、結局テレビを見る羽目に。

相変わらず面白いテレビもないので、龍多はテレビの電源を落としソファに横になる。

紅音がキッチンに向かったのを確認してから、目を閉じ、ゆっくりと眠りに落ちた。

どのくらい寝ただろうか。

龍多は目元を腕で擦り、あくびをする。体の倦怠感がなくなり、頭は靄がとれたようにすっきりとしていた。

意外と睡眠不足だったようだ。

顔を窓の外に向けると、外の風景は昼の日差しから夕焼けに変わっていた。

紅音の家に来た時間は二時くらいだ。

時計を見ると、五時半を回ったところ。

何時に寝たかは分からないが、それから結構早くに睡眠についてので二時間近くは夢の世界にいただろう。

と、つまり、紅音は夕飯を作る時間が大分早かったのだと気づかされた。

その紅音がいるであろう、キッチンの方に顔を向けるがその姿を見つけることは出来ない。

もぬけのから。

エプロンは置いてあるが、どこにもいない。

触ってみる。まだ、暖か　くはなかった。

映画とかで見た「まだ暖かい！ 近くにいますぞっ！」というのをやりたかったができずに龍多は落ち込む。

家の中は不気味なほどに静かだった。

龍多の中に嫌な考えが飛び交う。

強盗、誘拐、殺人。

龍多は火をつけられたかのように走り出し、玄関を確認。

靴があるかどうかを調べたが、紅音が履いてきたとおぼしき靴は見当たらない。

代わりに置き手紙があった。

『気持ちよく寝てそうなので起こさないでおいたよ。私は冷凍食品の買出しに行つて来まーーす』

龍多は、そのメモを見てぶはあとため息をつく。

無駄に焦ったことを恥ながら、ふと自分の置かれている状況を考える

自分の家でない、他所様の家に一人ポツンという。

下手したら泥棒のように見られるかもしれない。

龍多の心には不安が溜まる。

龍多は紅音の後を追いたい、どこに買いに行つたかも知らなければ、何時ごろにでたのかも知らない。

すぐに帰ってくるかもしれないし、帰らないかもしれない。

電話をする、という方法もあるが、それだとなんだか寂しくて電話を試みたいでそれはできれば避けたかった。

今起こせることが何もないことに気づいた。

こうなれば仕方ない。

龍多がソファに体を預けてさっきまでの気持ちを忘れるかの如く昂然と構える。

何が来ても驚くことはない、龍多は顔には自信が占領していた。車のエンジン音の様なものが耳に届き、龍多に嫌な汗が流れまくる。

前言撤回を猛烈に願った。

車を使える 大人。

紅音の家には車を停めるスペースが合った。

……親が帰ってきた？

龍多はどうしようどうしようと慌て始める。

(隠れる？ でもそれで見つかったらマジで泥棒だぞ。だったら、  
ばれないように窓からこっそり逃げる？ いやいや、周りの民家の  
人に見られたらそれはそれで通報されちまう)

打つ手なしに龍多は肩を落とす。

龍多はごくりと息を飲み、斜に構える。

鍵を開く音 近づく足音。

「ただいまー」

棒読み 元気を感じられない声での挨拶が耳に届く。

相手は家に誰かがいることが分かっているようだ。

(自転車があつたな)

龍多はそこで自転車の存在を思い出していた。

自転車は玄関を開ける人間にとって目につく位置に置いておいた  
ので、誰かがいることは先方も分かっていると龍多は気づく。

龍多はゆっくりと立ち上がり、玄関に向かう。

リビングに向かって来ていた、紅音の父親らしき人物と鉢合わせ  
になる。

生気の抜けたような元気のない顔をした父親は龍多と目を合わせ  
驚いていた。

あてが外れたかのような驚きが顔を支配していた。

「君は……誰だい？」

元気のない顔は僅かに引き締められている。

警戒 に近いかもしれない。

龍多はこれ以上警戒されてはたまらないと笑顔を絶やさないう  
うにニコニコと挨拶する。

「俺は紅音の友達の琥ノ村龍多って言います。紅音なら今買物に行っていますよ」

龍多にしては完璧な受け答えだった。

内心一番驚いているのは龍多だがそれよりも思ったよりやればできる子だ分かり、

(俺って中々社交的ー！)

テンションあげあげだった。

「やはり、紅音もいるのか……」

途端元気のない顔をさらに強化した父親に、龍多はいらっとしたのでありのままをぶちまけた。

「それだと、あんたが紅音に会いたくない、て言ってるみたいだな」

「……そうは言ってない。むしろ逆だ。私はあの子に会いたいが、会った所であの子を傷つけるだけだ。自己紹介が遅れたね。私は佐々波高といい、紅音と蒼の父親だ」

「紅音から聞いたから知ってるよ。んで、俺はあんたに用が会ったから今日ここに来たんだよ」

会えるとは思ってなかったけどなんと龍多は口端をあげる。

「……あの子が友達を連れてくるなんて、初めてかな。それに事情もそこそこ知っているみたいだね」

「全部の事情は知らないけど、あんたに聞けば分かると思ってたん

だよな。さて、ちょっと聞きたいことがあるけど、いいか？」

いきなりでぶしつけだとは思うが、龍多もいつ紅音が帰ってくるか分からないので焦っている。

高も、驚いてはいたが、すぐに顔をしかめる。

「……君は紅音のなんなんだい？」

「友達だよ。だから、困ってるならどうにかしたいんだ」

「……分かったよ。それじゃ、お茶でも用意するから待っててよ」

「分かりました」

ここに来て自分が敬語を全く使っていなかったことに気づいた。それを嫌がる素振りを見せないこの人は心が広いようだ。とにかく、少しでもきた時間で聞くことを考えていた。

## 十九話

淹れてくれた茶を一口啜る。

「一の家は子供に虐待をするのか？」

特に比喻せず、単刀直入に聞く。

下手に回りくどいのはあまり好きではない龍多らしい物言いだ。

「そうだね。私は婿入りしたから良く知らなかった。一緒に暮らすようになってからもおかしいところはなかったよ。だが、子が出てから分かったことだよ。兄弟で優秀な方を跡継ぎにするために、常に比べあい、出来の悪いほうには暴行を与えるんだ。そうすることで、出来が悪ければ罰があると教えるんだ」

「……あなたの妻は何も言わなかったんですか？　そういう因習があるってことを」

「……彼女はそれが普通だと思っていたんだ」

「変じやないですか？　一は……蒼はそれを変だと思ってるんですよ？　つまり、あなたの奥さんも同じような事をされて思ったんじゃないですか？」

龍多は思ったことを言ったまでだ。

普通に考えて、こつなるんじゃないか。

きつと高の妻も似たような教育をされている。

それなのに、不思議に思っていないんだ。

だが、同じ教育をされて、蒼は変だと感じている。  
おかしいのだ。  
龍多の考察は高を頷かせた。

「そうなんだ。だから、私は調べたんだ。そして、重大な事に気づいた」

「重大な事？」

龍多が反復して尋ねる。

「一の家を支配している人間がはるか昔の人間だと言う事は知っているかね？」

「ああ、聞きました」

三代目、ということと龍多の頭の中にはよぼよぼのじいさんが想像された。

「そいつは自分の体に悪魔の一部を宿らせ、力を手に入れている。その影響で不老不死という力を手に入れた」

あまりにも予想通り過ぎて龍多は告げる言葉が見つからない。

だが、同時に目標とすべき敵が明白に現れたことから心には安心に似た気持ちが増え溢れてきた。

敵は、見えないほど恐ろしい。

物理的な意味でもそうだが、精神的につらい。

自分を信じられなければ本来の力はだせない。

だから、こうして敵が明白に分かったことはいいことなのだ。

「そして、その影響からか、魔法の力は人間のレベルを逸脱している。何の属性の魔法かは分からないが、人の記憶を操作する力を持っているらしい」

「それは、どんな状況でも使えるんですか？」

「もしも、戦闘中にひょいひょい使えるような代物なら、龍多は勝ち目がない。」

「戦い方、戦っている理由などの記憶を消されたら戦う以前なのだから。」

「だが、龍多の心配を振り払うように首を振る。」

「元々、操作するのに時間のかかる魔法だ。それに精神状態が不安定又はそれを受け入れる意思を持っている相手にしか効果はないらしい」

「……もしかして、紅音が一を嫌った原因も記憶の操作をされたからか？」

「自分に問いかけ顎に手を当てて、考える。」

「真実はもしかしたら蒼でさえも知らないのかもしれないが、これは正しいと思う。」

「蒼が酷いことをする奴ではないという前提条件がなければ断言する事など不可能に近いが。」

「……それは私も分からない。私は紅音よりも早くに家を追い出されたので二人がどうなったかは知らない」

「明快な答えを得ることはできなかったがまた、一步前進することができた」と龍多は心中で笑う。

後は蒼にコンタクトを取り、真相を明らかにする。

それで、紅音の言ったことが間違っていれば紅音を説得　そし  
たらすべてが解決するはずだ。

後で一の家は殲滅しに行ってくるが。

もう聞くことはないはずだ、と龍多は思っ黙っている。

「君は、琥ノ村家の人間だったよね」

「そうだけど……」

あまり嬉しくない話題に変わって龍多は気づかれない程度に眉間に  
しわを寄せる。

家の話が嫌いな理由は自分が似たような境遇だったのが一番にあ  
るかもしれない。

「歪まずに育ち、君はすごいよ。私なんて、大切な家族すら守れて  
いないのに……」

歪まずに、か。

龍多はそれは完全な間違いだと眉をしかめる。

龍多は、歪みまくって育った結果今の龍多ができあがっているの  
だから。

だからと言って、何も理由をしないのだ。

怒るなんて事はしない。

ただ、自ら話したいことはないと言うオーラを発する。

こちらは勝手にあれこれ聞いた失礼な礼儀知らずだと分かっ  
ているが、ここは善処してもらいたい。

相手は大人だ。

龍多の意思を汲み取りそれ以上の追求をされることはなかった。  
初めに比べ僅かに重くなった空気。

それを破るように、玄関で音がする。

「ただいま……」

あきらかにしぼんだ声が届く。

龍多はちらと高に視線を送るが、高は目だけで玄関に行つてこいと伝える。

龍多は全く家の住民ではないにもかかわらず、客　紅音を迎えにあがる。

「どうしたんだよ、紅音。お前の父ちゃんが来てんぞ?」

「早く中上がつて挨拶でもしなよ」と告げると、紅音は無言でふりふりと首を動かす。

紅音はいつもと違い、近寄りがたい空気を纏っている。

「……学校に戻る。中に父さんいるんでしょ?」

提案したのは悲しい言葉だった。

会いたくない。

前に紅音が似たような事を言っていたのを思い出す。

だから、

「逃げんなよ。お前の父ちゃん悪い奴じゃないぞ?　話せばすぐに分かるって」

龍多は先程の会話の内容を簡単に説明して高が紅音のことをどれだけ思っているのか教えようとすると、それよりも先に紅音が肩を震わせてから。

「……分かってるよ！ お父さんは優しい人で、私を氣遣ってるのも！ だから、嫌なんだ！ それは、お父さんの笑顔は、私が受け取っちゃいけないんだ」

「意味が 意味がわかんねえよ！ 何で分かってるのに意地はつてんだよ！ もっと素直になれよっ！」

「だから、私は……」

そこで言い辛そうに口をもごもごさせる。

龍多ははつきりとしめない態度にいらいらして、

「だから、なんなんだよっ！ お前、自分の事を大切に思ってる人の好意を無下にするなんて」

最低だっ！ と言いかけたのよりもさきに紅音がなる。

「父さんの本当の子じゃないから！ お父さんが、優しくしてくれと……それが辛いんだよっ！ お父さんが笑顔を向けるのは、お父さんが優しくするのは 私じゃなくて、あいつなんだっ！！！」

そついうと踵を返し、家を飛び出ていく。

龍多は紅音が開け放った玄関から入り込んでくる、空気を感じて、頭が冷えていく。

熱くなりすぎた。

もうすぐで、紅音に酷いことを言いそうになっていた自分を戒めるように顔を叩く。

そのおかげで冷静になった頭にはなんとも言いがたい、もやもやとしたものが残っていた。

分かりかけた、はずなのに。

まだ何か分からない 知らない事があつた。  
そのせいで、いまいち紅音の気持ちを理解する事が出来ていなか  
った。

もしかしたら、まだ、何かあるのかもしれない。  
悩んでいると、リビングの方から視線を感じ、顔をあげる。

「本当の子じゃないって……どういふことですか？」

一瞬目を開いてから「当たり前か……」と高は呟く。

「それを……知らないということはあの子が教えたくないと言つこ  
とだから、それには答えられない」

力づくでも聞きただしたい衝動を拳を強く握り締める事により  
堪える。

確かに、今までのことだって蒼から聞きだしたが、本当は二人の  
合意のもとで

「紅音から、聞いてくれ。私にはそれしか言えない」

「分かりました。ああ、紅音ってどこにいるか分かりますか？」

親として、こう行ったときにどこに避難するのか。

知っているとは限らないが、何もしないよりはマシだと思い尋  
ねた。

「蒼は悩んだりしたときに近くの公園によく逃げていたからね。双  
子だし、紅音もこの近所の公園のどこかにいるんじゃないかな？」

「探してきます」

龍多は飛び出すときに紅音の向かった方向を頼りに搜索を始める。  
ただ、なぜ紅音の事でなく蒼の行動パターンで考えたのか、疑問  
に思いながら。

二十話 前向きに(前書き)

更新遅れました

## 二十話 前向きに

龍多は近くの公園を探していた。

だが、こちら辺の地理に詳しくないせいで、紅音の姿はおるか公園の場所さえも分からない。

それでも何とか、街の人に女の子が走ってなかったかと確認して回り、ようやく目的の公園を見つけた。

小さな公園。ブランコと鉄棒しかない。

現時刻は子供が家に帰る時間なのかこの公園には人がいない。

だからこそ、紅音の姿をすぐに見つけることができた。

紅音はベンチの上で、顔を落として座っていた。

表情こそ窺えないが、伝わってくる感情は悲しさで溢れていた。

(なんでなんだ……)

龍多は、紅音がなぜそこまで落ち込んでいるのかが分からなかった。

別に高は紅音を嫌っているわけではない。

むしろ好いている。

大切に思ってくれている。

なのに、なんで

(分かり合えないんだ……)

龍多は苦しそうに顔をしかめると、まるでそれが伝わったかのように紅音が顔をあげる。

その目は一瞬驚きに揺れ、しかしすぐに自分の元気のなさがばれないように健気に笑う。

それでも、隠しきれることはなく「あはは」と眉尻を悲しそうに下げた、見ているだけでつらい笑顔になっていた。

「随分、探したよ」

龍多はかける言葉が見つからない。  
探すことに一生懸命で言葉を選んでいる時間なんてなかった。

「ごめんね、迷惑かけたよね……」

心底悪いと思っっているのか、頭を垂れる。

別に謝ってほしくていったのではない龍多は「謝んなくていいよ」とこちらも元気なく返した。

紅音の隣に空いているスペースに座り、龍多は落ち着きなさそうに手を組み合わせていた。

「帰ろうぜ……お前の家に」

龍多は、うまく回っていない頭でそれだけを言った。

紅音は苦いものを食べたように口元を引き攣らせる。

「……私が、さっき言った言葉、覚えてる？」

「ちつき？」

「家を出て行くときの……本当の子じゃないってこと」

「ああ」

龍多は探す事に力を入れていて、すっぽりと抜け落ちていた。

確かに、疑問には思っていた。

だが、それは紅音が今まで一緒にいて触れては来なかった話題。たぶん聞いても話してはくれない。

龍多はそう考えていたせいもあって、忘れていたのかもしれない。

「どうせ、聞いても教えちゃくれないんだろ？」

「……知りたい？」

「別に無理やり聞いたりやしねえーよ。というか、どうせ聞いても俺がイライラする話なんだろ」

「……たぶん、そう、かな」

「だったら、聞きたくねえな。けどな、俺はお前に言いたいことがあるんだ」

龍多は言ってやりたかった。

家族がいるんだから、大事にしろと。

家族 親がいない龍多だからこそ分かる事。

親の存在がどれほどまでに子に安心感を与える事ができるか。

親がいない龍多は常に周りから圧力をかけられるようなプレッシャーの中で生きてきた。

「親が、いるんだから、一緒にいたりしたほうがいいだろ」

「……でも、それを相手が望んでるとは限らないよ。もしかしたら誰かの代用品としてみてるかもしれないし」

代用品。

それは紅音を蒼に見立てていると言っているのだから。

龍多は、怒鳴りつけない気持ち忘れようとする。

「そんなわけ、ない」

「龍多くんに何が分かるの？ 一日、それも一回話しただけの相手の何が信じられるの？ 龍多くんみたいに簡単に人を信じてたら、いつか絶対後悔するよ」

「だからって人を信じなければ、前に進めない。人を信じなくて後悔するときがあるのも知ってる」

「……だから、あいつも信じるの？ 龍多くんは何で、あいつを、あいつを……。龍多くんも私のことをあいつの代用品としてみるの？」

紅音の　どす黒い、心の闇をそのまま捌けだしたような声に龍多は無意識のうちに立ち上がり一歩退く。

なんなんだ、この感じ。  
体ごと何かに押さえつけられたような恐ろしい感触に龍多は息を呑んでいた。

「ねえ……龍多くんは私を見てよ。あいつなんか、見ないで、私だけ」

目のハイライトが失われた　光を知らないような暗い瞳。  
風景と溶け込みそうなほどに陰が落ちた表情に龍多は慄然じつぜんと立ち尽くしていた。

「他の何も見ないで、私だけを見てよ。嫌だよ、龍多くん。一人は……」

でも、逃げてはいけない。

紅音は完全に闇の中にいる。

ずっと、一人で戦ってきた。

明確な敵であると思いついて入っている蒼と。

その過程で龍多と知り合い、仲良くなった。

龍多は蒼とも仲良くなっている。

紅音にはそれが、蒼に龍多を取られると感じた。

昔の記憶がさらにそれに拍車をかけてしまい、紅音は手に入れた龍多というかけがえのない友を失いたくなかった。

(悲しいな……)

奪い、奪われることしか知らない。

共有なんて知らない紅音は、今こうして龍多を奪われないように、必死になっていた。

「龍多くんになら、何でもあげる。私の金でも、私の体でも、なんでも……。だから、お願い、一緒にいて。私を置いてかないで、一人にしないでよお……」

紅音が龍多に抱きつく。

龍多は慣れたような手つきで頭に手をやり何度も撫でる。

(俺に、できることは。一緒にいることだけじゃない)

力がある。違う。

守りたいものを守るために力を手に入れたんだ。

受動的に手に入れたんじゃない、能動的に手に入れた。

「……分かった」

龍多の言葉を聞いた紅音は。  
ぱあつ。

顔を上げて、笑みを溢れんばかりにこぼしていた。

「俺は、お前に望むことは……真実を確認しろ」

続いた龍多の言葉に紅音は首を傾げていた。  
言葉の意味が分からないと紅音は心配そうに目を向ける。

「今から、家に帰って親父さんとちゃんと話せ」

「……でも」

言いよどむ紅音に龍多は、紅音の肩を掴んで僅かに距離を置かせ  
る。

名残惜しそうに口元をふみゃふみゃさせる紅音にどん、と龍多は  
自分の胸を叩く。

「……ごほっごほっ！」

思ったよりも強く叩いてむせてしまったが、すぐに立ち直る。

「お前が一人で無理なら俺も手伝ってやるぜ。なんたって、俺はみ  
んなのリーダーだからなっ！」

元氣一杯に、子供のような無邪気さで龍多は口端を限界まであげ  
る。

「……うん、分かったよ。龍多くんが言うなら、私頑張るよ」

きゅっとさりげなく服の裾を摘んで紅音は嬉しそうにはにかむ。  
龍多は、そんなの気にせず歩き帰路についた。

少し、本当に少しだけど前に進めたような気持ちを胸に残しながら  
い。



二十一話 事件（前書き）

後6話くらいで終わりだと思います

## 二十一話 事件

龍多は紅音と一緒に学校に戻ってきた。

あれから。

紅音は家に戻り高と話をした。

それで、多少は分かり合えた。

まだ、ぎくしゃくとしていたが紅音は学校で見せるような笑顔で振舞おうと努力していた。

(仲直りはできたかな……?)

龍多の目に映る限り、もうつつかえはなくなっているように思えた。

こつやつて少しずつでいいから紅音の悩みを解決していきたい。

龍多はそんなことを思いながら寮に戻ってきてきた。

一件落着、と龍多は寮の自室に入って床に寝そべっていた。

どつと疲れが襲ってきて、思ったよりもあの遠出が肉体的にも精神的にも疲労させていたのが分かる。

「今日は早く寝よ……」

明日は蒼と紅音についても解決するために動かなければならない。

紅音は高と仲直り……とは違うかもしれないが仲が戻った事により家族について前向きに考えるようになっていた。

龍多が記憶操作について話すと、紅音は蒼のことを心から敵視することもなくなっていた。

それでも、まだ完全には信用できていないのは仕方がない。

龍多は解決に向かう風に乗っている。

蒼に本当のことを話してもらうのはもしかしたら無理かもしれない。

紅音はそれを受け入れてくれるか、それが問題だった。

結局、二人を完全に自由にするには家の当主を潰すほかない。

その役目は龍多が一手に引き受けるつもりだった。

そのために美香に連絡して魔法戦闘部隊の名前を借りる事も約束した。

龍多は大浴場に向かいながら考えていた。

浴場に向かう途中、生徒が騒がしいことに気づいた。

休みの日で、みんな気持ちが高潮しているのだろうか。

嫌な胸騒ぎする。

龍多はより、騒がしいほうへ、騒がしいほうへと移動を開始する。

何回か繰り返すと、寮の一角　生徒への連絡事項が書かれた掲

示板の前に人だかりができている場所に到着する。

「なんだ、これ……！」

壁に付けられているホワイトボード。

そこには黒いマーカーで、でかかかと、書かれていた。

『佐々波紅音は人工生命体、ホムンクルスである。一蒼の遺伝子情報  
報を元に作られた、化け物である』

瞬間、龍多は頭が沸騰した。

湧き上がる、怒り、そしてどこか納得がいつてしまった。

本当のお父さんじゃない。

それはつまり、自分が文字通り佐々波高の子ではないということ  
だった。

何も知らなかった。

というか、これは一体誰が書いたんだ。

周りに集まっている生徒の馬鹿にしたような目、興味深々といっ  
た感じの目とにかく、これは早く消したほうがいい。

龍多は、多くの人がいる現場を掻き分けてホワイトボードの前まで進もうとした瞬間。

「……誰よ」

ぼそつと言ったはずなのに、声は辺り一帯に響き渡り、きゃっきゃ叫んでいた生徒の口を一瞬で塞がせた。

龍多も顔を振り向かせ、立っていた人物は　一蒼。

「誰が、これを書いたのよ……っ！」

近くにいた生徒に掴みかかる。

まわりが見えていない様子の蒼は怒りにとらわれている。

掴まれた生徒は「しらねえよ！」と必死に叫んでいるが全く聞く耳をもたれていない。

蒼は前後にゆすり、殺さんばかりに力を込める。

このままでは騒ぎをより激しくしてしまうと龍多は蒼を引き剥がしにかかる。

「……琥ノ村？」

虚ろな目、これは紅音と同じ……だ。

先程の文字を見たからか、余計に意識してしまっ。

「……あなたが、あれを書いたのっ！」

龍多達を声が射抜く。

いや、正確には蒼に向けて放たれた、怒りを押し込めた悲鳴にも近い叫び声。

龍多は最悪のタイミングだ、と声の正体　紅音を見据える。

紅音は周りの好奇の視線を意に介さず、ずかずかとこちらに向か  
つてきて、龍多から蒼を奪いとり、

「……なんで、あなたはいつも私が信用したときに、裏切るんだっ  
！」

信用した　　ということは説得は表面上あまり効果を得られてい  
ないのだと感じていたがしつかり紅音は理解していた。

「私、じゃない……私、じゃないっ！」

「あんた以外……！　だれがいるんだっ！　このことを知ってる奴  
はあんたと私ぐらいでしょっ！」

学校で、ということか。

龍多は紅音が話すの拒んでいた理由はこれだった。

こんな事実、誰にも知られたくない。

龍多だっつてそうだ。

自分が自分じゃないようなことを誰かに明かすなんて絶対に嫌だ。  
(だから、話したくない、か)

「紅音、落ち着け」

龍多も落ち着けるような状況ではなかったが、周りの視線が多少  
は落ち着かせてくれていた。

紅音は龍多が蒼の肩を持つような、蒼を庇うようなことを言った  
ことでさらに激しく暴れた。

「龍多、くんには知られたくなかったのに……ひどい、よ……ひど  
いよ……」

それでも、龍多がいることに気づき、今起きてる事態と照らし合わせて紅音は気づいてしまった。

好きな人に、自分のもつとも嫌うことを知られてしまった。

そう考えると、私は悪くないという感情が渦巻き、結果蒼へとその矛先は向けられていく。

「殺して、やる。殺してやる……！」

止め切れない思いは行動として表れる。

紅音は術式を展開する。

段々と魔法は完成し辺りの温度が上昇していく。

龍多は、異常な事態と理解して逃げ始める生徒を確認する。

危険なのは分かっているが、ここから人を逃がすにはちょうどいい。

紅音の噂は広まる　最悪な方向へ。

龍多は、周りの人たちのおかげで大分頭の中に余裕が生まれていった。

考えられる、いろいろな事を。

龍多は、打って変わって人気が少なくなったここを見回す。

まだ、残っている生徒は龍多が殺気をこめたにらみを利かすとあつさり消えた。

紅音は蒼に今にも魔法を放ちそうだ。

だから、紅音の前に立つ。

「どいて……」

「嫌だ」

「どいてよ」

「やだっつってんだろ」

「何で、そいつを庇うの？ 龍多くんは、なんで……」

「落ち着けつて、こいつは違っつて言っただ、お前はこいつの事を信用できないのかよ」

「一度、裏切られたんだよ」

龍多の後ろ 蒼がぴくっと肩を震わせる。

「それを確かめるんじゃないのか。確かめなきゃ、いけないんじゃないのか？」

「もう、分かった事だよ、そいつが裏切った。今日ので確定した」

紅音はそこで魔法を完成させたのか、こちらに手を向ける。

龍多は、それを黙ってみていたが止める意思がないのを見て悲しげに手を振った。

龍多はそれで術式を解除した。

熱気がもんもんと立ち込めていたのは次第に消え、残されたのは燃えるような表情の紅音と、凍り付いたような蒼。

「龍多、くんも。そいつなんだ。みんな、みんな私を捨てるんだ……！ 私みたいなのはいなくなればいんだよね」

そう言っつて、紅音は背を向け走り去つてしまった。

「紅音！」と叫んだが止まらずに行つてしまった。

「あの子を……追いかけなさい」

声が震えているのは恐怖からではないようだ。

口元の肉を震わせ、必死に怒りを押さえ込んでいる。

「……ちゃんと、紅音と話してくれ」

俺は言い残して、紅音の後を追う。

一日に二回も同じ人間を追いかけるなんて滅多な体験ではないなと自分を鼓舞するように呟いた。

## 二十二話

紅音は、学生寮の屋上にいた。

ここは本来立ち入り禁止だが、紅音は魔法で壊して入ったようだ。後で寮長に怒られるなど龍多は苦笑いを浮かべながら、紅音の隣に立つ。

「……何？」

怒ったような、でも心配されていると考えた紅音の表情は嬉しさ半分悲しさ半分。

龍多は頭を掻き篁り、声を出す。

「おまえ、さ。色々悩み抱えてたんだな」

言う言葉が見つからないのはこれで何回目だろう。

龍多は自分の語彙力のなさにあきれながらも必死に言葉を続ける。

「ホムンクルスとか俺にはよく分からないけど、お前にしか分からない悩みだっていっぱいあったよな。なのに、ずっと一人で生きてきてさ、すげえな」

紅音は『ホムンクルス』という言葉で自分の存在が知られてしまっていることを思い出し、絶望に顔をゆがめる。

龍多に嫌われる、馬鹿にされる。

そんな負の感情が紅音の心に住み着き、憔悴した紅音を圧迫する。

「……私、ホムンクルスだよ？ 化け物だよ？」

「紅音……」

紅音は口火を切ってから、どんどん自分がみじみに感じて、さらに自虐する。

「私……人間じゃないんだよ！！ ねえ、怖い？ きもちわるい？ いったも家の奴は言ってたよ。『化け物だ』『蒼の引き立て役でしかないのにいきがるな』『さつさと処分されてしまえ』って！ ねえ、ねえ！ ねえ！ 龍多くん、私は……化け物なんだよっつ！ ！！」

龍多は、唇をかみ締め静かに怒っていた。

こんな追い詰めた一家を、殺してやりたい。

紅音と同じ目にあわせてやりたい。

子供にとって大事な大人たちが子を虐めるなんて……ふざけている。

龍多は拳を固くしめたが、今は紅音を守るために言葉を投げかける。

「お前は化け物なんかじゃないよ。本当の化け物ってのはただただ怖いんだ。目の前にいるだけで体が凍ったように動かなくなるんだ。そして、大切な人を奪っていくんだよ。紅音は誰も殺さない……なにより俺はお前といて『怖い』なんて感じたこともない。だから、お前は人間だ。誰がなんと言おうと人間だ、それで俺たちの大切な仲間だ」

部活でも、そっだし。

友達でも。

龍多は、紅音を支えようと手を伸ばすが。

紅音はその手を叩く。

紅音の目には怒り、憎しみ、苛立ち、妬み、すべてが織り交ざっている。

普段龍多に向ける笑顔など、ない。

紅音は龍多を敵と認識　一家に向ける瞳をそのまま龍多に向けていた。

「龍多くんだって、いつかは私を捨てる。私を馬鹿にする」

「しねえよ！　お前が嫌がる事なんてするわけねえだろっ。俺は何よりもつまらないことが大嫌いなんだよっ！」

「でも、でも」

拗ねた子供のように紅音は不安げに瞳を揺らし、後ろに後ずさっていく。

龍多は少しの焦りを感じながら紅音の手を何とか掴む。

「俺の目を見るよっ！　さっきからお前は顔をあっちこっち挙動不審なんだよ。だから、真実が見えない。真っ直ぐ前みる」

龍多はキスができそうなほどに顔を近づける。

紅音の瞳に映る自分の姿を見て、自分の想像をはるかに超える怒り顔に驚いた。

（これじゃあ、誰だってびびるか）

息を吸い、脳に酸素を送り顔の熱を下げるように努力する。

「……私は、幸せになっちゃいけないんだよっ！」

「紅音ッ！」

紅音は龍多の腕から逃れ、屋上の端　フェンスを壊し、隅に立つ。

まるで飛び降りようとしているかのように。

「馬鹿なことしてんじゃねえよっ！」

慌てて、龍多は駆け出すが。

「来ないでよっ！」

紅音は火の魔法で龍多と自分の間に火で溝を作る。

龍多はすぐさま解除しようとしたが、紅音が何かを言おうとしているのを見て止める。

「私は幸せになっちゃいけないだよ。私みたいなできそこないの……人間ですらない存在は生きてちゃ駄目なんだよ。誰かに迷惑をかけるなら……私はここで死ぬ」

「誰が決めたんだよっ！　この世界で幸せになっちゃいけないやつなんていねえーよ！　だから、逃げんなよっ！」

龍多が全力で叫ぶが紅音はふりふりと首を振る。

「例えそうだとしても、龍多くんに迷惑かけるもん。だから、バイバイ」

紅音はそういつて目を瞑り、両手を伸ばしたと思ったら。そのままの勢いを借りて、後ろ　屋上から飛び降りた。

「紅音ッ！」

一瞬遅れて龍多が魔法を発動　　身体強化して、走り出す。

「紅音っ！」

龍多が屋上から飛び降りようと顔を出したところに、階下から、女の物と思われる甲高い悲鳴に近い声が龍多に届く。覗くと、下には氷の魔法を使ってクッションを作って紅音を支える蒼がいた。

「あ、お、い？」

紅音が嘘と言いたげに目を見開き、蒼を見つめていた。

「馬鹿、馬鹿っ！　私はあんたが死んだらどうしたらいいのよっ！　私は今まで大切な妹を守るために生きてきたんだから……っ！」

「え……？」

「ごめん、ずっと嘘ついてた。嘘つかないと紅音を殺すって言われて、どうしたらいいかわかんなくて私、ずっと紅音に嘘ついてた。ごめん」

突然のことに、紅音は何を言えばいいのか分からず口をばくばくさせていた。

「さっきまでの浮遊感は？」

「なんだったの私？　と紅音はわけのわからない思考に時間を取られていた。

それでも、二人は少しだけ歩み寄れたはずだ。

龍多は身体強化を解除して、屋上から屋上の出口まで戻る。

「いやいや、まったく演劇を見ているかのようにつまらない」

龍多は即座に声の発信源を感知し、背中から鉄刀を振りぬき斬りかかる。

だが、あっさり腕に止められる。

そこには、美香から送られた写真でみた元当主の　―の家を仕切る人間が立っていた。

## 二十三話 結末

「なんであんたがこんなところにいんだよっ！！」

龍多は鉄刀を弾かれ、後ろに飛ばされる。  
しっかりと両足で着地して叫んだ。

「その口ぶりからだ、私がだれだが知っているようだね」

老人のような見た目とは裏腹に声は渋く、威圧的だ。

龍多は余裕ぶつた笑みを浮かべる。

「俺がちょうど殺したかった相手なんだよ。いい所に来たな」

龍多は鉄刀を地面に引きずらせるような態勢で持ち、走る。

男に近づいた瞬間飛び上がり、体重を乗せた一撃を男にぶつける。  
避けはしない。

最初と同じように腕で受け、にやあつと悪寒が走る笑みを浮かべ  
同じく吹き飛ばす。

なんちゅー頑丈さだと龍多は心中呟く。

「随分と物騒だね。そして落ちこぼれくんが私を倒す？ くだらな  
いな。つまらない」

男は吐き捨て、手を振り上げる。

龍多の近くから強い風が吹きあれ、龍多は目を瞑る。

風は攻撃ではない、龍多が考えた次の瞬間に男は頑丈な右腕で龍  
多を殴りとばす。

派手に飛び、屋上から落ちそうになり慌ててフェンスを掴む。

「くそ、化け物かあいつは」

悪魔と契約しているだけあって強い。

だが、龍多だってまだ本気を出しているわけではない。

龍多は自信に倍加の術式を組み上げ、本気を発動させる。

「らあっ！」

龍多は一気に走りより、正面から一太刀。

腕でガードされ、瞬時に側面に回り、二撃目を入れる。

「ぐっ」

腕ほど頑丈ではないが体も堅い。

刀は食い込まず、押し返される。

敵の背に回るようにして刀を刺す。

また、弾かれる。

「頑丈だな、おい」

龍多はいらつくように言うが男は気にせず、後ろ蹴りを放つ。

鉄刀で受け、バックステップする。

龍多はすぐさま反撃を仕掛けるために動き出す。

何度も打ちつけ、きりつける。

時間にして三十秒が経ったときに、とうとう攻撃が通り始める。

「よし、右腕もらった！」

龍多が振った鉄刀は勢いよく男の右腕をはねる。

男が苦痛そうに顔をゆがめたのは一瞬。  
すぐに腕は生えてきて、元通り。  
やっぱり悪魔の力かと龍多は厳しい顔つきでその様子を見ていた。

「生憎、化け物だからね」

男は右腕で左腕をもぐ。

耳に悪い音を出しながらもいまだ左腕を投げつけてくる。

鉄刀でそれを弾くと。

はじけなかった。

その左腕はとかげの尻尾のように自由に動き、鉄刀を掴んでいた。

「きもちわるっ！」

龍多がそれを床に叩きつけて、外していると、ぶら。

男が龍多の体を弾き飛ばす。

「ちっ！」

空中で態勢を戻し、落下を終えすぐに反撃。

思いつきり胸に突きたてるが……手ごたえはあってもすべて再生される。

龍多だつて闇雲に攻撃しているわけではない。

龍多の持っている鉄刀は悪魔を祓う力を持っている。

龍多が悪魔に貰ったものだ。

効果は薄いが何度も攻撃していれば悪魔の力を弱める事ができる。  
実際に目の前の男の力はどんどん劣化している。

再生速度が完全に落ちているのだ。

本人は気づいていないが。

龍多は回るように切りつけ、そして、脳天から半分に分れるように

思いきり刀を振り下ろした。

男は半分に分かれる。

「なぜだ……!？」

男の体はすぐには戻らず、ゆっくりとくつついていく。

龍多はそれを確認して満足気にほくそ笑む。

「この刀の力だ。そんなもんにも気づいてないとは、随分間抜けだな」

「くそ、死ね！」

男は焦ったように動きが制限されている腕を振り回す。

さすがに半分に分かれていると自由には動けないらしく、子供のわがまま攻撃のようになっていく。

龍多は男の攻撃を無視して後ろに回り斬り付ける。

右肩から右腕までを切断する力。

時間は残り十秒ほどしかないので、最後の止めとばかりに龍多は腕の限界まで振り続けた。

時間切れとなったときには、細切れとなった男ができあがっている。

風にもあつさり吹き飛びそうなものだが、それでも一生懸命に再生しようとしている。

再生速度はありがご飯を運ぶように遅い。

龍多はそれを何度も踏み、完全に潰していく。

これで、終わった。

屋上には一箇所だけ血が溜まり、むごいことになっている。

あまり見たくないそれから視線を外して、龍多は静かに屋上を後にした。

## エピソード

事件から約一週間。

龍多の部屋では二人の誕生日会が始まっていた。  
蒼と紅音のだ。

「んじゃ誕生日ケーキだ」

龍多はあらかじめたのんでおいたケーキを取り出し、楽しげな笑顔を向ける。

まるで何事もなかったかのような仕草で普段どおりに振舞っている。

一の家の当主は突然謎の失踪を遂げた。

真実を知るのは龍多一人だけ。

家は混乱のきわみに達してたのまとめたのが蒼だ。

持ち前の手腕で見事にまとめなおして、忌まわしい風習をなくして、元に戻した。

紅音との確執もなくなり、今では昔のように仲が戻っていた。

龍多は誕生日ケーキを出してから、飲み物買い忘れたと外に出る。

「お前はいつも一人で解決するな」

後を追ってきたのか、涼が後ろにいた。

龍多はなんのことだよと言って、涼の言葉を無視して先に歩いていく。

「別に一人でなんでもやることに文句があるわけじゃない。だが、少しくらいは頼ってくれてもいいだろ」

「なんのことは知らないけどさ。俺は一人で何でもやるのが好きなの。んじゃジューズ買いに行くのついてきて」

「あつそ、まあ、いいか」

龍多はふと、外の景色を見る。

何も間違っではない。

龍多は変わらぬ景色を見ながらそう思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5050u/>

---

龍多とぐだぐだ部活動

2011年8月23日14時19分発行